

325  
502

6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



THE MIND OF PAUL

By

Prof. C. Kajiwara.

梶原長八郎著

パウロの人物と信仰

日本基督教興文協會

325-502



の人物と信仰

大正  
6. 5. 30  
内交

基督教文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

## 自序

大正三年の夏、余は傳道旅行を企て、京阪神各地に主の道を宣へ進んで朝鮮に入り、鴨綠江を渡りて安東縣に入つて見たが、當時夫の福音宣傳の大志を抱いて羅馬の都に往つた使徒パウロの面影を追想して感慨に堪へなかつた。其際懷にして居たのは本著の草案であつたが、爾來尙續いてロマ書に基きパウロの研究に務め、其結果を聖書之友、福音新報、文明評論若くは神學之研究に出したるもの數篇を加へて二十餘篇を得たので、今之を纏めて印刷に附し以て未見の友人に頒ち、偕にパウロの説ける福音を學びたいのが本書出版の目的である。

パウロ研究は我が生涯の事業である、別けても羅馬書一卷に秘められたる彼の精神を探ることは我が二十年來の仕事であつた、而して彼の人格は年と共に益々鮮かに輝て見える、ゼーモス、プライスが「パウロ生れざりせば、將た彼ダマスコ途上に幻を見ざりせば基督教の思想と其教會の歴史とは如何に異なるものなりしや」といつたのは蓋し至言といふべ

きである。羅馬書は順序的であり、論理的であり、進歩的であつて、然かも總括的である。之を神學の書とも修養の書とも見るべく將た救靈新生の書とも觀すべきである。余の本著の如き、想は淺く、文は拙、到底未成品たるを免かれないが、世の羅馬書を讀む人に幾分なりとも裨益を與へることが出来るならば甚だ満足に思ふ次第である。

願くは望を予ふる神、聖靈の能に由りて其望を大にせんがため、信仰に由る諸の喜樂よろこびと平康やすきとを此の書の讀者に充たし給はんことを。

大正六年四月

仙臺北三街の茅屋にて

著者誌す

余を基督に導き給うて今は天  
に在す余の信仰に於ける母ぎ  
みに謹で此著を献す。

パウロの人物と信仰

目次

第一編 パウロの人物

一	キリストの僕パウロ	一
二	大志を抱けるパウロ	一二
三	祈れるパウロ	二〇
四	神の軍人パウロ	二八
五	罪人の首パウロ	三八
六	牧者としてのパウロ	四四
七	世界を對手とせるパウロ	五三
八	傳道者パウロ	六四

目次

第二編 パウロと聖書

九	パウロの意	七二
十	信仰の勇者	八〇
一	パウロと聖書	八九
二	勝ち得て餘りある生涯	九五
三	キリスト教道徳の根柢	一〇二
四	神の子たる者の特性	一二五
五	ロマ書に於ける聖靈の活動	一三〇
第三編 パウロの信仰		
一	萬物の原因としての神	一三六
二	我が神	一四三

目次終

三	我が心を以て事ふる所の神	一四六
四	我等の父なる神	一五一
五	パウロの有てる神の國	一六一
六	パウロの見たるキリスト復活の意義	一六九
七	パウロはキリストを誰とする乎	一七七
八	キリストと偕なる生活	一八一
九	恩寵の福音	一八八
十	パウロの永生觀	一九九
十一	パウロの最高の理想なる神の子	二一〇
十二	神の選良パウロ	二一九

パウロの年表

パウロの生涯に於ける年代を知らんことはパウロ研究者にとりて頗ぶる困難とする所である。今パウロの傳記に關して權威と認めらるゝコニベア・ハウソン兩博士の著「パウロと其書翰」に基きてパウロの生涯の大觀を示し、又彼の各書翰の眞髓と思はれる一點を示すこととした。ゲエテも曾て「書翰は人の身後に残る最も意味深き記念物なり」と云つてをる。若し此に依りてパウロの心情の一片を窺ふことが出來たら著者の幸とする所である。

パウロの生涯の大觀

年	紀元	事
同	三	パウロ、タルソに生る
同	十六—二十六	パウロ、エルサレムに於てガマリエルの下に學ぶ
同	二十	タルソに歸る
同	二十七—三十	イエスの傳道
同	三十一—三十五	基督教會の發達

表



- 同 三 十 五 バウロ再びエルサレムに上る、ステパノの殉教
  - 同 三 十 五 一 三 十 六 バウロ教會を迫害す
  - 同 三 十 六 バウロの回心
  - 同 三 十 六 一 三 十 八 バウロ、ダマスコよりアラビヤに退く
  - 同 三 十 八 バウロ、ダマスコを避けてエルサレムに入りそれよりタルソに  
歸る
  - 同 三 十 八 一 四 十 三 タルソに於けるバウロ
  - 同 四 十 四 バルナバ、バウロをアンテオケに導き異邦人民に働かしむ
  - 同 四 十 五 バウロとバルナバ饑饉に於ける信者のために救済の資金を携へて  
エルサレムに入る
  - 同 四 十 六 一 四 十 七 アンテオケに於けるバウロ
  - 同 四 十 八 一 四 十 九 バウロの第一回傳道
- 第一傳道旅行(徒十三章より十五章三十五節まで)

- バウロとバルナバはクプロ、ベルゲ、ピシデアに於けるアンテオケとイコニオム、ルス  
テラ及びデルベを歴訪したる後シリアに於けるアンテオケに歸る。
  - 紀 元 五 十 バウロとバルナバ、エルサレム會議に出席
  - 同 五 十 一 一 五 十 四 バウロの第二回傳道
- 第二傳道旅行(徒十五章三十六節より十八章二十三節まで)
- バウロ アンテオケを出でキリキヤ、ガラテヤ及び小アジアに於けるトロアスを訪ふ、歐  
洲に渡りピリピ、テサロニケ、ベレア、アテンス及びコリントに往く、バウロ、コリントに於  
てテサロニケ前書を贈り(紀元五十二年?) 又テサロニケ後書を贈る 紀元五十三年?)  
而してバウロ、コリントを去りエルサレムを経てアンテオケに入りガラテヤ人に書を贈る
- 紀元五十四—五十八 バウロ第三回傳道
- 第三傳道旅行(徒十八章二十三節より二十一章十六節まで)
- バウロはアンテオケを去りエペソに往き此處に留まること三年(徒十九章十節と二十章  
三十一) 此處より哥林多前書を贈る(紀元五十七年?) 而してマセドニヤに往き此處より

哥林多後書を贈る、遂にコリントに入り此處にてロマ書を認め之をロマ人に贈れり。紀元五十八年) コリントを去りピリビ及びミレトスを経てエルサレム 徒二十章十七節—三十七節参照) に上る。エルサレムに於て捕縛の身となりカイザリヤに送らる。

紀元 五十八 年 エルサレムに於て捕はる

同五十八—五十九 年 カイザリヤに於て獄に入る

同 六 十 年 (a) フェスタス、パウロをロマに送る

(b) パウロ、マルタ島近海に於て難船に逢ふ

同六十一—六十三 年 パウロ、ロマに着す。パウロ獄に在り、ピリビ書、コロサイ書、ビレモン書及びエペソ書を贈る。

同 六 十 三 年 パウロ獄を出づ

同六十三—六十五 年 パウロ、マセドニヤ、小亞細亞、クレテ及スペインに往く、テモテ前書とテトス書とを贈る

同 六 十 五 年 パウロ復た捕はれロマに送られて入牢。テモテ後書を送る

同 六 十 八 年 パウロ、ネロ帝のために首斬らる

パウロの書翰の年代順序及特質

書名及順序

場所 年代

特質

第一 テサロニケ前書

コリント (ハーナツク、四十八年—四十九年)

第二 テサロニケ後書

コリント (ハーナツク、五十二年—五十三年)

第三 コリント前書

エペソ (ハーナツク、五十七年)

第四 コリント後書

マセドニヤ (ハーナツク、五十七年)

第五 ガラテヤ書

コリント (ハーナツク、五十七年)

第六 ロマ書

コリント (ハーナツク、五十八年—五十九年)

世の終末、イエス・キリストの再臨

使徒時代に於ける教會の狀態

パウロ自身の面影

パウロ、エダヤ教徒を辯駁す

パウロの福音『我が福音』

此四書は一名『獄中の書』と稱せらる

第	エペソ書
三	コロサイ書
三	ピリピ書
三	ピレモン書

ロマに於ける 六十二年  
 (ハーナツク、五十七年—五十九年)  
 同 六十二年  
 (ハーナツク、五十七年—五十九年)  
 同 六十二年  
 (ハーナツク、五十七年—五十九年)  
 同 六十二年  
 (ハーナツク、五十七年—五十九年)

異邦人の教會に對するパウロの使命  
 コロサイに於けるノスチツク派の前兆  
 ロマ入獄中の状態。欠乏を補へる人に對するパウロの感謝  
 信徒の家庭(奴隷廢止の先驅の書ゴデー)

(パウロ 出獄六十三年)

第	テモテ前書
四	テトス書
四	テモテ後書

マセドニア 自六十三年  
 (ハーナツク、五十九年—六十四年)  
 及クレテ 至六十五年  
 (ハーナツク、五十九年—六十四年)  
 パウロ再ロマに於て入獄の際 六十七年  
 (ハーナツク、五十九年—六十四年)

牧師と  
 教會論  
 其會友  
 パウロ最終の面影

# パウロの人物と信仰

## 第一編 パウロの人物

### 一、基督の僕保羅

使徒パウロが羅馬人に送つた所謂羅馬書は、之を宗教的實驗の書として見るときは信仰生活をなす者にとりて無上の寶典であり、更に知識的方面より言はゞ基督教神學の基礎をなすものとして、常にパウロがものせし諸書翰中の傑作たるのみならず新約聖書中の白眉であるといふも強ち溢美でない。さればこそコリント書に「こは人の曾て書ける物の中に最も深玄なるものなり」と歎賞した。またカルヴァンは「羅馬書は聖書に於ける凡ての寶物の門扉を開きしものなり」と言ひ、ルターは「新約中の重大なる部分にして又完全

なる福音なり』と云つて羅馬書を褒めた。更にゴデーは『羅馬書は基督教的信仰の本山なり』と斷じて居る。斯く列舉してゆけば際限はないが、兎にも角にも羅馬書は我儕の信仰生活に無くて叶ふまじき不朽の經典であることは以上掲げたる諸大家の明言これを證して餘りあるものである。遮莫羅馬書其物の解釋を試むるは本論の目的でない。題して『基督の僕保羅』とせし所以のものは、斯ばかりの良書、斯ばかりの珍籍、否斯の如き千古不朽の大聖典を著述したる偉人保羅の人格と信仰とに就て聊か平素懷抱する卑見の一端を披瀝せんとするに外ならぬ、もとより余は彼保羅の全傳を盡す時間と紙面とを有たないのであるが、唯年頃余が羅馬書を愛讀するうちに接觸し親炙したる大聖徒の面影の幾分を述べて見たいと思ふのである。ゲエテは嘗て『書翰は人の身後に残る最も意味深き記念物なり』と云つたさうであるが、實に書翰ほど其人の天真を流露するものはないのである。保羅の傳記もコニベヤ、ハウソン等の著書を筆頭として、汗牛充棟もたゞならざるほどある。さりながら余に於ては羅馬書第一章一十七に顯はれたるより更に能く顯はされたる保羅は他に之を發見することはできぬ。これは殆ど保羅の自叙傳と稱して可なるもので、使徒保羅

の信仰人格及び其使命を、隠れたる深い處まで短かき言葉のうちに遺憾なく言ひあらはして居る。誰人も此處を讀めば明鏡にかけて見る如く、一目瞭然に保羅の眞の倂を見ることが出来ようと思ふ。

(一) イエス・キリストの僕パウロ

これは羅馬書第一章の劈頭の一句であるが、或人は『僕』を『奴』と譯した。何れも適譯であるが保羅の精神から云へばイエス・キリストの侍士或は近衛若くは武臣とした方が更に善くはないかと思ふ。それは兎に角、保羅は悦びて、自をイエスの僕と呼んだ。彼にとつては他の如何なる名稱もこれに及ぶものは無かつた様に見える。舊約聖書を見るとモイセも屢々自を『エホバの僕モーセ』と云つて居る。然しながら『僕』と云へる言葉の意味は保羅に由つて一層新しくせられ、強くせられたのである。保羅が自らを呼びし『僕』なる一字には絶對的奉仕の大精神が籠つて居る。一字に千鈞の重みありとは蓋し斯の如きを謂ふのであらふ。しかも保羅は口に僕と稱へしのみならず能くこれを實踐躬行した。彼は身を以て『僕』の生涯を送つた。ダマスコの異象ありて後の彼は實に絶對的奉仕の化身

であつた。彼の魂は造次にも顛沛にもイエス・キリストより離れなかつた。遂に『もはや我れ生けるに非ずキリスト我に在りて生くる也』(加二の廿)と信仰の極致に達して、『僕』なる言葉の意義と深趣とを妙じくも體得實現した彼の生涯こそは、實に我儕クリスチャンの景慕措く能はざる所である。

(二) 召されて使徒となり

保羅の使徒となりしは自らの意志によるに非ずして、全く神の召によるのである。即ちナザレ宗迫害の急先鋒となり手傷猪の荒れ狂ふ如く基督教會を悩まして止まざりし保羅が、紫電一閃ダマスコ城外の異象に遭ふや立所にイエスの聖前に兜を脱ぎ、召されて其弟子となり使徒となりし事は人の知る所である。故に彼は自ら『召されて使徒となり』と云つたのである。使徒とは『遣はされたる者』を意味するのであつて、或意味に於て神の代表者である。保羅はとりもなほさず、イエス・キリストの全權大使であつたのである、さもあらばあれ嘗ては教會をせめなやましし背教者の張本たる自己を斯くも召し給へるイエス・キリストの海よりも濶き寛大と、こよなき恩寵とに對して、保羅は如何ばかり感激の血潮を

胸に沸かしたことであらう。士は己を知る者の爲に死すと云ふ。保羅が『我儕何處へ往くにもイエスの死を身に負へり』と叫び、生命も魂も凡てをキリストに捧げて福音の宣傳に努めたるは決して偶然ではなかつた『キリストの愛我儕を勵ませり』と云へる言葉の中に、如何に彼がキリストより召されたる恩寵に感激して居つたか推し量られるのである。

(三) 神の福音の爲に選ばれる

保羅の選びを受けしは神の福音の爲であつた。福音の宣傳は保羅が唯一の使命であつた。彼は之が爲めに聖別せられたのであるが、とりわけて主は彼に命ずるに異邦教化の大任を以てした。『主いひ給ひけるは往よ彼は異邦人の前に我名を擔はしめん爲めに我が選びし器なり』と使徒行傳九章の十五に記されてある。また保羅自らも此の事を無上の光榮とし誇りとして居つた事は左の聖句にて明かである。

『我は異邦人の使徒なるが故に我職を重ぜり』(羅十三) 『我が割禮を受けざるものに福音を傳ふることを託ねられしを見』『我にも能力を與へて異邦人の使徒となせり』『我儕は異邦人に至り彼等は割禮を受けたるものに至らん爲なり』(加二の七)

以上の外尚此種の聖句は諸所に散見するが、兎に角にも保羅は斯く異邦教化の大使命を自覺し、其の爲に畢生の心血を灑いだのである。基督教が蕞爾たるユダヤの天地より出て、世界を風靡せる所以のものは實に大使徒保羅の賜物である、彼は國土人種を超越したる世界的觀念を以て福音を宣傳した。彼の眼にはギリシヤ人ユダヤ人の區別はなかつた。「我儕彼より恩恵と使徒の職を受くこれ其名の爲に萬國の人々をして信仰の道に従はしめんとてなり」(羅一の五)彼は此確信と希望とに堅く立て、恰も疾風の枯草を席卷する勢を以て道を行き、天下に傳へ、萬民をして十字架を仰がしむる基を開いたのである。

(四)「我等彼より恩恵と使徒の職を受くこれ其名の爲に萬國の人々をして信じ従はせんと也」(ローマ一)

彼を召し、彼を選びたるものは復活せるキリスト自身である。「我等彼より恩恵と使徒の職を受く又曰く「我は主イエスより受し職即ち神の恩の福音を證するを遂げんためには我が生命をも重んぜざる也」(行二〇)「受く」といふ一句に面白みがある、彼は學んで之を得たのではない。又聽いて之を得たるにもあらず主より自ら請しなり。使徒の職を主より請し

なり。受けるとはパウロが數々言ふ所にして(哥前三)に於ては「我自ら受けし所也」といふ使徒の職はパウロが確乎と主より請取ることにして其職の爲には「我生命を重んぜざるなり」と言ひ得る程に其心の奥に徹底的に獲得したのである。其職を一身に引受けたから無量の興味が湧いて來たのである。所謂威武も屈する能はず富貴も移す事の出來ない威力を増したのである。(約三ノ二七、行一ノ五)

本文ローマ一の五を玩味すれば其使徒職を受けた目的や又は使徒として活動の範圍又は其方法をも能く洞察することが出来る即ち、

(1) 其目的といはゞ、律法を知らせんとせしにはあらず、唯萬人を導きて「信仰の道に従はせんと也」眞に信仰と服従とは生命に入る要素であつて之れが無れば到底キリストの心などが分かる譯には往かぬ。パウロは「諸の思意を擒にしてキリストに服はしむ」といふ居るがキリストの徒たるものは斯くあらねばならぬ。

(2) 其區域を問はゞユダヤの一國に限られたるには非ず世界的である、キリストの道は一郷土のものに非ず、又一邦國のものにあらずして其相手は「萬國の人々」である、「是故に汝

等往きて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子となし」とは主イエスの大命である。

(3) 其方法を問はゞ多様あるに非ず、唯復活の事實に由り神の子として顯はれたるイエスの名によることである。即ち、

『其名の爲に』とパウロは明に宣言せり。此福音は凡て信する者を救はんと神の大能たればなり」とあるを見てもパウロの福音は世界的であつて救を受くる唯一の條件は信の一字に在ることが解かる。斯く「萬國の人々をして信仰の道に従はしめんと」したのがパウロの大精神であつて「往けよ彼は異邦人及び王とイスラエルの子孫の前に我が名を擔はしめん爲に我選し器なり」とキリストの大命を遂げたのである。

(五) 今(ローマ一七)に於て彰はるゝパウロの心を見るに、同情、信賴、謙讓、又は、自覺の精神は最も強く又深く活躍して居るのは恰も地下千丈の巖窟より滾々として湧出する泉に似たり。

(イ) 同情 九ノ「我は不斷汝等を懷ふ」(ラゲ氏は之を「斷えず汝等を記念し」と譯す)之

れはパウロが其友を懷ふ温情であり其友に對する表情である。其他のパウロの書翰を見れば「汝等恒に我儕の心に在て共に死に共に生きんと欲へばなり」(哥後七)「我小子よ我汝等の心にキリストの狀成るまでは復び汝等の爲に産の劬勞をなす」(加四ノ)之らを見てもパウロは非常に同情の強い人であつたと分かる。

(ロ) 信賴 「終には神の旨に適ひて……速に汝等に至らんことを求む」(一ノ十、二ノ十八、十二) 彼は如何なる計畫を立てるにも且つ如何なる動作をなすにも、専ら神の旨に適はんことを求める。彼は其全生涯に於て攝理の聖手の活動ことを認識した。

(ハ) 謙遜 パウロは此所にロマ人を見んことの願望の目的は彼等を堅固にせん爲に靈の賜を予へんとするに在と陳ぶ、基督の道を我も信じ人にも教へ、聞しむるばかりである。即ち「我れ汝等の中に在らば、相共に安慰を得べし」パウロの如き大なる使徒にして汝等の中に在らばと云ひ、又は相共にと云ふパウロの謙讓の心を見るときが出来る。此處がパウロの心が見らるゝ處で、「我汝等を高くせんが爲に自ら卑りて」(哥後十)といつた。嗚呼使徒パウロの謙讓眞に掬すべきである。

(三) 自覺 (十四) 讀みて此處に至ればパウロの自覺は甚だ確實にして自己の責任の重大なるを認むるを見る、傳道の精神はあがりあがりて夏の日の如し、これ『己の欲する所は之を人に施すべし』といふを實驗した證據である、此處に『我……我……我……』と三度も彰はれて居る、我は負へる所あり。……我は福音を耻とせず……我は福音を傳へんことを欲す』其自覺と云ひ又は抱負と云ひ偉大なる哉パウロの精神！ 學問の上から言うても信仰の上から言うても非凡な人物である、浮いた心で傳道をしたのではない、生命を懸けて眞劍に行つたのである。我等同勞者の中にも數々耳に入ることであるが其職に就くを以て犠牲又は献身などと云ふ、パウロは斷じて曰ふ『我は負へる所あり』又曰く『若し我福音を宣傳へずば實に禍なり』面白き事にはピリ・サンデーは之を譯して『若し我福音を宣傳へずば地獄に往く』と嗚呼壯なる哉パウロの傳道の精神！ 『もし遣れずば何で宣ぶることを得んや、録して和平なる言を宣へまた善き事を宣ぶる者の其足は美しき哉とあるが如し』とパウロ自身が引照するのは決して偶然な事ではない、『我は負へる所あり』我は之れが爲に全身を投ずるはあたりまへ以上の事をなせるにはあらず。之れは『我負債』で償はざるべ

からざるものである。我は斯る恩寵を蒙るからには我一個に於て私すべきにあらず、『我れ福音を宣傳ふと雖誇るべき所なし己を得ざる也若し我れ福音を宣傳へずば實に禍なり』

(哥前九ノ十六)

カントは『人格とは責任の主體である』と云うたさうだが、今やパウロは自分の負ふべき責任を自ら覺りて自分が受けた恩寵を天下萬人に頒たねばならぬ事を宣言したのである。又曰く『我れ力を盡して、福音を傳へんことを願ふ』思ふに、願ふといふ字の意義は内に熱すといふやうなる意味が含まれてゐるから、福音を傳へんと欲するパウロの心中に燃え上りつゝある熱情を示すものであります。パウロは天より火のバプテスマを受けて萬物を動す火力を有つてゐる。パウロは今や古羅馬に入り物質的權力に對抗せんとする。當に此氣概がなければならぬ。『我は福音を耻とせず』パウロが執りたる武器は眞に貧しき武器なり。然れども人の智慧と能力とによるものではない。ナザレのイエスの名を以て偉人の像又は其城壘を突破せんとする。此の力は敵軍を攻撃するには、機關砲よりも大なり、要塞を破壊するには攻城砲よりも猛なり。キリストの僕として豈此の力なかるべけんや。



我は主イエスの福音を耻とせざる也。否進んで我同胞に之を宣傳へんと欲するのである。我等の福音は人の力によらず神より出づる大能なり。神の軍勢たり、ダイナマイトたればなり。『工匠の棄てたる石は家の隅の首石となれり』とは即ち此事である。『この石の上に墜つるものは壊れ、この石の上に墜つれば碎かるべし』といへるは眞なる哉。

而して我等の福音の範圍を問はば、萬民的即ち人誰にても凡て信する者を含有し、其方法を尋ねれば、唯信の一字に存す即ち其名を信する者(約一)『凡て信する者を救はんと神の大能たれば也』とはロマ書の劈頭に於てパウロの絶叫する所是れ即ちパウロの福音にしてロマ書全體の眞髓たるなり。我等は深くパウロを學びパウロの心を得て、神の大能たるキリストの福音を宣べ傳ふべし。今や我等は道の普及を務むべき千載一遇の好機に會せり。『天地に萬古あれども此身再び得ず、人生百年此日最も過ぎ易し』と古人は謂へり、我等は天よりの能力を受けパウロの勇氣と熱心とを以て主キリストの福音を傳へん。

## 二、大志を抱ける保羅

靴工ウイリアム・ケレイ今や大志を抱いて印度に向はんとするや「なんぢ幕屋の中を廣くし」(賽五十)との聖言を擧げ、我將に「神の與へ給ふ偉業を期待し神の爲に大事を畫策すべし」と宣言せし事は今尙美談として残つて居る。假令如何なる人にもせよ斯る精神を以て活動するものは常に向上し、進歩する。人力の及ばざる處天よりの大能が加はるのである。孟子曰「士尙志立志要高不要卑」と人は須く高尚なる大志を抱かねばならぬ。大望なきものは枯木死灰の如きもので、潑瀾たる生命より來る無限の成長が無い。「據らば大樹の下に據れ」で我靈魂をして神の大望に依らしめ、彼の中に在りて呼吸せしめねばならぬ。福音新報記者は其千三十二號の「志と信仰」に於て信仰はキリストに於ける志であるといはれたが、日夜至上者を俟ち望む者は其思想益々高尚になり、其品性も亦愈々高潔に進む譯である。箴言にも人は其心に思ふ如く其品性も亦然れば也とあるが實に然りである。其人の抱ける志は其人品を表はし又其人の將來を預言して居るのである。使徒保羅は信仰の偉人であると共に又希望の勇者であつた。兄弟よ我みづから之を取れりと意はず惟この一事を務む即ち後にあるものを忘れ前に在

るものを望み神キリスト・イエスに由て上へ召て賜ふ所の褒美を得んと標準に向ひて進むなり(腓三ノ)

彼の大望心は死に至るまで地に落ちなかつた。マルチノの所謂基督者の生活の追求努力とは即ち是である。能く志を立つ、故に精神が旺盛である。

嗚呼丈夫世に立つ、大志なかるべからず、我儕キリストの徒をして須くケレイの勇あり、パウロの熱あらしむべきである。

保羅は燃ゆる燐の如き大望心を以て何を志したか、「兄弟よ我心に願ふ所と神に祈る所はイスラエルの救れんこと也」(羅十二)と云うて居る。保羅が「兄弟よ」と呼び出づる時は何時も胸中に兄弟を懐ふの精神が充ち溢れて居る。而して又何物をか彼等の爲に與へずば已まないといふ至誠が發露してゐる。(羅七ノ一、十)又「我が愛する者よ」と明らかに云うてゐる。此一語の中には非常な意味がある。彼の無限の愛心が籠つて居る、否、愛の結晶物である。パウロは斯くイスラエルの救はれんことを願ひもし祈りもした。而して此大望を成就する方法を彼は何處に見出したかと云へば、只主イエス・キリストの福音ある

のみと確く覺悟した。彼は羅馬書中に「神の福音」と云ひ、「キリストの福音」「其子の福音」遂には「我が福音」とまで云うてゐる。福音といふことは他の使徒等も數々云うてゐる。けれども「其子の福音」とか「我が福音」と云ふ語はパウロの獨特の語であつて使徒行傳中には「神の恩の福音」とも云うて彼は「此神の恩の福音を證する事を遂げんためには我が生命をも重んぜざる也」(徒廿)とさへ云うてゐる。パウロの願望は其忠誠と共に日月の如く吾人の前に輝いてゐる。これは貫徹しなければ休まない願望であつて之が爲には縲紲と死をも辭さなかつたのである。彼は又「我福音を宣べ傳ふると雖も誇るべき所なし、已むを得ざるなり。若し我福音を宣べ傳へずば實に禍なり」(哥前九)と叫んでゐる。此の福音の爲ならんには假令燃ゆる火を分つも敢て意とする所に非じとの強い傳道の精神が現はれてゐる。彼は此の誇る可き神の全能なる福音を一度受けてより勇往邁進の精神は日夜止む時なく、萬民救済の大願成就の爲に生き、之が爲に獅子奮迅の勢を以て活動し得たのである。

然り而してパウロの志や唯一つあるのみにして又終始一貫せるものであつた。羅馬書

の劈頭第一節に於て我は「神の福音の爲に選ばれる」と主張し、同書卷末に於ても亦「エルサレムより徧くイルリコに至るまで其福音を傳へさせ給ひしことの他は一の言をも我敢て曰はざる也、且つ慎みて他人の置し土臺に建てじとイエスの名の未だ稱へられざる所に福音を宣傳へたり」(羅十五ノ十九、廿)

パウロの大望はキリストの福音を宣傳して獨りイスラエル人のみならず、普く萬國の人々を救済することであつたが、抑も彼は此の福音に於て何を實驗したであらうか。即ちイエス・キリストを信すれば如何なる罪人でも必ず其信仰によりて救はれると云ふことを彼れ自ら經驗したのであつた。救とは、イエス・キリストを深く知り、彼の心を悟り、他念なく自己を彼に託して全く彼れに信賴することである。イエス・キリストに於ける知識と信仰とを以て本とするのである。故に救に入らんとせば、先づ信を起してかゝらねばならぬ。使徒ペテロの如く「主よ我儕は誰に往かんや永生の言を有てる者は爾なり、又われら信じて知る、なんぢは活ける神の子キリストなり」(約六ノ六十八)と只キリスト御一人より外には依り絶る方は無いと信じて、全身全靈を彼に一任して唯命惟れ従ひ彼の爲すがま

ゝに順服することである。信じて知るとは救に入る唯一の道順である。更に聖書によりて考ふれば「彼子を生まん其名をイエスと名くべし蓋其民を罪より救はんとすれば也」とあつて、アレキサンダーは凡て彼の神學は此一句の中に含まれてをると云つたが、イエスの救主たる所以は實に其民を罪より救ふにある。福音書並に書翰を検するに「凡て信する者を救ふ」(ロマ一)「それ人は心に信じて義とせられ口に認はして救はるゝなり」(羅十)「凡て主の名を願求る者は救はるべし」(羅十ノ十三)「況て彼に由て怒より救はれざらんや、況て和を得たる今その生けるに頼りて救はるゝことを得ざらんや」(羅五ノ九、十)とある。

救には罪より救はるゝ外尙ほ一つの意義がある。それは勝利である。人生の患難困苦ありとあらゆる迫害に對して「此等の事に勝ち得て餘りある」勝利者とせらるゝのである。勝利の秘訣は只キリストを愛し彼を信するにある。「それ神は預め知り給ふ所の者を其子の狀に倣はせんと預め之を定む……又預め定めたる處の者は之を召き、召きたる者は之を義とし、義としたる者には之に榮を賜へり」。

羅馬書の研究に於て一權威たるサンデー氏は之を名づけて救に入る向上的階段なりとせ

られたが、神より榮を賜ふに至つて始めて救を全うして神の子の状に倣ふことが出来たのである。

救の方法は律法ではない、唯だ「キリストの福音」である。此の福音は聖俗混交すべからざるもので、彼の傳ふる福音は即ち「……聖書に誓ひ給へるものにて其子我等の主イエスキリストを指して示せり」。(ロー二)、パウロの福音の中心はイエス・キリストにして「甦りし事によりて明かに(權威を以て)神の子たること顯はれたる神の子キリストの福音である。

パウロの眼中此の福音を措いて他に福音は無いのである。「キリストの恩を以て爾曹を召したる者を爾曹が如此すみやかに離れて異なる福音に遷りし事を我怪しむ。……我儕にもせよ、天よりの使者にもせよ若し我儕が曾て爾曹に傳へし所に逆ふ福音を爾曹に傳ふる者は誑はるべし」(六一八)其言の如何に猛烈を極むるかを見よ、彼は神の福音を混亂することを許さなかつたのである。モットは學生有志傳道會に於て現代世界傳道の機會に於ても亦危険に於ても前古無比の位置にあることを論じた、曰く「今日世界の國民は多くは煉り直

されつゝある。之を固まらぬうちにキリストの模型に入れねばならぬ、國民的の自覺、民族的愛國心の潮が何處にも高まりつゝある。基督教は之に乗じ之を善用せねばならぬ。又一方には非キリスト教の文明が恐ろしき勢を以て基督教國の肺腑を犯しつゝある。折衷、混交主義が非基督教國のみならず西洋諸國にも傳播しつゝある」と論じて居るが、吾人の最も恐るゝ處は折衷混交主義で、今も昔も基督教にとりての誘惑である。アレオ山の説教を見れば、パウロも初は幾分か此混交主義に囚はれかゝつたやうであるが、其成績は意外によく無かつた。「此の嚆者何を言はんとするか、パウロは此時自ら悟る所があつたに相違無い」彼ケンクレアに在りしとき誓願に因りて髪を剪れり」(行十八)「蓋し我主イエスキリストと彼の十字架に釘けられし事の外は汝等の中に在りて何事をも知るまじと意を定めたればなり」との言を見れば、彼は傳道の眞實の成功は只純福音によりて收むべきものなる事を深く實驗せしものゝ如し。パウロの傳ふる福音は折衷混交主義の福音でない。「キリストの福音」であり「我が福音」である。水を混交せし酒は下戸も酔はず、迷信に沈み罪に毒せられつゝある我が國民を救済するには神の大能たるキリストの福音によらなければなら

ぬ。是れパウロが心血を灑いで異邦人に宣傳した「我が福音」である。  
我が親愛なる同労者兄弟よ、借問す我國現在内外の狀態程福音宣傳の切迫を告げてゐるものはない。諸君の福音は何か。眞に生命あり、權威ある福音は實に「キリストの福音」にして又「我が福音」でなければならぬ。

### 三、祈れる保羅

「看よ彼祈り居るなり」(行九ノ)

「蓋し我祈禱の中に斷えず汝等を紀念す」(一ノ九)

羅馬書全體を一々攻究すれば、パウロの神に對する概念は誠に深刻であつた事がわかる。その概念の高遠なるを悟る時に、パウロの祈禱の精神の常に生々として活躍して居つた原因も亦明かになる。

聖書に於ける最も有益な問題の一つは神と人との會合の記事である、特に彼のアブラハム、ヤコブ、サムエル、又はペテロ、パウロの如き人々の神と談れる例證は最も深遠なる

興味を有して居る。

パウロが世界を對手としてキリストの福音を傳へんとした燃ゆるが如き精神の原動力は祈禱であつた。ライマン、ピーチャーは「世界に於て最も強き力は神の愛を以て點火せられたる心である」というて居る。パウロの神に對する心は其祈禱の中によく顯れて居る、彼の神學も又同胞を愛する精神も共に祈禱の中より湧き出で、居るのである、彼の生涯に一點の私あるを認め得ない「手にものもたで十字架にすがる」とはこれパウロの心と言ひあらはせるものとも云ふべく、實にパウロの眼中には自分といふものは無かつた。唯キリストあるのみにして彼の心は空であつた。故に彼はキリストを眞に救主として受容れたのみならずキリストと共に十字架に釘けられたのである。「既や我生けるにあらずキリスト我に在りて生くる也。」(加二)といふものは是である。

キリストは山上の垂訓に於て開口第一に「心の貧しき者は福也」と云はれたが、これこそパウロの心の如き心を有てをる者を指したのである。罪ある「私」を先づ心の外に逐出し虚心になる、これ心の貧しき者にして神を求むる者の態度でなければならぬ。パウロが他の使徒

達よりも多く用ゐた文字は「服従」といふ語である。ペテロの如きは僅に一度用ゐたばかりであるが、パウロに至つては羅馬書のみにも數回用ゐて居る。

「我儕彼より……其名の爲に萬國の人々をして信仰の道に従はせんと也、」

「一人の順に由りて多く義とせらるべし、」(十九)

「或は順の僕とならば義に及ばん」(十六)(一五)

「世の成らざりし前より隠藏たりしかど萬國の民をして信じ服はしめんが爲」(二十五)

「我儕は……諸の意志を擒にしキリストに従はしむ。」(哥後十)

といふが如くパウロの心は専らキリストに服従する事であつた、眞實に心より服従して始めてキリストが能く解るのである。

「人若し我を遣はし、者の旨に従はし、此教の神より出づるか又己に由て言なるかを知るべし」と主は言ひ給うた、服従は實に靈的生命の機關である、自己を空にして服従すべきである。

餘程以前の事だが「日本」といふ新聞に次のやうな文が載つてをつた。

新世説

一書生あり南隱の草庵を叩き大に禪理を論じ南隱を窮せしめんと欲す、南隱之に茶を薦む、其未だ喫せざるに及び將に更に之に斟まんとす、書生辭して曰く、盈てり斟めども亦入らずと、南隱聲に應じて曰く、邪心満てり理も亦入らずと、書生翻然として悟る。心中「私」が充滿して居る時は眞理も解し得ず、又天來の聲も聞くことが出来ぬ、心貧しくして始めて、祈る心が湧き出づるのである。

(一) 倅パウロは祈禱の精神に充ち満てる人であるが、羅馬書に表れた彼の祈禱を檢するに日の出のやうな勢が見える、試に羅馬人の爲に捧げた祈禱を見よ、「我れ祈るごとに不斷汝等を懷ふ」(九)と、パウロと主に在る兄弟達との温情は誠に濃かなものであつた、此の冷たき世に在りて斯かる温かさ友をもてる者の福や如何に！。ヂョーヂ・ミューラー氏は其演説中に左の言を云うて居る。

「或は私の信仰を神様の特別な賜の如くにいふ人がある、然しそれは誤である、私の信仰も他の人々と異なる所はない、唯段々之を活用して居る間に少しく成長した丈のもので

ある」と

或る恐るべき時に會してワシントンに熱心に神に祈りて助けを求めて居つたが、クエー  
カー宗の者が傍に居て之を聞き「自分は戦争を信するものではないけれども此人の祈る方  
は必ず勝利を得べきである」といつたといふことである

千八百四十四年に於て特別に五人の友を心に憶うてミューラー氏は其人々の爲に祈ること  
を始めた、其五人の人々は彼が自分等の爲に祈つて居ることを知らなかつたが、その祈が  
神に達し十八ヶ月の後に第一の友は悔改して神の僕となつた、而して最後の友は四十年の  
後に信者となつたとの事である、人をキリストに導くにも祈禱が第一である。パウロは同  
胞の爲に涙を澀いで祈つた、亦自分のためにも祈れよと同胞に向つて願ふ情も痛切であつ  
た。

「此故に汝等儆醒せよ我三年の間夜も晝も斷えず涙を流して各人を勧めしを憶ふべし」

(行廿一)

「兄弟よ我儕の主イエス・キリストにより聖靈の愛により汝等に勸む願はくは我と共に力

を竭して我が爲に祈ることを爲よ」(ロマ書十)

彼の祈は戦闘であり、角力であり、又満身の努力であつた。

(二)パウロは羅馬人に「祈禱を恒にせよ」(羅十二)と勧めたが彼自身も常に祈禱の中に生活  
した、實に心も身も悉く祈禱に充滿して居つた、彼は眞心をこめて祈つた、單に唇と詞との上  
の祈ではなかつた。

「我儕の主イエス・キリストの父……に跪きて願ふは其榮の富に循ひ其靈を以て汝等の衷  
の人を剛健にし」(弗三十六)

「兄弟よ我心に願ふところと神に祈るところはイスラエルの救はれん事なり」(羅十)と  
彼の祈は單なる發聲ではなかつたのである。サムエルの母ハンナが神殿に祈つた時には眞  
情溢れて聲は出なかつた、「ハンナ、エホバの前に長く祈りければエリ其口に目をとめたり  
ハンナ心の中にもいへば只唇うごくのみにて聲きこえず」(母前一十)と記されてあるが  
パウロの祈は實に「心より神に祈る」祈禱であつたのである。

(三)祈禱は神に献ぐる聖き祭物である、神の福音の祭である。(羅十五ノ十六、一三)「エホバよ

朝に爾我聲をさゝたまはん、我朝に爾の爲にそなへして俟望むべし」と保羅が「神に祈るところ」といふのは「神に向つて」又は「神に對して」といふとで、之は全心を専ら神に向ける態度を示したものである。心が純ら神に向ふとで、他を見ることがないのである、心は神に聴く故に他に聴くことがないのである、一向専念である、心のあらん限りを神に集中して恰も猫の鼠を捕ふる時の如くでなければならぬ。

パウロが羅馬書を認めた際には自分の眼前に羅馬人を置き彼等の爲に神に祈り、彼等に「祈禱を恒にせよ」と勧め、身自ら之を實行したのである、祈りては又祈り、祈りては書き、一段一段と祈禱の精神に深入りしたもののやうに見える。

「林深響奔易」

とは靈運の言なりと聞いて居るが、パウロの祈は深林奥深く響く如く高遠深刻なものである。彼の心の深みを探らんと欲せば、彼自らの告白を讀むに如くはない、「多くの忍耐にも患難にも窮乏にも困苦にも打たるゝにも獄に入れらるゝにも擾亂の時にも勤勞にも睡らざるにも食はざるにも……」等人生の不幸其一身に集つたが、彼の信仰は斯かる悲境にありて渺

しも動かずして「憂ふるに似たれども常に喜び、貧に似たれども多くの人を富まし何も有たざるに似たれども凡ての物を有てり」と言ひ得たのである。これ蓋しパウロが神に對つて捧げた祈禱の賜であらう。

「我儕の主イエス・キリストの父即ち天と地に在る諸族の彼に由りて名を得し者の父に跪きて願ふは其榮の富に循ひ其靈を以て汝等の衷の人を剛健にし、」(弗三ノ十)

又「キリストをして信仰に由りて爾曹の心に居らしめ又爾曹をして愛に根ざし愛を基として諸の聖徒と偕に測るべからざるキリストの愛を知りその淵さ、深さ、長さ、高さを識らしめ又すべて神に満てるものを爾曹に満たしめ給はんこと也」

とはパウロの衷心より湧き出でたる最も雄大にして莊嚴なる祈禱の一つである。

嗚呼祈れる保羅、その高潔なる心と氣高き姿とは千載の後までも神の子どもの模範である。



#### 四、神の軍人パウロ

信仰は戦争である。信仰の生涯は戦争の生涯である。かるが故に軍人たる覺悟がなく、信仰を完うすることは出来ない。アブハムも神の軍人であつた、モーセ、ヨシユア、サムエルも選ばれたる軍人であつた。ダビデの如きは古今獨歩の名將軍であつた、新約に入りても使徒等は皆雄々しき軍人であつた。生命を神に献て勇しく戦つたのである。神は此等の軍人を指揮して「従前より其預言者たちに託りて聖書に誓ひ給へる」福音を全地に宣傳し給うた。ブリス大將が自ら救世軍を組織し、數多の有爲なる士官を萬國に派遣して救世のことに當り、以て聖國を此世に建設せんとして居るのは愉快なことである。

思ふに哲學者は哲學的の文字を語り、商人は商人の語を用ゐ、法律家は法律上の用語を使ふのは世間一般の常習である。其人が使用する言語で以て其人の身分の程が窺はれるのであるが、我がパウロが好んで用ゐた言語は實に軍人的の言葉であつた。故に私共は神の軍人としてパウロの精神を見たいのである。

パウロは最初猶太教的教育を受けた人であるからして靈的宗教なる基督教に對しては飽くまで反抗し迫害せずには措かなかつた。處が一度イエスに捕はれて改宗を斷行するや罪の意識は潮の如くに彼の胸に往來して流石の軍人パウロも幾度か悲嘆の聲を洩した。此間の消息は録して羅馬書第七章にあるが實に苦悶懊惱の一大激戦と云ふべきである。「わが肢體に他に法ありて我心の法と戦ひ我を擄にして我肢體の中にをる罪の法に従はざるを悟れり」(廿三)「噫われ困苦人なる哉」といつて居る。猶太教徒としては此苦悶は知らなかつたが、一度基督教を信じイエスに従はんと決心してこの大激戦が心中に始つたのである。彼は終に此戦に勝つたのである。「然れど我儕を愛める者に頼すべて此等のことに勝ち得て餘りあり」(廿八)といつた。然しパウロは自らに勝つてそれで満足することは出来ない。更に彼は世界を對手として起つた、キリストの福音、即ち「信ずる者を救はんとす神の大能」なるこの福音を萬國に對つて宣傳しなければならぬと思つた。大望を抱ける神の軍人使徒パウロは其の意氣今や五大洲を呑んで居る。但し彼の武器は歴山王や奈翁のそれではない。父なる神の愛である。キリストの永生である。聖靈の劍である。彼は此世

界を以て人生の戦場と見做した、人は其戦場に於ける兵士であつて、神に遵つて必ず勝利を占むべきことを確信して居た。マーテルリンクが「生命ある間だけは戦はなければならぬ。進まなければならぬ」と言つたのは人生は戦場であることを意味して居るのである。「兄弟よ願くは爾曹我身に在りしところの事反つて福音の進み行く助けとなりしを知れ。」(一ノ四十一)と

此進み行くと云ふ原語に三つの意義がある。一は鍛冶師が金属類を鍛へる際に鐵槌を加へらるゝまゝに金属類が何處までも延びゆくが如き有様を云へるものと、二には軍隊が其敵と戦を挑みて着々勝利を得つゝ敵地を占領して進み行く勇壯なる状態を指せるものと、三には大軍を進めんが爲に先鋒隊が道路を開拓し往く有様を示すのである。パウロの傳ふる福音は斯く進み行く福音である。勇しき進軍である。金城鐵壁何かあらん、陰府の礎揺り動き、サタンの扉碎かれて罪の世界は福音の占領するところとなり、悪魔の國は化して恩寵の天地となるのであらう。新約聖書の大半を物したパウロの手簡こそは實に一大宣戰布告である。戒嚴令とも將た軍令軍律とも見るべきものである。彼の思想の全體を見更に彼自身

の生涯を見るならば、宛ら戦國の世の人の如くにも見らるゝのである。イエスはガリラヤ湖畔の育ちなれば其生活も其教訓も自然界に近いものがある、空飛ぶ鳥を指し野に咲く百合を語り、青草に坐し井戸に凭りて物語られたから従つて教訓の内容も詩趣に富んだものであつたが、パウロに至りては凡て反對である。「神若しわれらを守らば誰かわれらに敵せん」(羅馬書)といひ、「わが命の爲に己の頸を劍の下に置けり」(一ノ四十六)といひ、「凡て敵に驚かざるは敵には亡びの徴なんぢらには救の徴なり」(一ノ廿八)といひ、「なんぢら悪魔の奸計を禦んために神の武具を以て装ふべし」(弗六)といひ、「我ために義の冠備へあり」というて居る。人生を戦場と見たる彼は飽くまで軍人的生涯を送つたのである。

パウロは他に向つて要求することある時は必ず先づ之を自分に求めた、「若し我兄弟我骨肉のためならんには或はキリストより絶れ沈淪に至らんも亦我願也」と、實に身を以て事に當るといふ精神である。讀んで泣かない者は忠臣に非ずといはれて居るかの出師表に「鞠躬盡力死而後已」とあるが、之れ軍人たる者の赤誠の聲である。武士たるもの、精神である。孔明死して遂に蜀漢の滅亡を見るに至つた。死して尙已まざる精神に至りては我が

パウロに於て始めて之を見るのである。

一 彼の決心

「死より甦りし者の如く己を神に献げ又爾曹の肢體を義の武器となして神に事ふべし」  
 (羅六ノ十三)

己を神に献げて義の武器とするとは何たる高潔なる武士的精神であらう。彼の心事は將に大和武士の心事である。報恩の精神は武士たる者の一美德である、武士たる者が主君の恩を忘るゝに至つては言語道斷である。君恩に感泣して心を君に許すに至つて武士の面目輝いて來るのである。彼はキリストと其國民とのためならば我身は沈淪に至るも亦願ふところであると覺悟して主のため我身を思はず献身の念に燃えて居たのである。それ故に他人に對しても「汝の肢體を義の器として神に事ふべし」とは勧めたのである。彼の大志は此の決心より生れたものである。然り軍人の生涯は献身奉仕の生涯である。「我等のうち己の爲に生き己の爲に死する者なし。蓋し我等生くるも主の爲に生き死するも主の爲に死す」と云ふ忠魂義膽に至つてはパウロも亦我が大和武士の龜鑑たるに耻ぢない。

御製に

石たゝみ堅きとりても軍人身をすてゝこそ打ち碎きけれ

と眞一文字に勧めたのである。何故にパウロは熱心に勧告したかと云へば、吾人の最大の敵はアカンの如き自己である、之ある間は主の爲に何程苦戦しても勝利は得られない。目指す敵を破らんとせば先づ自己を滅し一身を全く君に献じてかからねばならぬ。斯くてこそ死を視ること歸するが如く、始めて大事を成就することが出来る。論語顔淵第十二篇第一章を見ても、己に克つて禮に復るを仁となすと云ふ句がある。此の己とは身の私慾を云ふ也と註して、佛教的に云へば我慢、我執、煩惱である。克つとは勝ち難きに勝つを克と云ふとありて仲々勝ち難き敵に勝つことである。儒教は克己難を説くが、我等は實に献身の難きを憂ふるものである。

「献ぐ」の字は羅馬書に四度用ゐられてある(六ノ十三、十九)が、六章の三ヶ所は神に服従するを意味し、十二章の方は我等の身體を祭物となして神に献納するといふ意味がある。何れにしても此一字は意味深遠なものである。人生の方針は唯二途あるのみである。順乎

逆乎これである。パウロ曰ふ「或は罪の僕とならば死に及び或は順の僕とならば義に及ばん」と此の或はの文字原文にては特別に大切なる意味を有つて居るのである。人は二人の主事に事ふること能はずである、順か逆か其一を取るべきである。而して其人の永遠の運命は決まるのである。パウロ又曰ふ「今其肢體を献げ義の僕となりて聖潔に至るべし」(十九)と、基督者の生涯は斯の如く進歩の生涯である。「標準に向ひて進む」ところの生活である、愈々義に入り益々聖に進むのである、「爾曹…自ら潔からんことを務めよ人若し潔からざれば主に見ゆることを得ざる也」(来十二)人若し其身を神に献ぐる時は神は悦んで之を義の器となして榮光の爲に用ゐ給ふのである。之を守り之を養うて有益に幸福に奉仕の生涯を送り得る様になるのである。パウロにして若しも此の献身の覺悟を有たなかつたならばあれ程の偉業は成就することが出来なかつたであらう。彼の人格も左程光輝を發せず終つたであらう。順は神の命に違ふことである、逆は神の命に背くことである。順逆は即ち生死の峠である。分水嶺である。キリストが我等と偕にいまし、又我等の衷に在し給ふ時天下に敵はないのである。

二 戦闘の準備

「光明の甲を衣るべし」(羅十三)

「我と共に力を竭して…祈ることを爲よ」(羅十五)

北米合衆國は今や政治運動の白熱時期に入り、民主共和兩黨の領袖は各其意見を發表した。現大統領ウイルソン氏は之を發表するに三點をもつてした。曰く平和、曰く準備、曰く繁榮と、平和を維持する爲の陸海軍の準備である、民を治め國を強うするには必ず充分の準備が要る。況して此世の精神界に於て靈的勝利を占めんとするには準備を要することは當然のことである。パウロ曰く「信仰の善き戦をたゝかひ永生を取るべし」と。キリストの福音が我國に入りて茲に五十年、基督者の活動は實に見るべきものが多い。曰く大舉傳道、曰く集中傳道、曰く擴張傳道、曰く獎勵傳道と今や凝つて協同傳道となり、最近大に其結果が現れて來た。更に全國協同傳道の議が纏まりて大に活躍しつゝある際である。我々は各自の旗色を鮮明にし大舉信仰の戦を進めなければならぬ。其方法は如何やうに分れても歸するところは信仰を植付けるのである。即ちキリストを識らしめるところにある

のである(約十七)信仰の戦は準備なくしては進められない。目標なしには戦はれない。此際所謂世の煩悶者や病者のみを救に導くのみならず、富める者、力あるもの、位ある者をも擄としなければならぬ。従つて其準備を怠つてはならないのである。又我れ神の熱心の如き熱心を以て汝等を念ふ」とこの言葉の中にパウロの熱情が溢れて居るではないか。我儕は此際斯かる精神を以てキリストを宣べ傳へ以て我同胞をキリストに献げんことを務めたものである。時を知るといふことは大切である。今は救の日である。勢に乗じてその成功を期すべきである。今や傳道の機運は既に熟して居る、各自大に勵まなければならぬ。準備の一は祈禱である。「我と共に力を竭して……祈ることを爲よ」である。パウロは祈りの人であつた、戰場は彼の祈禱室である。「われ祈ごと……」(羅一)と涙を流して戦友の爲に祈つたのである。「力を竭して」とは強い意味があつて、力士が土俵の上で力を競ふといふ意味が含まれて居る。彼は努力主義の人であつたが萬事に當り「祈を恒にし」(羅十二)人である。「我等四方より患難を受くれども窮せず詮方盡くれども望を失はず迫害らるれども棄てられず跌倒さるれども亡びず」と言ふことを得たのは彼が平素の準備に因るものと

見なければならぬ。

### 三 勝利の生涯

軍人の生涯は勝利の生涯でなければならぬ。敗軍の將は兵を談るの資格がない。さらばパウロは如何なる生涯を送つたか、彼には此決心あり此準備あり豈勝利を得ざる理あらんやである。彼は實に勝利の生涯を送つた好典型であつた。基督者の模範を示したのである。「キリストの愛より我儕を絶らせんものは誰や、患難なるか或は困苦か迫害か餓飢か裸裎か危険か刀劍なる乎……されど我儕を愛める者に頼りすべて此等の事に勝得て餘あり」(羅八ノ卅七)と、之は、パウロの凱旋の歌である。進軍喇叭の関の聲である。水溜の如きは少し水を使ふときは直に其水涸れて了ふが、深山の水源地は永久に枯れることはない。イエスが「わが予ふる水は其中に泉となりて湧き出で、永生に至るべし」(約四)といはれたる此生命の水は求むる人の心に滾々と湧き出で、有ゆる此世の患難と苦痛とに「勝得て餘ある」ことを得るのである。是れ全く自分の力に頼るのではない、上よりの力キリストよりの救の力に頼るのである。「若し我儕敵たりし時に其子の死に由りて神に和ぐことを得

たらんには、況して和を得たる今其生けるに由りて救はるゝことを得ざらんや」と告白したのである。彼はロマ書の卷末に、十六「平安の神汝等の足下に於てサタンを速に碎くべし」と宣言して居るが、之はキリストが大能を以てパウロと偕に我等の戦に全勝を占め、遂に永生を取るべきことを預言したのである。

### 五、罪人の首パウロ

使徒パウロは罪に就て語ることに實に深刻を極めて居る。羅馬書(十八)には「それ神の怒は不義を以て眞理を抑ふる人々の凡ての不義不虔に向て天より顯はる」と録して其以下に人間が犯すところの罪惡の諸ては陳述して餘すところがない、而して終りに「凡て此等を行ふ者は死罪に當る」と論じ「義人なし一人もあるなし」と叫んで居る、これ實に我儕に取つて戦慄すべき宣告ではあるまいか。「神の事情は人に顯明にして既に神これを人に顯はし給へり」(十九)然るに彼等は「既に神を知りて尙之を神と崇めず亦謝することをせず」(二十)愈々其罪を重ね死滅の道に急いで居るのである。其罪は過失の罪ではない故意の罪

である。故に神に對する叛逆といふべきである。神を神とも意はぬやうになつては最早不義である。義しき關係のないところに正義の行はれる筈がない。彼等は神を其念に存むることを願はずである。彼は人の心の奥底を抉つて解剖したのである。或人は思へらく、人の罪といふものは熟せぬ青い林檎の様なもので、其儘にして措ても段々と赤くなり甘くなると、然し此第一章を讀み見れば其罪が自然に任せて措とますゝ惡性に墮落しゆき終に死罪に至るとある。ステフラ博士は此第一章に就ての感想を左の如く述べて居る。

(一) 神は其創造り給ひし者に由て自らを顯はすに足るほどの知識を賦け給うたから人は之に由て神を崇拜し之に感謝を捧ぐべきである。

(二) 人の宗教生活は向上的でなくて却て退歩的である、人は充分なる光明を認て居ながら之を拒んで居る、退歩に三階段がある曰く偶像崇拜曰く禮拜の卑俗曰く情慾の放縱之である。

(三) 神は罪を以て罪を罰し給ふ、これは神の怒である、人が神を敬はぬときは神は人よ

り真操や道德の力を除き給ふのである。

(四)パウロが福音を指して救の大能と言つた其精神が明かである。福音は之を信する者を神の審判に於て其罪より救はるゝことを得しめる。故に之を恥としないのである。

十字架と復活とは人類の知識に對しては法外も甚しきものといはねばならぬ、然しながら人々が神の怒を避くるには他に一の道もないと悟るならば人は福音を恥とせざるに至るのである。羅馬書第二章に於て彼はユダヤ人の驕慢を責むること十ヶ條第三章に入つて異邦人もユダヤ人も凡て罪の下に在ることを證明した。第七章よりは彼自身の罪の煩悶である。法律や自力は罪の救に何等の功もないことを知つた。然かも信仰の深味に入るに従つて益々我身の罪の重大なるを感ずるばかりである。此罪は何うして除かれるか日増倍加しゆく我罪の重荷は終に如何になるであらう。前途を思へば戦慄するの外はない。眞に暗闇である。茲に至つてパウロは「我は罪人の首なり」と叫んだのである、「この死の體より我を救はん者は誰ぞや」と泣いた。斯やうな經驗を少しも嘗めたことのない人に深い神の恩寵は解らない。彼は初めから如何にせば此罪より救はれて義とされるかといふことに

心を碎いて居つた。それがために全力を盡してパリサイ的に律法を守つた。一意専心精神の修養をも努めた、而してこんなことで罪の意識は除かれなかつた。苦悶は日に烈しくなつた。然し門を叩いてその扉は終に開かれた「即ちイエス・キリスを信するに由て其義を神は凡ての信者に賜うて區別なしそは人皆罪を犯したれば神より榮を受るに足らず只イエス・キリスの贖に頼て神の恵を受け功なくして義とせらるゝなり」(三ノ二二)これ實にパウロが天下の罪人に向て宣告したるところの生命の福音であり救の能力である。あゝパウロ微りせば誰がメシヤの使命を悟つたであらう、誰が主の救を證したであらう。自ら罪人の首と信じたパウロならで誰が罪人の歎きを知るであらう、彼ならで誰が深刻なる同情を罪人に寄せ得るであらう。

パウロは罪をば死に値するものと論じ、更に此罪は救主イエスに由て贖はれることを主張して居るが彼は尙罪の問題を片付けて仕舞はないで筆の進むに従つていよゝ痛切に論じて居る、「人皆罪の下に在り」とのことは羅馬書全體に亘つての中心思想である。彼は第三章より第八章までの間に罪なる文字を五十度用ゐて居る、其以前には甚だ稀に見る位で

あつたのに、茲に来て谷から萬斛の水が堤防を破つて押寄せ来るやうに罪について論じて居る。本書第三章の九節より十八節までを深く玩味するならば少くとも三點の思想を認ることが出来る。

(一) 罪の下に在る状態。皆罪の下に在ると、皆曲りて全く邪となれること及び善を作もの人もなきこと等にて實に兩刃の劍よりも鋭い言である。

(二) 罪人の言行に顯はるゝ状態。其喉は破れし樞其舌は詭詐をなし其唇には蝮の毒言あり、其口には詛と苦とが満ちて居る、其行は如何といふに其足は血を見る爲に疾く、殘害と苦難其途に横はつて居る。

(三) 其原因。其目前に神を畏るゝ懼れがないこと。彼が罪惡に對する態度を考へるならば主が荒野において惡魔に對し給うたと殆ど同じである。彼の罪惡に惱んだ實驗を讀んで見るならば如何に彼の人格が高く道念が盛であつたかを知るに難くはない。「我は肉なるものにして罪の下に賣られたり」 十四 「罪は誠の機に乗て我中に各様の貪慾を起せり」 七ノ 「誠命來りて罪は活かへり我は死ねり」 九ノ ともいうて居る。罪に對する彼の實

驗は實に深いものであつて眞に人間的である人間は皆彼の徑路を一度は踏まねばならぬのである。第七章の十五―二四に亘る彼の苦惱は基督教信仰の出發點である。

茲に顯はれて居る彼の煩悶は其回心前のことであるか將た回心後のことを示すものであるかについては議論の分るところである。或人はこれは再生せざる時の經驗であつて道徳的性質が如何に努力するも救の不可能なることを説た者とする、又或人は之を半ば回心した時の實驗とする、他の人はこれを全く再生した時のことと論ずる、即ち律法を守らんと欲するも能はざらしめる自分の中に潜んで居る罪の勢力より救ひ出される時の實驗であるとするのである。夜中其最も闇黒なのは夜明前であるといふが、此處がパウロのキリストに於ける救に入る夜明前の經驗であると思はれる。「これ我儕の主イエス・キリストなるが故に神に感謝す此故に「今」イエス・キリストに在るものは罪せらるゝことなし」 一八ノ 今やパウロは輝く義の太陽を認めたのである。

彼がダマスコ途上に於る生涯の大轉機は終に彼をしてキリストに於る信仰を告白するに至らしめたのである。之を實驗する時までにはユダヤ的意義においては律法の下に在り、實



際においては律法なくして生きて居つた、即ち誠は尙未だ彼の心に來らなかつたのである。其心の未だ生れ變らぬ時の活動は其極度に達した。而し外形にあらで心を求むる所の律法を稍理解するに至つて彼は律法を其根底より破つたのみならず前には毫しも感じなかつた罪は律法に逆て居るといふことが解つて彼は死んだ、「即ち誠命來りて我は死ねり」と言つたのである。

パウロが信仰の出発點は實に罪惡の意識であつた。如何にせば此罪は除かれて自らは義人となり、世は恩寵の天地となるであらうかと苦悶の月日を重ねたが、終にイエス・キリストの救に入りて眞の平安を得たのみならず自らを聖き活ける祭物となして一生を神の御用に捧げたのである。キリストの前には「罪人の首」たりしパウロは歐洲文明の首石となつて、今尙活きてキリストの國を建て居る。

### 六 牧者としての保羅

#### 羅馬書第十六章の研究

##### (一) パウロの同勞者

偉大なる使徒にして理想の基督者なるパウロの如き人物は其種々なる方面より研究して始めて彼の眞面目を認むることが出来る。吾人は今や牧者としてのパウロの大精神を學ばんとするのである。

人若し神の聖業を大成しようと思へば、必ず先づ聖靈の助けを藉らなければならぬことは勿論のとである。パウロは羅馬書十五ノ十八に「キリスト我を助けて」といひ又八ノ廿八に「聖靈も亦我の荏弱を助く」といつて居る。彼をしてある偉大なる事業を完成せしめたるは聖靈の後援であると言はなければならぬ。而し後援なるものは之を内的と外的とに區別して考へることが出来る。聖靈は内的であつて、彼の同勞者は外的の後援者であつた。

今本章を見るに、パウロの同勞者として彼と共に苦み、彼と共に勞し、彼と共に勤めたる者の名を三十五人程録して居る。即ち

(一) 今パウロと偕に居る人は凡て九人である。

テモテ、ルキ、ヤソン、ソシバテロ、テリテオ、ガヨス、エラスト、クワルト、フイベ、

(二) ロマに居る者

(イ) 男十九人、アクラ、エバイント、アンデロニコ、アンピリアト、ウルバノ、スタク、アペレ、ヘロデオナ、ルボ、アスキキリト、ピリゴン、ヘレマ、バトロバ、ヘルメ、ピロコ、ネリオ、オルンバ、アリストプロ、ナルキソ、

(ロ) 婦人七人、プリスキラ、マリヤ、ジュニヤ、テルバイナ、テルボサ、ベルシー、ジュリヤ、

以上三十五人は羅馬傳道の初代に於て既にパウロの同勞者として活動したのである。中には彼と偕に囚人となりて繋かれたる者もあり、特に婦人にして彼と偕に苦みを嘗めた者もあつた。更に其生命を塔して「己が頸を劍の下に置いた」者もあつたのである。婦人にして天晴れ神の軍人としてキリストに生命を捧げて働いたものもあれば、教のために自家を開放して集會を助けた者もあつた。彼は之を呼んで「其家に在る教會」といつた。(第三節) 彼が困難に遭つて其志愈々堅固になつたのは斯様な必死の後援者を有つて居たからである。キリストに在りて鍛鍊なるアペレ」の如きは一騎當千の味方といふべきである。

パウロが其同勞者に對して深き敬愛の念を有つて居つたことは其用語にて知られる。即ち「我儕の姉妹」といひ「我を助くる者」又は「我と偕に勤むる者」とも言つた、更に「我が親戚」といひ「我と共に囚人たる」と述べ「ルボと其母、彼が母は即ち我母なり」とも言つた。誰か其友人の母を我母と呼び得るであらう。「主は我儕のために生命を損て給へり是に由りて愛といふことを知りたり我儕また兄弟のために生命を損つへし」とヨハネのいつたのは即ち是である。初代より婦人は福音の宣傳のためには大切なる活動をなして來た。婦人達は他の人々に優つて其所有をイエスに献げて事へた。彼等こそ最も忠實なるキリストの從者である。十字架の傍には最後まで居残り、墓場を訪づるには最初の者であつた。フィベは教會の執事にしてパウロ及び多くの傳道者を助けた、テルバイナ、テルボサ、ベルシー等は「主と偕に多く苦勞したる婦人」であつた。プリスキラ、アクラ(行十八)はクラウデオの命によりて羅馬を去つた。長日月の間エペソに居て働いた後に羅馬に歸つたらしい。此兩人は「己の頸を劍の下に置いた」のである。主は曰ひ給うた「その生命を惜む者は之を喪ひ我が爲に其生命を惜まざる者は之を存ちて永生に至るべし」と。

アンデロニコとジュニヤ（ジュニヤはアンデロニコの妻或は姉妹ならん）は使徒等の中にも名聲ある者にしてパウロの先輩である。彼は二人と偕に囚人となつたことを榮譽として居つた。

右三十五人は凡てパウロに取つて屈強の味方であり同信の戦友であつた。眞に一個健全なる基督教會の壯觀を呈したのである。而も彼は此一團を固く結束して且之を牧したのである。個々の性格を熟知し親密なる交際と濃厚なる同情とを表して居つたところは眞に牧者としての好典型である。

(二) 忘れられぬ主の教會

本章の中に教會なる語は四度現れて居るが、是等はパウロの心に寢ても醒めても忘れられぬ主の教會であつた。「ケンクレアに在る教會」「異邦人の凡ての教會」「其家に在る教會」「キリストの教會」等である。會堂としての建物は紀元第三世紀迄は存在し無つたらしい、思ふに個人に屬する家に於ける場所を指したものであらう。新約書中に在る信徒が偕に集つて祈つたといふ家はヨハネの母なるマリヤ（行十二）の家である。

彼が此に録した教會は其外形的のものではなくして、キリストの爲に死に、キリストと偕に生んとて精神的に結合せる堅き團體を指のである。英語にては教會をチャアチと云ひ、之を古き辭書には瞻禮堂又は主神堂と譯してある。神を瞻みて禮拜する堂といふ意味である。希臘語にてはエクレンシャというて此世の中より呼び出すとの意味になる。世より召された者の集合體である。「我名のために二三人の集まれる處には我も其中にあればなり」(太十八)とある。父母の居るところ、家庭が作られ、王の居るところ、王宮が建てらるゝ如くキリストの在す所に萬國の人の「父の家」即ち祈禱の室なる教會が出現するのである。之を大きくいへば神の國である。而もこれは有ゆる階級の人の入るべきところである。今假りに三十五人の地位を察せば中には邑の庫司なるエラストあり、全會の寓主なるガヨスあり、執事なるフィベあり、嘗てはパウロの僕となつた者もある。

キリストを眞に愛する者はキリストの教會を忘れることは出来ない。教會はキリストの身體であるものを。

(三) 牧者たる者の修養

斯かる貴き主の教會を牧すべき者は常に修養の心掛がなくてはならぬとパウロは考へて居つた。素と神の國の民なるものは彼の言を以ていへば「神に對しては悔改め、主イエス・キリストに對しては信仰すべく」召し出されて(徒行二十)神の子供となつた者であるからである。パウロはこれがために特に牧會書翰を贈りて教會と長老とを教へたのである。ミレトスより使者をエペソに遣はして長老達を召び彼等に爲したる説教は(徒行二十)彼ならでは言ふことの出来ない優れたる訓示である。カルヴァインは之をば「明瞭にして眞正なる牧會者の鏡である」と言つた。又バツクスターは其名著リフォード、バスターといふ書中に次の意味のことは記した「凡そ牧者たるものはパウロがエペソの教會の長老になしたる説教を其常に開閉する扉に貼付けて朝夕之を心に記すべきである」と、其説教の中に「故に汝等自ら慎み且汝等が聖靈に立てられて監督となれる其全群を慎み主の己が血を以て買ひ給ひし所の教會を牧ふべし」といふ文字の如きは當に日に三省すべき教訓である。聖書學者リツドル教授は本章に現れたるパウロの牧者としての心を次のやうに述べて居る。

- 一、彼の傳言
- 二、彼が婦人に與へたる高き地位、
- 三、往訪の地に斯くも多くの親友を有するは其の人格の感化の偉大なるを知るに足る、
- 四、其友情に富む記録によりて受くべき永遠不死の人の姓名は、生命の書に載せられたる人の祝福の暗示であると。

(四) 牧者としての彼の愛情

彼は世に類なき學者でありながら「智識は人を傲慢にする」といつて居る。基督者生活には常に信・望・愛があり其中最も大なるものは愛であると説いたが、彼は實に愛の深い牧者であつた。彼が其教徒を警め教ふる眞情は我子に對する親心のそれである。「兄弟よ我汝等に勸む凡そ汝等が學べる所の教に反きて争ひ分たせ又躓かする者を視とめて之を避けよ」と戒めて居る。當時「己が腹に事ふる」徒輩が世間に多かつたと見える。偽りの信仰、益なき議論を弄んで教會の發展を妨げ聖徒を傷けた者が夥しいのである。これ實にパウロが痛心の荆であつた。「平安の神汝等の足の下に於てサタンを速かに碎くべし」と明言して

切實の情を現して居る。

予は多年數多の人々とロマ書に就てパウロの意を學ぶとを樂しみとして居るが、嘗て一學友は予に語つて云つた「予はロマ書の前半に於てパウロを見るに宛かも狂犬の如くに猛烈で側にも寄り付けないが、後半即ち十四章あたりには彼の同情濃やかで思はず握手したい心地になる」と眞に其通りである。特にこの十六章を熟讀せば彼の情愛の濃厚さが愈々表はれて牧者パウロの姿勢が鮮やかに窺はれて來る。猶太の牧羊者は其の己が牧する羊に一々名前を付けて野に山に其名を呼ぶとのとであるが、パウロも三十五人銘々の名前を記憶して之を記したのめならず、各自の天分を述べ、其苦難を偕にせる當時を偲び、恩に感じ、友を慕ふ温情は牧者たる性質を能く表はして居る。更に「汝等の順從へること衆ての人に傳播りたれば我汝等の爲めに喜べり」と述べ「我説く所のイエス・キリストの教訓を照し汝等を堅固うすることを得る」もの即ち獨一の睿智神に榮光窮りなくイエス・キリストに由りて在らんことを願ふ」と言ふに至て牧者パウロの精神が愈々輝いて居る。最後に有名なる西洋の僻村牧師歌の漢譯したものを掲げる。

茲輩有憂師代傷

茲輩有喜師代歡

嗟乎牧師虔誠人

身在塵世心在天

これ牧者パウロの心を歌つたものであらう。

### 七、世界を對手とせる保羅

米國宗敎界の權威とも稱すべきゼー・ロツス・ステヴンソン博士はプリンス頓神學校長任職式演説に「現代に於て要求する神學教育」てふ題を以て四個の興味ある問題を力強く述べて居る。

(一) 最も根本的なる要求は使徒的品性を備ふる教役者を訓陶すべきこと。

(二) 敎會が神學校に要求する處は遠大にして且つ積極的信仰を有し、生命ある言を以て燃えて居る人を出すべきこと。

(三) 斯の如くして福音を社會的に將た個人的に活用し得て神學教育の目的を完らし得らるべし。

(四) 教會が神學校に要求する人物は單に一都市や一國の地方的に應ずるのみならず、更に諸國民と萬國とを大觀して有ゆる人種を含む傳道の精神を有する者たる也。

予は常に羅馬書を読みて本書の精神を研めパウロの胸奥を考ふるに當りステヴン博士の所論に刺戟を蒙ること深きものである。彼が述べたる四個の要求は皆之を使徒パウロの精神に發見することが出来るのである。彼の使徒的品性、燃ゆるが如き熱情、社會並に個人に對する傳道の精神及彼の世界的傳道の氣概に至ては猛烈火の如きものあるを覺えしむるのである。請ふ是よりパウロの言に就き彼の抱ける大志を學ばしめよ。

彼は羅馬人に對して其目的を宣言して曰ふ「これ其名のために萬國の人々をして信仰の道に従はせんとなり」(一)「我爾曹異邦人に言はん我は異邦人の使徒なるが故に我職を敬重せり」(十三)これらは實に羅馬書に充滿せる思想にして彼の大精神である。其志す處は世界的であることが分る「神より大事を期待し神の爲に大事を圖れ」とはウキリアム・ケレーが印度傳道の途に就くに當て絶叫したる警語であるが、これパウロの精神を受繼いだものであると思はれる。

人生缺く可からざるものは向上の精神である。予は今羅馬書に基きて保羅の一生を觀るに實に奮闘的であり向上の生涯であつた。而かも彼が活動の區域は異邦人の國であつたことは其本文「我は異邦人の使徒なり」の一句に明示されてある。彼は異邦傳道を志してより常に東西に奔走し南に北に海陸遠く駆け廻り墮落せる都にも頑迷なる仲間にも有ゆる方面に向て福音を宣傳したのである。彼が傳道の對手は「萬國の人々」であつた、千辛萬苦を嘗めて彼の精神は益々輝いた。全世界の人を對手として神の國の福音を宣べんとの大志は愈々燃えて來た。而して其方法は極めて單純で「其名の爲に」である。其終局の目的は「信仰の道に従はせん」爲である。「凡て信ずる者の義とせられん爲にキリストは律法の終りとなれり」(十)彼の唱ふる信仰は律法や儀式にあらず、儀文に事ふるにあらで單純に靈に事しめんとしたのである。活るキリスト即ち復活によりて明かに顯はれたる神の子キリストの道に服従せしめんとしたのである。此單純なる信仰がパウロの心である。恰も小さい電燈一個が大きい室を輝かすやうである。「道は爾に近く爾の口にあり爾の心に在り」と是れ即ち我儕が宣ふる所の道なり」(十六)パウロが宣ふる信仰の道の我儕に近きことは我

儕が呼吸する時に我儕の肺腑の中に自由に入出入する空気の如くである。新鮮なる空気を呼吸して我儕の肺腑は健全なるを得如く我儕「心にて神の彼(キリスト)を死より甦らせしを信ぜば救はるべし」にて我儕に近き此神の道を信ずるによりて新生命を受くることが出来るのである。兎に角キリストの光はパウロに由て愈々萬國の人々に輝いたのである。世界を救はんがために異邦傳道に擇まれたるパウロの大志壯圖は洵に目醒ましきものであつた。本書第十二章に於て彼は献身のこと就て意味深いことを勸めて居る「其身を神の心に適ふ聖き活ける祭物となして神に献げよ」と而して自らは將に此語を文字通りに實行して居るのである。神に其身を献げたる人には天下に敵がないのである。萬夫不當の活ける信仰は斯かる人の魂に光つて居るであらう。

破天荒の奮闘をなしたる彼も其足許を忘れるやうな猪武者ではなかつた。世界傳道は彼の一刻も忘れたことのない熱望ではあつたが然かも愛國の精神は薄らいでは居らぬ「我兄弟我骨肉の爲ならんには或はキリストより離れ沈淪に至んも亦我願なり」(三ノ二)と云うて居る。國の外に傳道することが大切であるならば國の内にも傳道することもそれに劣らず大

切である。唯其抱負の遠大なること、傳道心の旺盛なることを彼に學ばねばならぬ。

然し乍らパウロの精神はキリストの精神と引離して見るとは出来ぬ。キリストは流の源泉であるからである。主はパウロに斯る大なる精神を授け給うた許りではない、高遠なる理想を與へ給うた許りではない。更に日夜に彼を導き彼を護り、彼と偕に在し給うたことを看過してはならぬ。「我れ神のことに就てはイエス・キリストに由りて誇るところあり、何となればキリスト我を助けて異邦人を順従しめんために……神の靈の能を顯はし言と行とを以てエルサレムより徧くイルリコに至るまで其福音を傳へさせ給ひしことの他は一言をも我敢て曰はざるなり」(十五ノ一)「茲に「徧く……其福音を傳へさせ」は原語にては福音を充滿させるの意味である。二十節の「我慎みて」とあるは原語に我大望を抱いてとの意義がある。パウロの生涯終始一貫せる處のものは實に奉仕の一念であつた。神と人との事て其間些の私心がなかつた。キリストも「人を役ふためにあらず人に役はれ……生命を與へ其贖とならんため」に來られたとあるが、神に事へる精神は同時に人に仕へる心である。

身のために君を思へば二た心

君のためには身をも思はじ

キリストとパウロとの關係は次なる一句にて充分知ることが出来る。「是故に我儕身に居ても身を離れても彼の心に適はんことを勉む」(哥後五)彼に此信賴の念があつたればこそ主も亦彼を常に助け給うたのである。傳道と患難とは必ず附き物である。パウロの一生は傳道の記録であるが一方から見れば患難の日記である。キリストに召れて以後の彼の生涯は十字架を負うた生涯であつた。使徒行傳や哥林多書を読んで彼が如何に靈肉の上に苦き杯を味つたかを知ることが出来る。それにも拘はらず彼は勇往邁進誰憚る處なくキリストの福音を宣傳へ……キリストの福音を充滿せしむるに至たのは何故であらうか、彼はキリストに因て諸々の事を成し能てふ活る信仰と世界傳道の大抱負とを有つて居た爲である。キリストと偕に居るならば患難何かあらん、此世に勝ち得て餘りある勝利の生涯を送ることが出来るのである。「爾曹往きて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ」との主の大命を完うせんが爲共に奮勵努力したい者である。抑もパウロが心底よりの願望はキリストの名の未だ稱られざる所に福音を充滿すると云

にあつた。而して其宣傳するところ専ら彼自身の實驗的福音であつた。「言と行とを以て其福音を傳へさせ給ひしこと……」と言つたのは如何に彼の福音が實驗的であつて言行の傳道であつたかを示して居る。古人が「聖人は行うて而して後に之を言ひ凡人は言うて而して之を行はず」と言つたのは眞理である。唯に口舌のみの傳道所謂講釋傳道にてはキリストの福音を宣傳することは出来ぬ。パウロは當時のラビではなかつた。又今の道學先生ではない。苟くも福音の證し人ともいはるべき人は辯論の人では不可ぬ實行の人でなくてはならぬ。然らざれば神の恩恵をば身を以て顯はすことは出来ぬ、傳道は須らく實驗的即ち實證でなければならぬ。彼は實に此種の人であつた。「教會の中に在りて我方言を以て一萬の言を語らんより寧ろ人を教へん爲めに我心を以て五言を語るを善しとす」(哥後十四)と言つたのは深き彼の經驗の聲であり。同時に彼の權威の存するところである。ヘンリー・ドラムモンド曰く「愛は世界語なり諸君にして支那語に通せんと思はば必ずや數年を要せん、印度の方言に於るも同じ、然れども諸君が彼等の邦土に至り上陸せる日より愛なる語は萬人に解せられん、且愛は平生不知不識の間に其能辯を滔々として振ふべし、傳道者の價値は其言語



にあらずして其人物にあり其人の品性は即ち福音なり」と穿ち得れる言であると思ふ。島津日新公の歌に

古の道を聞ても唱へても

我が行にせずば甲斐なし

さらばパウロは如何に傳道の生涯を送つたか、以下少しく學ばしめよ。

本文に由ば彼は「キリスト我を助けて」と言るが今予は、主が如何に彼を實際の器として用ゐる彼を助け給ひしかを見るに、少くとも三點の事實を發見するのである。

(一) 神の靈の能力を顯はし言と行とを以て主のために大なる立證を爲すことを得しめたことである。「事實は科學の神也」と科學者は云うて居るが、我濟は「キリストの助」を受けて主の道を言と行とを以て我身の上に實現するのは大なる立證である。

(二) キリストはパウロを用てエルサレムよりイルリコに至まで主の福音を充滿せしめ給うたのである。我濟キリストの僕たる者は彼の精神に倣て主の福音を我家庭に充滿せしめ更に之を我郷土に及し遂にはキリストの福音を我國に充滿せしめなければならぬ。主よ願く

ば爾國を臨らせ給へと祈らん。

(三) 「我慎みて他人の置きし土臺に建じとイエスの名の未だ稱へられざるところに福音を宣傳へたり」地上洩るるところなく福音を傳へんと願つたのである。而かも之は一片の空想ではなかつた。

パウロ主の福音を奉戴して天下に名乗を揚ぐることに既に久し。而して今や伊太利に渡るの時は來た、彼レマケドニヤ及アカヤを過ぎエルサレムに往かんと意を定めて曰ふ「我彼處に往きて後必ず羅馬をも見るべし」(行十九)と彼の傳道心は其胸中に日を逐うて燃上がつた。終に彼は世界の大都羅馬に主の福音を傳へんと決心するに至た。キリスト者の意氣は實に壯快なるものである。當時の羅馬は虛榮と罪惡との都であつた。道念墮落し人心腐敗し實に破れたる墓の如くであつた彼は斯かる地に尙神の國を建てんとしたのである。彼には唯希望のみが輝いて居たのである。然るに彼は羅馬に入ることを得たが、其は傳道者としてにはあらずして囚人として入京したのである。身は鎖に縛せられて居たが然も彼は絶望しない。逢ふ人毎に福音を傳へて救に導き又自らも慰めた。福音を傳へざれば禍である

と天下に告白した彼は一日たりとも主の語を口から絶たない。牢獄に在り乍ら彼は尙王者の權威を以てイエスの福音を宣傳した。而して基督教の基礎は彼に由て茲に成立したのである。此處に在りて有名なる書簡をも物した。

キリストは猶太人のみの救主でないといふ信じて居る彼は自ら天下の人に福音を宣傳すべき職を主より與へられたるを信じて居た。縲紲と患難我を俟てり然れども我は……主イエスより受けし職即ち神の恩の福音を證する事を遂げん爲めには我が生命をも重んぜざるなり」(行廿三)斯かる決心を以て死をさへ顧みず勇ましく奮戦を敢てしたのである。

彼が異邦傳道に關する意見は羅馬書の隨所に散見することが出来るから左に摘記して見るべし。

(一)「これ其名の爲に萬國の人々をして信仰の道に従はせんとなり」(一五)

(二)「我は福音を耻とせず此福音はユダヤ人を始めギリシヤ人凡て信ずる者を救んとする神の大能たればなり」(一六)

(三)「イエスキリストを信ずるに由て其義を凡ての信者に賜ひて區別なし」(廿二)

(四)「われら召されし處の者は第ユダヤ人のみならず亦異邦人も召れたり」(廿九)

(五)「ユダヤ人とギリシヤ人の別なしとは凡ての者の主は唯一なれば也凡て之を願ひ求る者には恩を豊盛にし」(十二)

(六)「反て彼等が錯失により救は異邦人に及べり。是イスラエルを激まさせんが爲なり」(十一)

(七)「幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈つるに至ん時までなり」(廿一)

(八)「又異邦人も其矜恤によりて神を崇む……萬民よ神を頌ふべし」(十五)

(九)「異邦人のためにイエスキリストの僕となりて神の福音の祭をなし献ぐる處の異邦人を聖靈に由て潔まらしめ神の聖旨に適はせんためなり」(十五)

(十)「且我れ慎みて他人の置し土臺に建じとイエスの名未だ稱へられざる所に福音を宣傳たり」(十五)

(十一)「萬國民をして信じ服はしめん爲に」(廿六)

以上は單に其重なるものゝみを擧たるなれども、其精神に至つては終始一貫本書の底を

力強く流れて居るのである。彼は開卷第一に其事を宣し、而して卷末に於ても其一事を絶叫して居る。あゝ異邦傳道は彼が全生涯の目的であつて彼はこれがために生れこれがために召され之が爲に死せるものである。パウロ羅馬に刑せられて後キリストの信徒雲の如くに興り空に聳ゆる會堂は建られ諸民諸族の間に福音は傳はり、神の國は歐洲の各地に發展し行いたのである。彼の生涯と彼の死とは世界の歴史を裝る光榮あるものであつた。祝福されたる聖き活ける生涯であつた。羅馬書に顯はる、彼の言を見れば、彼が一生を獻げて遵奉せるイエスは世界の救主たり、而して之を信じ之を受るは律法に由らず種族に由らず唯信仰に由ることを宣言したのである。斯かる信仰に立てる彼は今や烈火の如き熱心を以て羅馬人に主の福音を宣傳した。眞率なる其志氣熾烈なる其信仰は將に世界を焼き盡さねば止まぬのである。此活信と熱情とありて始めて我同胞をキリストに導くを得ん、借問す諸君の羅馬は何處にある乎。

### 八、傳道者パウロ

「兄弟よ前に我なんぢらに傳へし福音を今また爾曹に告ぐこは爾等が受けしところ之に因て立ちし所なり爾曹もし我が傳へし言を固く守り徒に信ずることなくば之に由りて救はれん」(哥林多前書十)

我儕の任務の最大にして第一なるものは

キリストの福音を告げ知らしむるにあり

第一 福音を告げ知らしめよ

「兄弟よ我が曾て汝等に傳へし福音を復汝等に告ぐ」。

福音を知らしむることは傳道上最大の義務である。知らしむる方法は單に口舌にのみよりては充分でない。何人も喜んで聖書を熱讀するやうに教養する事が大切である。予は傳道旅行の途に上る際には必ず、聖書を携帶して讀むべき場所を記して配布してゐるが、これは傳道のため非常に効果の多いことである。使徒パウロは聖書を深く重んじた人であつたが、羅馬書の一章の如きはパウロは聖書といはずに聖なる書と云つた。

博士ホルトン氏、曾て米國旅行の終りにモントリアル市を訪ひ、同市イマヌエル教會の

大集會にて、語つて言はるゝには、凡そ一切の教會は、キリストの中に、融合一致する事の出事ないものかと、且つカナダをキリストに献げんがためには、三大要件ありと言はれた。即ち

- (一) クリスチャンが熱心に聖書を愛すること。
- (二) 新生回心はキリストに於ける信仰に由るの外、他に道なしとの眞理の高調せらるゝこと。

(三) 教會と個人との中に聖靈の活動すること。

と説かれたが、まことに適切な言といふべきである。

北極探検家、ペヤリー氏は、曾て費府を出發するに際して曰く、今回は必ず北極を探検して、米國々旗を樹立んと、後數十年、苦心慘憺の結果、終に其素志を貫徹した。そして神が人類に與へ給へる此世界と、尙ほ北方に新天地のある事とを證明した。

福音を受けたる者の生涯

我等は既に主の福音を受け……之を以て立ちしものなれども……尙ほ固く守りて……福

音の救の根抵を探り、救の區域を擴張して、救靈事業の成功を期して務めなければならぬ。「告ぐる」とあるは原文にて *to make known* とありて、これは英語の *To make known* である。我等が第一の任務は救の根抵を能く人に知らしむるにある。世間には一時救に入りて後、之を捨去る者もあるが、これは未だ其の根抵に達しないためである。

本文には

「兄弟よ我が曾て爾曹に傳へし福音を復た爾曹に告ぐ」

とあるが此「復」といふ字は注意すべきもので、これは「重ねて」とか又は「今更に」とか譯して可からう。人々が福音をば根抵から悟るに至るまで、我等は繰り返し／＼告げ知らせなければならぬ。人は全く敗壞れて能く何事をも爲す能はぬことを知らせるのみにてはいけない。人は必ず大事を成就し得る能力を有つてゐることを知らしめねばならぬ。信仰の弱き人が中途にして信仰を離るゝのに對してパウロは、極めて親切であつた。「我小子よ我なんぢらの心にキリストの形成るまでは再び汝等のため産の劬勞をなす」信徒養成の道は、數あれども、先づ聖書に精通せしむることが最も大切である。

「キリストは昨日も今日も永遠までも變り給ふことなく」同じき方なれば彼を信ずる者も亦様々の風に揺かざるゝことがあつてはならぬ。

昔一人の人があつて、剃髮して佛門に入つたが、後に住職にもなつた時、諸藝の心得がないとあつては、恥しいとして、色々の事を學んだのは善いが、あまり他の事に計り精を出したので、茲に己が修行すべき佛法のことは何も知らなかつたと、徒然草に其の話が載つてをる。

使徒パウロも一時は此世の學問に由つて福音を傳へんと欲したことがあつたらしい。彼がアレオ山に於てなした議論の如きは正にそれであつて、まことに名論卓説ではあつたが、其の結果は何の見るべきものもなく寧ろ失敗に終つたものではあるまいか、暫くして「誓願に因て髪を削れり」といふは偶然のことではない。必らず心に決する所あつたに相違ない。彼の語に

「我れイエス・キリストと彼の十字架に釘けられしことの外は汝等の中に在りて何をも知るまじと意を定む」とある。

第二、自ら受けたるものを宣べ傳ふ

「我が初めに爾曹に傳へし所は我自らも受けし所なり」(哥林多前書)

「月たらぬ者の如き我にも現はれ給へり」(同十五)

パウロは明らかに自らに現れ給へるキリストを宣傳へたのである。曰く「キリストは我にも現れ給へり」と。苟にも人に向つてキリストを宣べ傳へんほどの人は、先づ第一に自己の中に彼を有つてゐなければならぬ。我等は確實なるキリストの顯現を感得して居らねばならぬ。自ら知つてをるものでなければ、之を人に知らしめることは出来ない。自ら有るものでなければ、之を人に與へる事は出来ない。農夫種子を携へずに島に出づるとも、いかで播くことが出来るか。

我等は年中、數知れぬほどの夢を見るが、偕て未だ嘗てキリストの鮮かなる尊姿を夢見たることはない。私の家兄はいつか、天國の門が開かれたのを夢見て排門といふ雅號を得たといふが、これを見る刹那の心情の爽快は何んなであつたらうか、我等は現にも將た夢にも一層明らかにキリストを知りたきものである。

富谷御杖の「學問」といふ文章の中にあつたが「荀子勸學篇……小人之學也、入乎耳出乎口、口耳之間則四寸耳、曷以美七尺之軀哉」と。眼より入るものも又然りである。見聞したものの如きは直ちに我が物とはならぬ。美味の物もよく咀嚼せずに居てはその眞味を知ることが出来ぬ。されば唯一言といへども充分に玩味して我物となし、然るのちに於てこれを使用すべきである。

パウロは「がれ初めに爾等に傳へし所は我自らも受けし所なり」と、此受けし所といふは強き言である。「我腹に入れし所のものなり」というても可からう。彼はその修養をなさんが爲にアラビヤの曠野に隠るゝこと三星霜にして、終に世にも稀なる天下の大使徒とはなつた。

流れゆく月日を空費せず、一日々々を小生命と見做し、如何ほどなりとも其の日の仕事を成し遂げんとつとめよ、我等はキリストに在りて永遠の生命を有つてゐることを、寸時も忘るべからずではあるが、これと同時に現世に生活する時期の極めて短きことを忘れてはならぬ。キリストが救世の大事業は僅々數時間を以て成就せられた。されば我等は現世

に於ては、努めて且つ何處までも、福音を傳ふる責任がある。然し唯に信仰を勸むるのみに止らず、尙ほ進んで各自信徒たるの資格を明かにする必要がある。

我が受けたる第一のもの

「わが爾曹に傳へしは我が受けし所の事にてその第一は即ち聖書に應ひてキリスト我儕の罪のために死せり」(哥林多前書)

此の「第一」といへるはこれを書いた時期に於いて、第一といふにはあらで、唯彼が説教したものの中の第一にして、彼が説教した重大のもの、即ち神の子が十字架に釘けられたことである。何が第二に来るとも是れは常に第一のものである。他に何を削るとも、此の救の福音の骨髓をば決して除かない。

「キリスト・イエスは我等の罪のために死せり」

といふこの單純なる語の中に三大思想の含まれてあるのを知ることが出来る。即ち

(一) 犠牲 (二) 代贖 (三) 救拯

斯かる大思想も若し電信文にすれば、僅に一音信に過ぎないが、其の意義に至つては千萬

無量である。

我等は斯くの如く信じ、斯くの如く語り、信徒は深く之を受け入れ、之に由つて確實に立ち、その傳へられし言を固く守り、徒に信ずることなくば、之に由つて救はれる。既に救はれたる者は、信徒として踐むべきの途を守りて救に入るやう、熱心に教へなければならぬ。「我が傳へし言を固く守り徒らに信ずることなくば之に由りて救はれん」と、公言せるパウロの大確信を思ひ見るべきである。我等は須らく聖書を喜んで深く探り、主なるキリストを明らかに識り、且つ裕かに聖靈に満されて、以て傳道の大任を盡さんことを期したいものである。

### 九、パウロの意

#### (一) 救の第一義

「爾曹もし我が傳へし言を固く守り徒らに信ずることなくば之に由て救はれん。わが爾曹に傳へしは我受けし所のことにて其第一は即ち聖書に應ひてキリスト我儕の罪のために

死に、また聖書に應ひて葬られ第三日に甦へり。」(哥前十五)

「故に我儕その死に合ふバプテスマに由て彼と共に葬らるゝはキリスト父の榮に由て死より甦されし如く我儕も新き生命に行むべきためなり、若我儕彼の死の狀に等しからば亦かれの復生にも等しかるべし」(四・五)

これらの句はパウロが長の年月實驗したる信仰の告白であつて人生に大なる光明を與へる證の言である。今左に一偉人の言を紹介する、曰く「此世に在りては如何なるものも予をして失望せしめて予が事業を抛たしむるものはない、予は主なる我が神に因りて自己を慰め以て前進するのみ」と、これ實に闇黒なる亞弗利加にキリストの福音を傳へた、リヴィングストンの言である、彼れ英國を發して、その空前の大遠征の途に上つた時は僅に二十歳の青年であつた。航海五ヶ月にしてケイプタウンに着き、それより南七百哩のクランマンに入り、更にマポツテに進んだ、其途上彼は一頭の獅子を射たるため他の獅子に襲はれて其肩を噛まれ、犬が鼠を弄ぶ様に苦しめられた、更にカラハリの大砂漠を横斷し道なき荒原を踏破して猛獸と戦ひ、熱病に惱され、千辛萬苦の間に猛然として其使命を果

した。此世に於ては何物も予の志を變ぜしむることは出来ぬと叫んで前進せる彼の精神は確かに上よりの力と恵とを受けて居つたに違ないのである。一度死の苦しみを嘗めて先づ一身を捨て、後新たに甦れる者でなければ出来ない事である、今パウロの心事に較べて信仰生活の如何に力あるものなるかを考へさせられるのである。

「われら四方より患難を受くれども窮せず詮方盡くれども望を失はず、迫害らるれども棄られず、跌倒るれども亡びず、われら何處へ往にも常にイエスの死を身に負へり此はイエスの生けることを我儕の身に顯はれしむる也」(哥後四)

古歌に

なか／＼に身を思はねば身ヲ安し

身を思ふに身は苦しけれ

(二)パウロは如何にイエスの死を意ひ居たりしや

彼は主キリストは我が罪の爲に死に給うたと意うて居り、主を通りて永遠の生命に入ることを得ると意うて何處までも此の信仰で貫いたのである。

「キリスト、父の榮に由りて死より甦されし如く我儕も亦新しき生命に歩むべき爲なり」之を見ても新しき生命は先づ死と葬とを経たる後なることが明かである、死して後に生命を得るのである。

「如此爾曹も(亦)我儕の主イエス・キリストに由り罪に就ては自ら死ぬるもの又神に就ては生ける者なりと意ふべし」(ロマ六)

「我儕尙弱かりし時キリスト定まりたる日に及で罪人のために死にたまへり」(ロマ五)

「我意ふに今の時の苦は我儕に顯はれん榮に比ぶべきに非ず」(ロマ八)

意ふといふ字はパウロが最も得意として用ゐたものである。キリストの死は全く罪人のため其贖となり、其の犠牲となられたのであることをパウロは常に其の心中に意ひ廻らして居つたのである。彼の信仰も彼の事業も彼の全生涯も實に此一事實より生れ出たものであつた。パウロの福音とは實に此事である。即ちキリストの死の福音である。否キリストの葬式の福音である。而して『キリストは父の榮に由りて甦さる』にて彼の福音は復活の大なる福音である、今その内容の一斑を述べれば次の如くである。



權威(十六) 光榮、歡喜、希望(五) 自由(八) 眞理(九) 恩惠、平和(七)

而して是等は悉く救主キリストより來るのである。

「神の賜は我儕の主イエス・キリストに於て賜はる永 生なり」(廿三)

不死のやすみ またき愛の

いのちは主よたゞ 君に有る (讚美歌百九十六)

パウロは此福音のために主より召されたるものと自覺し一生をこれのために献げたのである。「われ福音を宣傳ふると雖も誇るべきところなし、已を得ざるなり。苦し我れ福音を宣傳へずば實に禍なり」(哥前九ノ十) といつて居る。彼には主の福音を宣傳ふることが其日々の糧であつた。この事なしに彼は一日も生きて居ることは出来なかつた。何たる篤き信仰であらう。

(三) 死して生命に入る

羅馬書第六章に錄されたるパウロの洗禮論は人生の死活問題を論じたる大文字である。

此文章の精神を眞心を以て讀む人は洗禮を受けずに居られないのである。現に受洗したる

人が之を讀むならば一種の靈氣に打たれざるを得ないのである。基督教徒の良心は常に本章に由つて磨かれなければならぬ。「イエス・キリストに合はんとてバプテスマを受けし者は即ち其死に合はんとて之を受けし者なるを爾曹知らざるか」(六) といふことはキリストと結び付くことである。キリストと結び付くには此儘では可かね。己を棄て、自ら死に、舊き我を十字架に釘け、キリストと偕に葬られなければならぬ。洗禮式は葬禮式である、一度葬られなければ、罪の身は死なぬ。罪の穢は水に洗うて雪よりも白き魂になりて新しき生命に 甦へり、新しき生涯に入ることが出来るのである。キリストと偕に死にキリストと偕に生きて始めて人生の祝福を味ふことになる。主と死生を偕にするとともに無限の喜悅と満足と平和と希望とが満たさるのである。

キリストに合はうて我等は如何に進むかといふに先づ彼の靈に接することが出来て無限の進化の路程に向上發展し行くのである。(一) 罪より釋され(二) 聖潔に入り(三) 遂に永生を取るのである。(六) 廿三

キリストの教には所謂逆説が多い。得んと欲せば先づ捨てよといふが如きは、それである

「生命を惜むものは之を失ひ生命を捨つるものは之を得」とある。「神は智者を辱しめんとて愚なる者を選ぶ」ともある。活きんことを欲する者は先づ葬られなければならぬといふパウロの議論は千古の眞理を證したる實験の活文字である。

(四) 死と永生

洗禮の意義を明かにしたパウロは更に人は何故に受洗しなければならぬかといふ問題を見逃しては居られないのである。それは何故かといふに罪の給料の事である。彼は「罪の價は死なり」と録してあるがこの價といふ原語は給料を意味して居る。此給料即ち罪の結果が我々を亡びの道に導くのである。彼は記して曰ふ「或は悪(即ち逆)の僕とならば死に及び或は義(即ち順)の僕とならば義に及ばん」(十六) 途は唯此の二つあるのみである罪を犯して悪に赴くか義を行つて救の道に入るか世には此の二つよりほかに道はないのである。千里の途も一步より始まると云ふことがあるが、罪に踏み出すか神に志して進むか其分別は唯一分間で決まるのである。一生涯の運命は其瞬間に定まるのである。「神の賜は我儕の主イエス・キリストに於て賜はる永生なり」永生は神より賜はるのである。

ある。之を得んと努力しても得られぬ。唯上より賜はるのである。我儕は此の賜を受くるに相應はしきものとなつて居らねばならぬ。即ち罪より離れて義を慕ふことである。神を信じて動かされぬことである。

「神に由て生れたる者は神之を守る、かの悪者これに觸れることを爲ざるなり」(約第一八、一) 神に由りて生れたるもの即ち罪の生涯を脱却して新しき生命を有つものに對しては世の惡しき者も指一本彼に觸るゝことは出來ぬのである。新しき生命は即ち永生を言ふのである。「子を信する者は窮なき生命を得」(約三六)とある。罪の問題は永遠の生命と無限の滅亡との別れ途を取扱つて居るのである。罪に對する感覺の薄くなつた時は危険な時である罪の給料を懐に有つて居るのは、爆裂彈を握つて居るよりも恐ろしいことである。この罪はキリストに由て潔められることが出来るのである。パウロはそれ故に我はキリストを知りキリストを得んがためには何物をも要らないと叫んだ。「我は我が主キリスト・イエスを識るを以て最も益さる事とするが故に凡てのものを損とす、我彼れの爲に既に此等の凡てのものを損せしかど之を糞土の如く意へり」(腓三)とまで言つて居た。彼は更に進で

「我儕はキリストの心を有てり」との信念にまで到つたのである。活きるか亡びるかの問題はキリストに由て我儕の罪を潔めらるゝか將たキリストに反いて逆の運を取るかに由て定まるのである。

### 十、信仰の勇者

「義人は信仰に由りて生くべし」とは、聖パウロに由りて高調せられたる信仰に由りて生命に入るの途である、我等は信仰によりて義とせられ、信仰に由りて救を得、信仰に由りて生命を獲、信仰に由りて平安を得、信仰に由りて剛健くせられ、信仰に由りて光明を認め、信仰に由りて人生最高の幸福を享けることが出来るのである。

凡てパウロの言語は信仰の結晶物である。録して我信するに因りて言へりと有るが如く我等も此のことを信仰の靈あれば信するに因りて言ふなり」と、パウロがロマ書のみに於ていつてをる「信仰」といふこと、「信ぜり」又は「信ずるもの」といふことを悉く擧げれば何百回あるか分らない。動詞を數へることを止めて、僅に名詞として現れてをる「信

仰」のみを數へても猶何十回なるを知らない。而して之を細かに考へたら不尠興味を覺えるのである。即ち

「信仰の道に従はせ……」(一の)

「汝等の信仰」(八の)

「互の信仰」(十二の)

「信仰より信仰に至れり」(十七の)

「信仰に由りて生くべし」(十七の)

「信仰の法」(廿三の)

「アブラハムの信仰」(四の)

「其信仰を篤くして」(廿四の)

「我等は信仰に由りて義とせられたれば神と和ぐ事を得たり……信仰に由りて今居る所の恩に入ることを得」(五の一、)

「信仰の量」(十二)

「信仰の量」(十三)

「信仰の道」(十の)

「信仰より起る諸の喜樂と平康」(十〇)

此の如く一章と探求し來れば、ロマ書のみならず、凡てパウロの書翰の眞髓は「信仰」である。信仰の英雄とも稱ふべきものは、是即ち神の勇者パウロである。此の外信仰に關する言は擧げて數ふべからず、余は今、パウロを見るに信仰の勇者を以てしたから信仰に關する數句を擧げたに過ぎない。讀者自ら深く之を探り之を求め徹底せる信念を獲得せられん事を望んでやまず、須らく純粹の醍醐を飲むべし、雜水腐乳を啜る勿れ。然らば我等今より信仰に由りて何を獲べきや、ロマ書に基き其の重なるものを見んと欲す。

(1) 「義人は信仰に由りて生くべし」(十七)

是即ち信仰に由りて生命を得るのであるから、信仰は誠に尊いものである。ある人は「思煩ふ事は罪である。信ずるものは決して思煩はない。思煩の消毒劑は神にして、信仰は之に支拂ふ所の代金である」と云つたが是は判り易くて面白い言葉である。

死ねば捨てて行く體さへも大切にしながら、千萬年を経ても消えぬ魂を粗末にするもの

があらうか。信仰はこの尊い魂を救ふ唯一の途である。パウロの福音は凡て信ずる者を救ふ神の大能なり(十六)

パウロの書中何れを見ても、信仰の顯著ならざる所は見當らないのであるけれども、特にロマ書三章、四章に入れば信仰の區域又は影響は殆んど枚擧に遑なき程である。即ち一章に於ては異邦人の罪惡、二章に於てはユダヤ人の罪惡を摘發し、三章に入りては萬民悉く罪の下に在る事を證して、みな曲りて全く邪となれりといふ風に、人は誰にても行爲だけを以て完全うせらるべからざる事を論じ、而して今や人間が救を受くる唯一の途は信仰なりと斷言したのである。

(2) 「信仰に由りて 既往の罪より救さる」

罪の赦は唯信仰に由るとパウロは云つた。即ちイエス・キリストを信ずるに由りて、其の義を神は凡ての信者に賜うて區別なし(參照三の廿一―廿六) 力も(十六) 生命も罪の赦も(廿三) 幸福も(四の六) 喜樂も(十五の) 希望も(四の十七、) 平和も(五の) みなイエス・キリストに於ける賜物である。

こよなきめぐみの、きみが十字架や  
この罪の身をも、すくひたまふとは

こころにかがやく、きみのみさかえ  
あさひのごとくに、てるがうれしき

(讚美歌二六〇)

(3) 「永久の平和」

「是故に我ら信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり」(五の)  
眞正の平和は之と偕に數多の祝福を生ずる。斯の如き種類の平和は神の平和である。驚くべき信頼を示せる詩に於て四大事實が見事に認めはされて居る。

汝自身を以てするにあらず、神に對してなされたる平和

汝に由るにあらず、イエスに由りてなされたる平和

汝の事業に由らず、血を通してなされたる平和

汝が生れし前、十字架に於てなされたる平和  
斯の如き平和は人生に於ける凡ての要求を満し、而して其平和はキリストの續く限り永久に存すべし。

(4) 「信仰より出づる勇氣と勝利」

「視よ我れ蹟く石また礮石をシオンに置かん、凡て之を信ずる者は辱しめられじ」  
蹟く石又は礮石といふは、固よりメシヤを指したるものなれども、或は當時異邦に於て石で彫刻して偶像に事へし事あり。右を以て譬としたるものにあらざるかと思はる。生命のない木石にて造れるものを拜するものは結局恥辱を蒙るに過ぎない。然れど、人誰にても活ける石たるキリストを信ずるに於いては、辱しめられる事はないのである。たとひ遅くとも彼は必ず信ずる者を助け給ふのである。故に之に依頼むものはあわつる事はない筈である。(賽二十八) 斯の如き信仰を有つものはパウロと共に「患難にも欣喜をなせり」(三の)といふことが出来る。『キリストの愛より我らを絶らせんものは誰や、患難なるか、或ひは困苦か、迫害か……危険か刀劍なるか……我らを愛しめる者に頼り此等の事に

勝ち得て餘りなり。或ひは高さ或は深き、また他の受造者は我らを我が主イエス・キリストに頼れる神の愛より絶らすること能はざる者なるを我は信ぜり」(五十一冊八)

(5) 『信仰の量』

『信仰の量に従ひて公平に思念ふべし』(十三)

十二の二節に於て『此世に傲ふ勿れ』とパウロは警告を予へたが、信仰的ならざる此世は内よりも外を貴び、靈よりも肉を重んじ、永遠よりも現在を楽しむのが通常である。『信仰の量に従ひ』といふのは、自分を念ふにも信仰を以て標準とし、位記だの財寶だの又は學力などを以て自らを量つてはならぬ。信は道の源である。位置とか學力とか財寶などの力に信賴する事は、特に人の陥り易い誘惑であるから、パウロは此處に自己を見積るときには信仰を標準とすべき事を示したのである。信仰の尺度は鋼鐵の其れよりも確かである。一切の事物皆之に準據して或ひは截り或ひは補はねばならぬ。喩へば尺度を護謨製にして物を量らば如何、或ひは伸ばしめ或は縮ましめ我が欲する所の度を得て一見、甚だ賢きに似たれども其實は愚も亦甚しと云はねばならぬ。信仰の英雄パウロは曰く『信仰の量に

従ひて公平に思念ふべし」と、何ぞ其の言の深刻にして適切なる！信は生死を超越する力なり(ロマ書八) 信能癒病「汝の信仰汝を癒せり」(馬太傳九) 信能移山信仰ありて疑はずば此山に命じ此より移されて海に入れよと云ふも亦成らん(馬太廿一) 信能勝世「誰か能く世に勝たんイエスを神の子と信するものに非ずや」(一約五) 由信涉海「イエス海の上を歩めり心安かれ我れなり懼るる勿れ」(馬廿四) とは主イエス・キリストの御言葉であるが、聖パウロも亦聖ヨハネと偕にキリストの使徒たるを失はぬ。

ウエブペプロウと云ふ牧師が信仰の強い老婦人を訪問せる時の話を聞いた事がある。ウエブペプロウ牧師が彼女を訪問せるは其の重き病のために死に近づきつゝある時であつた。牧師は枕邊に行き彼女に向つて、何かお助けの出来る様な御用があるなら遠慮なく仰つしやつて下さいと云つた。所が彼女が答へて云ふには、妾には何もお助けを願ふやうな事はありません。妾の父は非帯に富める又大いなる方でありまして、今日まで一生涯の内恩寵を以て妾を愛護し、さうして妾の必要なものは何一つ不自由なくお與へ下さるばかりでなく二人の侍者をして終始妾を護衛せしめ給ひました。牧師は此の答を聞いて奇異の感

に打たれ、更に彼女に向つて其二人の侍者とは何人なりやと尋ねた。すると彼女は答へて恩恵と憐憫とであります。此兩者は妾の生涯を通じて絶えず妾を侍衛して呉れましたと云つた。やがて彼女は永き眠に就いた。

是れ詩篇廿三の六を指せるにて即ち「わが世にあらん限りかならず恩寵と憐憫とわれにそひ來らん」とあるに基た。恩恵と憐憫とは彼の老婦人にとりて二人の侍者であつたのである。斯様にわれらの心の奥底が信仰によりて潤されてある時には重病に罹り將に死なんとする時に於いても信仰の力によりて病苦にも堪へ、同じ苦しみの中にも楽しみありて我が世に在らん限り必ず恩寵と憐憫と我れにそひ來らんと歌ふことが出来る。われ等祈るべし「主よ我等の信を増せよ」と。

## 第二編 パウロと聖書

### 一、保羅と聖書

余は永い歲月の間、ロマ書を探索たのであるけれども、今回ほど聖書がロマ書の經となり緯となつて居る事を著しく感得した事は嘗て無かつたのである。パウロが聖書に於けるは恰かも航海者の羅針盤に於けるが如きものである。哥林多前書十五の三及四に「我が汝等に傳へしは我が受けし所の事にて其第一は即ち聖書に應ひてキリスト我儕の罪のために死に、また聖書に應ひて第三日に甦へり」とあるが如く、パウロ自身が受け且傳へし所の事の第一は聖書……第二も亦聖書である。

パウロが如何に聖書を重んじ且つ心を潜め思ひを凝らして之を學び究はめたるかは、其パウロの書翰中に聖書を引照することの極めて夥多なるを以て之を知る事が出来る。今ロマ書のみ限りて之を見るに、ロマ書の劈頭第一に「この福音は従前より其預言者たちに託りて聖書に誓ひ給へるものにて」と誌されてある。斯くパウロは特に聖の一字を書に冠

らせて之を聖なる書と稱した。何となれば、靈に動かされたる神の預言者に託りて、尊貴き神の約束が其書の中に含有つて居るからである。パウロが此の如く聖書を引照する所以の一つは、ロマに於ける教會の一部分は猶太人より成りし故、パウロの主張する所の教義は即ち舊約聖書と一致するものにして、基督教は猶太人の預言者と彼等が神の靈に動かされて書きし所の聖書とに基礎を有して居る事を其同胞に示さんが爲であつた。パウロが説く所の道は既に猶太人の承認する所又神の諭（ロマ三の）と一致する所のものにて、其教義は新しき者の如く見ゆと雖も、其實、猶太的教義に於て宣言せらるゝ所の者と全く調和するのみならず、之れは取りも直さず神の約束にして、預言者等も證する所なる事を宣言するものである。

パウロは未だロマに住きし事なき爲め、先づ己が聖書より深く感得せる所の點を彼の地の人々に示すは自然である。又パウロは其同胞に勝りて、聖書に渾身の尊敬を拂ひし事は明かである。ロマ書は人間が曾て書きたる書の中の最大の權威である事は萬人の承認する所であるが、然かく認められる理由は、パウロが深く聖書を探索べ、其粹に入り其精に達

し以て最も力強く之を言ひ表はして此の疑念も挿しはさまなかつたからである。

又ロマ書十六章二十六節に於て「萬國の民をして信じ服はしめんが爲め今窮なき神の命に遵ひ預言者の書に因りて顯れし其奧義に従ひて我つたふる福音および我が説く所のイエス・キリストの教訓を照らし汝等を堅固することを得るもの」とあるが如く、キリスト世に臨りて救の道を全うせられたるは、一に聖書の明に示す所なるを證明したのである。パウロが猶太人に向つて堂々と救の道を論じ、又萬國の民に對つて侃々、福音を主張したる蓋世の英氣、山を抜くの力は之れ全く深く聖書を信じ、且之に通達せるに外ならぬのである。以上に引照せるロマ書の二ヶ處にある聖書は、何れも複數にして、第一のものは「聖なる」と云ふ文字を冠らせてある。此文字はパウロ獨特の用語である。ロマ書中聖書を單數にて用ひられるものが三ヶ處ある。即ち（四の三、十の十）之れである。

「そは聖書に何と云るかアブラハム神を信ず其信仰を義とせられたり」（四の）

「聖書に凡て彼を信する者は辱められじと云へり」（十の）

「汝等エリヤについて聖書に載せたる事を知らざるか」（十一の）



此の外パウロは「録して……と有るが如し」と云へる定式を以て聖書を引照せる事の夥多なるを發見するのであるが、如何に聖書がパウロの意を支配し且つ其生命となり居りしかば、實に驚嘆に價するものがある。又「録して義人は信仰によりて生くべしと有るが如し」との定式を以て書かれたる聖句をロマ書中より列擧すれば

- 1 「神の名は汝に縁りて異邦人の中に誇られたりと録されしが如し」(二の四)
- 2 「汝の告ぐる言は義とせられ汝が鞫かるゝときは勝を得んと録されたる如し」(三の四)
- 3 「録して義人なし一人もある無しとあるが如し」(三の十)
- 4 「我れ汝を立て多の國民の父と爲せりと録されたる如し」(四の十七)
- 5 「是れ我儕終日なんぢの爲に死に付され屠られんとする羊の如くせらるゝ也と録されたる如し」(八の廿六)
- 6 「録して我はヤコブを愛しエサウを惡めりと有るが如し」(九の十三)
- 7 「凡て之を信ずる者は辱められじと録されたるが如し」(九の廿三)
- 8 「録して和平なる言を宣べまた善事を宣ぶる者の其足は美しき哉と有るが如し」(十の十五)

- 9 「神は今日に至るまで彼等に頑き心見ざる目聞えざる耳を予ふと録されしが如し」(十一の八)
  - 10 「録して救者はシオンより出で……と有るが如し」(十一の廿七)
  - 11 「録して主の曰ひ給ひけるは仇を復すは我にあり我必ず之を報いんとあれば也」(十二の十九)
  - 12 「録して主の曰ひ給はるは我は活る神、すべての膝は我が前に屈り凡ての舌は我を讚美すべしと有るが如し」(十四の十一)
  - 13 「キリストすら尙おのれを悦ばす事をせざりきそは汝を誘ふ者の毀謗は我に及べりと録されし如し」(十五の三)
  - 14 「録して是故に我異邦人の中に在りて……汝の名を讚美すべしと有るが如し」(十五の九)
  - 15 「未だ彼に就て傳へを得ざる者は見るべく未だ聞く事を得ざる者は悟るべしと録されたるが如し」(十五の廿一)
- 之を見ればパウロが書翰の經たり緯たるものは、悉く聖書より出づるを知るを得。今、使

徒行傳を見てもアポロは辯才あり且つ聖書に達せる人なりとある。又パウロは聖書を引照してイエスのキリストなる事を示し、人々の前にて甚く猶太人を辯折たりと記載されてあるが、今、ロマ書に由りてパウロの面影をありくと見る事が出来るのである。パウロ曰く「それ神の語は活きて且つ能力あり兩刃の劍よりも利く氣と魂また筋節骨髓まで刺し割ち心の念と志意とを監察ものなり」(来四の十二)之はパウロが實戦より得たる所の立證であつて、彼は此精神を以て常に奮闘して勝利を得たのである。

パウロが聖書を引照する事の夥多なるは斯の如くである。主イエスも其弟子と群衆とを教へ給ふには常に聖書に基かれた。曰く「未だ讀ざるか」又曰く「未だ悟らざるか」と、而して主自ら四十日四十夜曠野に在りて惡魔に攻めらるゝや、「録されたり」「亦録せり」などと一々聖言を以て、之を退け給うた。斯く第一のキリストは言に因りて敵に勝ち給へる如く第二のキリストたるパウロも亦聖書の言を以て勝つたのである。キリストは「聖書は我について證するものなり」と仰せられた。我等も亦須らく熱心に聖書を探り索めてイ

エス・キリストに來なければならぬ。

## 二、勝ち得て餘りある生涯

或人がムーデーに、貴下は聖書の中何處を最も愛讀せらるゝかと問うた。すると彼は之に應へて聖書中最も重なる部分三箇所を示したのである、其れは詩篇第九十一篇、哥林多前書第十五章及び、余が茲に主題として擇びたるロマ書第八章であつた。聖書偉人の稱あるムーデーが多年心血を灑いで學べる聖書の事であるから彼の勸めたる箇所は眞に聖書中の聖書と謂ふも過當でない。又スピネルは「聖書を以て指輪とし而してロマ書を其指輪に在る寶石に譬ふれば第八章は其寶石の最も輝ける部分である」と云つたさうであるが、如何にも適切なる比喩であると思ふ。以上の外に、なほロマ書第八章の主旨に就ての諸大家の感想を擧ぐれば左の如くであるが、これらによりて略ロマ書に於ける第八章の地位を窺ひ知る事が出来る。マイヤはロマ書第八章を以て、イエス・キリストに在るものゝ幸福なる状態と稱へ、モールヘッドは「信者の状態と立脚地」と呼び、ホツチは「信者の安全」

と云つた。又ビンゲルは之を「解放と自由」であるというて居るが何れも能く第八章の精神を顯して居る。しかしこれらを以て第八章の眞隨を悉く言ひ盡したとはいはれない。所有學者は口を極て第八章を賞讃するけれども、其美と高さと深さととは到底筆舌の及ぶ所ではない。かの水の味の説明し能はざる如く第八章の深玄なる意義も之を讀む者の感悟自得に俟つの外は無いのである。さはれ余が第八章を讀みて著しく感ずるは「聖靈の能力」と云ふ事である。従つて誰人も第八章を終始熟讀せば自らそこに四箇の趣旨あるを發見するであらう。第一は聖靈の感能に由て全く肉體の勢力を制し得ると云ふ事である(十一)(而して茲に注意すべきは、第八章の眞義に徹底せんとするには是非第七章を味得して置かなければならぬと云ふ事である)使徒パウロが第七章の廿三、廿四に「わが肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ我を擒にして我が肢體の中に居る罪の法に従はするを知れり、噫われ困苦る人なる哉この死の體より我を救はん者は誰や」と絶叫して居るが之は自力の脆弱を浩歎したものである。即ちパウロは律法や學識などを以ては到底自らを救ふ能はざるを悟り、且つパウロ自身の不完全と罪業の深き事とを痛切に意識したのである。而し

てパウロは如上の煩悶苦惱を経て後、遂に救の力を主キリストに於て發見し「是れ我儕の主イエス・キリストなるが故に神に感謝す」との大安心に到達するを得、更に第八章に入り其劈頭に於て「是故に今イエス・キリストに在るものは罪せらるゝ事なし」と大膽に證明する事を得たのである。この「イエス・キリストに在る者」と云ふ意味を稽ふるに、原語にて「エン」といふ事は即ちキリストの中に在る者との義である。甚だ小さき前置詞ではあるが意味の深い文字である。此文字は第八章に三度用ひられて居る。即ち壹節に「イエス・キリストに在る者」二節には「キリストに由りて」卅九節には「イエス・キリストに頼る」とある。邦譯にては三つ共別種の文字を用ひて居るが、原語ではすべて「エン」と云ふ文字である。鳥が空氣の中に在りて。飛翔し、魚が水中に在りて游泳し、樹木が土中に深く根を張りて成長する如く、我儕の生命も亦、唯主イエス・キリストの中に在りてのみ安全堅固なるを得、又生長發達し得るのである。使徒パウロは「それ我儕は彼に頼りて生き動きたる事を得るなり」と徒十七の廿八に云つて居るが、よく這般の消息を言ひ現はした言葉である。今第八章の一節より十一節までを見るに聖靈の働きは三様にあらはれて居

る。(a) 聖靈はキリストに於て罪の刑罰を免れしむ(二)。(b) 聖靈に由り肉の權威より救はれて自由を得(八三)。(c) 聖靈は靈魂と身體即ち全人を死の權威より救ひ出す(九一)。(a)に著はれて居る思想はつまり絶対他力の有難味を説いたものである。(b)はパウロの禁欲主義とでも云はんか。肉の事を思ふは死なりと云つて肉欲の非を叫んでをる。其理由として「肉の事を思ふは神に垂るが故なり……肉に居るものは神の心に適ふこと能はず」と説いて居る。昔より神に垂れる業を爲して眞に榮えたるものはない。神に背き神に逆へば必ず滅ぶるは當然である。之に反して「靈の事を念ふは生なり安きなり」とあるが如く。卑しき肉の支配を超越して神の聖旨に適ふ生活をなすものは神より榮と尊きとを冠せらるゝのである。更に句節を進めて考ふるに「もし神の靈なんぢらに住まば」若しキリスト爾曹に住まば「若しイエスを死より甦らしゝ者の靈爾曹に住まば」云々の聖句はあるが何れも聖靈の働きと其恩化とを示したものであつて、恰も花の蕾が温暖胎動たる春風の中に爛熳として咲亂るゝ如く神の愛の靈が我儕の心に灌がれて初て衷に潜める生命が外に向つて啓發さるゝ事を説いたものである。地上に豊かなる日の光が照り輝く時に花開き果を結ぶ如く聖靈

の光明が我儕に照り輝やくときにそこに生命と平和と安息とが來るのである。意志の力は或は肉の勢力を暫く壓服することが出来る。しかし之を滅するは聖靈の力に俟たねばならぬ。第八章について考ふべき第二の事柄は聖靈の能力に由りて神の子たることの實現せられる事である。即ち十四節より十七節までの間であるが、之を細かに吟味すれば少くとも三つの點が発見せられる。(a) 身體の行爲を滅した所の靈は人に生命を與ふ。(b) 而して此生命は子たるものゝ生命である事。(c) 此子たることはキリストと偕に後嗣たる事を證明するものである事。

此「子」と云ふ事に就ては十四節に「凡そ神の靈に導かるゝ者は是則ち神の子なり」十五節には「爾曹が受けし靈は……アバ父と呼ぶものゝ靈なり」十六節には「聖靈自ら……我儕が神の子たるを證す」と記して居る。これらの聖句に由りて思ふに、聖靈は感化を與ふるもの、暗示を予ふるもの、又指揮するものとして彰はれて居る。従つて聖靈の感化を蒙り、暗示を悟り、其指揮に従順なるものが即ち神の子である。使徒パウロは凡そ誰人と雖、斯く聖靈に動され且つ導るゝものは是即ち神の子なりとの事實を明に示したのであ

る。我儕は今や神の家庭の一員となり日夕神に親炙し、親として神を敬ひ侍り、「アバ父よ」と呼び得るは偏に神の靈の恩化の指導によるものである。天父は常に聖靈を灌ぎて我儕の靈を新にし遂に神の子と成し給うたのである（約一の十二、馬太五の）實に是れキリストが世に來れる目的にして救の眞髓は即ち是れである。第三に考ふべきは、聖靈に由り將來成熟して榮光となる事である。十八節より卅節までは患難に耐ふる力と、患難に於ける慰藉とに關して論じたものであるが、こゝにも三つの異なる點がある。(a) 將に顯れんとする無限の光榮(イ) 現在の患難と將來の光榮(十七、) (ロ) 我儕が救を得るは望によれり(四) (b) 聖靈の補助。(イ) 聖靈も亦我儕の荏弱を助く(六) (ロ) 聖靈自ら我儕のために祈りぬ(七) (廿) 如何なる聖徒と雖、聖靈の補助を得なければ其望む所に到達することは不可能である。故にパウロは「聖靈は我儕の荏弱を助く」と言つた。又、他の處にて「我弱き時に強ければなり」と云つたのも、つまり聖靈の補助を指したものである。(c) 神は萬事を統治し給ふ、故にたとひ其民が現在患難の下に在りと雖、結局萬事を導きて其の民を幸福なる状態に置き給ふ。(イ) 凡ての事は……神を愛する者の爲に働きて益をなす……(八) (ロ) 榮光の

キリストの像に倣ふに至る五階段を示して居る。即ち「豫め知り」「預め定め」「召き」「義とし」「榮を賜へり」是である。サンデー博士は之を「救に入る向上的進行」と云つて居るが眞に適切なる言である。第八章について最後に考ふべきは(三九) 人生に於ける奮闘の凱歌と云ふ事である。「若し神我儕を守らば誰か我儕に敵せんや」實に是は磐石の如き大信仰より進り出たる言葉である。思ふにキリスト者の生涯は終始戦闘である。而して聖靈の能力によりてのみ勝利は與へられる。即ちパウロと偕に「我儕を愛する者に頼りすべて此等の事に勝ち得て餘りあり」との凱歌を擧げ得るのである。余が親愛なる教友に枳谷某といふ人があつた。篤信敬虔のクリスチャンであるが多年の宿痾の爲に身體の自由を缺き、起臥はおろか書を読むことすら充分に叶はず。唯僅かに聖書だけは其日々々の課表によつて懈りなく讀んで居つたのである。所が一日其病危篤に瀕したので其友人が之を見舞つた。すると命旦夕に迫れる枳谷某は、身に大患あるを打忘れたるが如く、日課の聖句を暗誦して欣喜雀躍して居つたとの事である。其聖句は「汝等は彼等に勝つ事を得たりそは汝等の衷に居るものは世の衷に居るものより大なるに因りてなり」(約壹四)であつた。あゝ是れ神の

言に由りて能力を得、病苦と此世とに勝ち得て餘りあるものにあらずや。實に大なる哉聖靈の力！偉なる哉信仰の力！

三 基督教道徳の根柢 (其一)

「天地は廢せんされど我言は廢せじ」とは二千年の昔ナザレのイエスの宣言であつたが、その當時誰れか此言を信じたであらう。然し眞理は亡びない誰か之に敵することが出来よう。今や聖書は世界的寶典と認められて來て萬人の書となつたことはこれが世界に賣れ行く高が一分間に四百冊宛であることで明白である。人之を食ひ之を味ひて其人の血肉と成るのは決して偶然ではない「我れ爾の言葉を得て之を食へり爾の言葉は我心の悦び快樂なり」とは實際上の眞理である。

羅馬書の各章を以て日々時刻に譬ふれば第八章は夜の闇黒が破れて今しも東雲の空に旭の光を見初めたところ、又第十二章は日三竿に上り將に白晝に至つたやうなものである。「そのいでたつや天の涯よりしその運り行くや天の際に至る、物としてその和煦をかう

ぶらざるはなし」といふ光景である。是れ山の絶頂である。之を富士山に譬ふるならば其頂上である、この頂上に登つた名僧の歌に

雲よりも上なる空に出でぬれば

雨の降る夜も月を見るかな

とあるが羅馬書第十二章の精神に到達して觀ればこれ實にキリスト基督教道徳の根柢に立つた感がある。

キリストが或人から總ての誠の中その最大のものは何ぞやと問はれて答へられたお言葉がある曰く「我儕の神は即ち一つの主なり爾心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して主なる爾の神を愛すべしこれ誠の首なり第二も亦之に同じ己の如く爾の隣を愛すべし斯れより大なる誠はなし」と、余はこの最大なる誠の實現を第十二章に於て認める本章を大別して三部とする。

第一、神に對する義務 (二、)

第二、自己に對する義務 (三、)

第三、他人に對する義務 (九一)

その身を(原語は身體) 神に献げよと先づ切り出して居る、人は凡て神の祭物となるべしと彼は曰ふのである。然かも聖き活ける犠牲となるのである、神の意に適ふ物は之より外にはない、これが當然の祭で眞の奉仕である神の要求と人の義務とが茲に明かにされて居る。彼は神の慈悲をもて勸むるといふ、勸むるは寧ろ希ふの意であらう、キリスト者の信仰は其土臺は神に感謝の誠意である、諸の慈悲を受けたる彼は語らざるを得ない、勸めずには居られない、希はずには止みがたいのである、羅馬書中に「希ふといふ語は三回程使はれてある。」

昨年十月の御大典に際し盛岡市では奉祝の意を表すために大花瓶一對を聖上陛下に献上することに決し、美術家松橋宗明氏は之を光榮として細心の注意を拂つて製作に従事した。其花瓶には「寶祚萬歲聖壽無窮」の八字を尾崎文英師の筆で美事に出来上つたのとであるが、我儕の身體を神に献ぐるに於ては層一層の丹精を凝らして聖き活ける祭物とせねばならぬのである。昔一人の彫刻家が非常なる苦心を嘗めて大理石像の背の方を一生

懸命に刻んで居たが、側の一人が曰ふには髪の毛などは念を入れずともよい、どうせ人には見られる氣遣がないのにと訊ねた、然るにその彫刻家はいふ、人には見えなすが神にはチャーンと見えるからと答へたとあるが、我儕は何事をなすにも神は如何に之を見たまふかと考へねばならぬ。

次に、心を化へて新にせよとある、その前に先づ、この世に效ふ勿れとあるが見逃してはならぬ語である、此世とは何んな世を指して云うたのであらうか、思ふにこれは神なく望なく信仰なき一般世間の人を指したことであらう、もつと切り込んで申せばイエスを十字架に釘けた此世の人々を指したものであらう、時代の人に效はず現實の生活に捕はれぬ方針であらうと思はれる。昨日も今日も何時までも變ることなきイエス・キリストに效ふべきの意であらう。さらばこれは何うすれば出来るか、即ち心を改めて新にせよである。人に回心を勧めることは人の生涯に取つて重大な問題である、回心は人の魂が神に歸るか罪に亡びるかといふ分岐點である、即ち我儕の目的を一變することである、心機一轉全心新しき人となりて意志を神に向けて進み行く人となることである、「荒野に水湧き沙漠に

花咲き薫る」とは將に此回心を實驗した人の世界をいふのである。心を新に化へて人は神の完全なる聖旨と善にして悦び給ふ思召とを知ることが出来る、神を識ることは永生を得ることである、然らば神を識らんがために心を化へて新にすることは即ち人を新たに造り更へることである。パウロが福音を耻とせずと叫んだ心の奥には實にこの希望を握つて居たからである。さて心を化へて新にするには如何にすべきであらうか。人は自分の意志と努力とで此事が出来てあらうか、精神修養で此目的が遂げられることであらうか、人は獨力で回心することは出来ない、心を新に化へるには神の力に依らなければならぬ。聖書には「人キリストに在る時は新に造られたるなり舊きは去りて皆新しくなるなり」とあつて我儕が新にせらるゝには我儕以上のものに信頼渴仰せねばならぬのである。「爾神の仁慈は爾を悔改めに導くなるを知らずと」パウロは云うて居る、ダビデの詩を読めば次の語がある「あゝ神よ我がために清き心をつくりわが衷になほき靈をあらたにおこしたまへ」とあゝ清き心をつくる事と直き靈を新におこす事とはこれ神の聖業である、經に曰く「一華開けば天下皆春なり一たび發心すれば法界悉く道なり」と、我儕の心が新になれば萬

事の真相を見ることが出来るのである。「心の清き者は福なり其人は神を見ることを得べければなり」と、キリストは教へ給うたのである。清き心を以て神に見ゆることの出来るやうな人になりたいものである。

然れば我儕は盡くすることなき神の仁慈を蒙り以て此身體を神の旨に適ふ聖き活ける祭物として神に献げ、我儕の心を新にし、自らの革新を全うし、以て神の旨の完く且善にして悦ぶべき旨を辨へ知りたものである。

基督教道徳の根柢 (其二)

「自ら變化せよ」之は自己の革新と云ふことになる。學問は理窟の方で、宗教は事實の側である。學問では斯くあらん斯くあるべしと云つた所で其れは何の役にも立たぬ。色々理窟を捏ねたり、様々な事柄を陳立てたりしても、其れは單なる空理空論であつて人の心を奥底から改造し革新することは不可能である。かの倫理學の如きは即ち其れである。自己革新の第一歩は心底の改善である。ロマ十二の十一に「心を熱くして主に事へ」とある。



パウロは此處に「汝等の心を新にすることを以て自ら變化せよ」と教へて居る。路加二十四の四十五に心と云ふ字が聰と譯されてある。即ち「其聰を啓き」といふは面白い譯である。聰が啓けて来て、そこで其性癖が改まり其本質を變化するに至るのである。

「汝等の心を新にするを以て自ら變化せよ」變化は心を新にするを以て影響を蒙る。心は固と神の形體に隨つて聖潔く造られ且つ善良なものであつたが、肉の中に蔓れる罪の爲めに妨げられて曖昧くなつたのである。(二二) 彼等心に神を存する事を願はず(二八)「我肢體に他の法ありて我が心の法と戦ひ我を擲にして我肢體の中に居る罪の法に従はするを悟れり」(二七)

我等は我等の性癖を變へ、自らの質を化へなければ到底神を悟ることは出来るものでない。質を變更して往く一つの方法は聖靈の感化を蒙り我等の心即ち内なる人を新にすることである。我等が從來の心の方向を轉換して神に向つて進んで往くといふことが神の御思召である事がわかる。

「なんぢ神の仁慈は汝を悔改に導くを知るはず」(ロマ二)悔改に於て神の心と人の心、神

の力と人の力が合同して同一方面に働くのである。「誘惑は神より離れしめんとする力である。悔改は神に歸らんとする決心である」と柏井園氏は云はれたが、此決心が我が裏に起り而して之がいつまでも續く事によつて遂に自ら變化することが出来る。茲に「自ら變化せよ」とあるが、或學者は毛蟲が變つてトンボとなると云ふ時に之と同じ變化と云ふ文字を使つてゐる。此文字を此聖句に使用してある所を見ると、之は人の上に及ぼす所の完全なる變化を指して謂ふのであると思ふ。即ち人若し信者とならば従前のものより全く變化つたものにならなければならぬ事を示したのである。「人キリストに在るときは新に造られたる者なり舊きは去りて皆新しくなるなり」と哥林多後書五の十七に記されてある。

「キリスト父の榮に由りて死より甦へされし如く我儕も新しき生命にあゆむべき爲なり」(ロマ六)又「靈の新しきに由りて事ふ」(ロマ七)パウロは、こゝにも亦自ら變化せよと勸めてゐる。

之を成す方法はと云へば前にも云つた通り心を新にするに在る。英語にて「リニューイング」とある。即ち元通りにするのである。心は車の心棒のようなもので心棒がしつかり

しなければ車はよく廻轉しない。又心は天文學者の望遠鏡に於けるが如きものである。望遠鏡が明白に磨れてなければ天文をよく看る事は出来ない。我等の性癖を改めて往々に一番大切なるは我等の心を新にする事である。人間を家にたとへると心は其基礎である。心が新になつてくれれば自己を識る様になる。自己を識るやうになれば自然自己の性癖も改まり遂に性質を善い方に變化さす事が出来る。

心が新になれば萬事の真相を明に觀る事が出来るのである。不完全なる望遠鏡を以て天文を窺ふ事能はざる如くまがれる心を以てしては何物をも明確に觀る事は出来ない。人は生れながら心暗さものの、神に悖れるものであるから萬物を知る事も不可能である。のみならず神の全智全能なる事が分らない。故にキリストが山上の垂訓の劈頭に於て「心の貧しき者は福なり。天國は即ち其人のものなればなり」と仰せられたのである。

變化を蒙るは行爲のみではなく心其れ自身である。行爲の變化は心の革新より來るのである。内村鑑三氏は「地に屬けるものが余の眼より隠されし時始めて天のものが見え始め、いぬ」といはれたが、斯くてこそ眞の變質を見る事ができる。パウロは自ら變化せよと云

つたが其の理由と目的とは何であらうか、それは二節の後半を吟味すれば明かになる。即ち「神の全く且つ善にして悦ぶべき旨を知らん爲め」と記してある。

「心の清き者は福なる哉其人は神に見ゆる事を得ん」とキリストは教へられた。余は夢にだにも未だ見神の實驗を持つて居ない。然し余は聖靈の助けを蒙りて、聖より聖に入り遂に神に見えんことを望んで日々努力して居るのである。あの高い天へどうして登ることが出来ませうと驚いた子供に向つて其母親が「天が先づお前の處へ降つて來て、そしてお前の心の中に這入るのである」と答へたさうであるが、我儕は先づ新になり、全く別の者に成つて始めて神の全くかつ善にして悦ぶべき旨を辨へる事が出来るのである。然し之は到底自分の能力のみではなし得ない。「エテオピヤ人その膚を變へ得るか、豹其まだらを化へ得るか若し之を爲すを得ば、惡に慣れたる汝等も善を爲し得べし」(耶二十三)石よりも堅き心を神は如何にして救ひに導き給ふか。神は實に鐵槌の如く之を打碎き給ふ。キリストの福音は硬き心を溶解する恰も火の如し「我は火の如くならずや」とエレミヤの言ひしは即ち律法の能はざる所を神は成し給うたのである。

故に本文(二ノ十)を見てもパウロは「神の諸の慈悲を以て」と云ふのである。即ちエテオ  
ビヤ人が其膚を變換し得ざる如く自分の力のみでは神の意に適ふやうに此身體を聖く活け  
る祭物となす事が出来ない、どうしても之は唯神の慈悲に俟つより外はない。パウロが「汝  
神の豊なる仁慈と寛容なると恒忍び給ふ事を藐視する乎其仁慈は汝を悔改に導くなるを  
知らず」と云へるを考へても、我儕の心が改まつて新なる人となるには神の大なる仁慈を  
要する事が明である。

讚美歌百八十六の一節

さまよへるものよ            たちかへりて  
あまつふるさとの            ちよをみよや  
つもとがをくやむ            こころこそは  
ちよよりあたふる            たまものなれ

基督教道德の根柢 (其三)

自己に對するの道 羅馬書十二章三一八  
「信仰の量に従ひて公平かに思ふべし」

偉大なる使徒パウロは篤き熱心と天地に徹底せる眞實とを以て基督者の謙讓と勤勉とを奨  
勵して居るのであるが、其獎勵する態度たるや如何に眞劍にして然かも謙遜かるかは「我  
うくる所の恩に藉りて爾曹各に告げん」と云ひ出でたるに徴しても明かである。パウロに  
は智徳兼備して居た。又主の證人たる使徒の權威實力も豊かに與へられて居た。然し是等  
信仰の賜は皆神よりの恩賜であると彼は心より信じて居た。神が與へ主であつて自分の今  
有てるものは一つとして神の賜ならざるは無しとの信仰より彼には常人の及び難き謙抑の  
徳が具つて居たのである。彼は又自省の人である、此三節中に於て「思ふ」と云ふ文字が  
四度も用ゐられてゐる(英譯を参照せよ)。彼は沈思の人であり従つて他人にも斯くあらん  
ことを要求した。人は須らく自己を思慮反省して自分の立場を知らなければならぬ。人は  
各社會にあり又教會にありて定まれる天與の位置がある。決して過分の期待をなしてはな  
らぬ。妄りに高位高官を志し、又人の尊敬を受け、徒らに自己雄飛の領分を擴張せんとす

るものは、彼れに授けられたる信仰の量に從ひて其身を處理せざるもので、此の如き人は遂にパウロの如き謙遜も無ければ又真正なる満足も與へられず、常に好んで自らを高くするに至る不遜のものである。

パウロは斯く本章の劈頭に於て慈母の如き謙遜と柔和とを以て信徒に接すれども又時として使徒の權威を有するものとして嚴父の如き態度を示して絶對服従を迫るが如き場合なきに非ず。即ち「我……爾曹各々に告げん」と云へる莊重なる口吻は吾人をして主イエスが山上に於て垂訓し給へる神子の權威を忍ばしむるに足るものがある。次にパウロは「心を高り思を過すこと勿れ」との警告を與へてゐる。實際人は自分を重く視過ぎる癖がある。それで彼は更に進んで「神の各人に賜りたる信仰の量に從ひて公平に思念べし」と説いた。神が人にお許しになつた信仰の量を超えて、より高く自己を思慮し評價することは信者の道では無い。人は宜しく自分の位置本分を確守する爲めに信仰の標準に從はねばならぬ。各信徒が其信仰が強いとか又は弱いとか或は又其信仰の大小冷熱の區別は是れ信仰の量にして、此量が其人の信徒たる品位を神の前並に他の信者の間に指示するものである。

申す迄も無くパウロは信仰の熱烈な人であつた。而して其信仰と生活とが誠に善く調和してゐた。此處に堅實なる信仰生活の花が咲き實が生るのである。彼は信仰の量に循ひて(一)預言をなし(二)役事をなし(三)教誨をなし(四)勸慰をなし(五)吝みなく施し(六)懈らず治め(七)歡びて憐むべし、と教へてゐる。人は皆各信仰によりて特種の賜を蒙り居る。されば各自の立場に於て己の本分を盡すべきであることをパウロは懇々と誨へたのである。此處に其七種の賜を略解すれば。

- 一 預言、預言するとは聖靈より直接の働が加へられて神の旨を言出す賜を云ふ。
- 二 役事、此役事なる語は羅馬十一の十三に於ては「我が職」と譯され、福音の傳道を含み又哥後九の一には「聖徒に施す事」と録されてある、即ち聖徒に對する一般の救濟としてある(西四ノ十七、來一ノ十四)
- 三 教誨をなす者とは聖書より學びたる天國の主義精神と其根本的眞理とを弘め(提後四ノ十六)而して信徒を養育して眞理の眞偽を分別せしむるを云ふ(弗四ノ)

四 勸慰をなす者とは信徒を慰め又信徒の實際的義務責任を果すやう獎勵するのである(提前四ノ十三)

五 賙濟をなす者 教會の執事にして賙濟を掌り、又は個人の私財を投じて可憐なる貧窮の同胞を救濟すること。

六 理治をなす者 之れは他人を管理し又は一家を治め教會を理治むる長老の如き者を云ふ。

七 矜恤をなす者 之れは何か不幸に際會したる者を扶くるに足る賜を受けたる者にして、貧しき兄弟を扶くるに金錢又は物品を以てし、患難、貧困、病氣、又は災難に因りて苦しめる者を矜恤むことを意味す。善きサマリヤ人の如き者を指す。

パウロが如何に主キリスト・イエスの精神を辨へたる者なるかは、吝なく施し(一六六ノ)懈らずして治め、歡びて憐むべしと云へるにも知らる。主の僕たる者が各發奮して以上の務を盡す時始めて此現實の國土を神の國となすことが出来る。我等は其一端を爲すことを得ば眞に生き甲斐のある生涯を成就したる者と稱することが出来るのである。

基督教道徳の根柢(其四)

羅馬書第十二章を讀みて、

(一) 神に對するの道 献身と化新の心

(二) 自己に對するの道 公平に思念ふべし

(三) 同胞に對するの道 兄弟の愛心

羅馬書第十二章を一日の中の時間に譬へて見ると正に晝の正午である、太陽は今や愈輝いて其中天にあるの光景である、即ちソロモンの「義者の途は旭光の如しいよ」光輝を増して晝の正午に至る」はこれである。茲に神に召されて獨子イエスに倣へる神の子等が人生の旅路にあつて如何なる態度で世に處すべきかに就て實際生活の規範を與へて居るのを見ると、第一神に向ては先づ其の身を献げて之を神のものとなし、常に神の御側に近く仕ふべきと、次に神の旨を辨へんが爲めに自ら心を革新しその性質を變化すべきことである、イエスは人新たに生れずば神の國を見ること能はずといはれたが、パウロは此の眞

理を心に記して今茲に心を化へて新にせよと勧めたのである、新らしき酒は新しき革囊に盛るべきものである。

第二、自己に對しては常に公平に思念ふべしとある、一旦その身を神に献げたる者は此世に私慾を有たれぬ筈である、「各キリストにおいて一體」にて皆其の枝であるから其の與へられたる使命を忠實に盡さば足るのである。これは職分であつて、虚榮ではない。「心を高ぶり思を過す」はこれ空しき譽を求むるから起る取越苦勞である。「汝自身を知れ」とは大哲ソクラテスの人生哲學の根柢であつて、人は自らの分を知らなければ價値ある生涯を始めることは出来ぬ、神より賜はる恩恵と平康とを心の衷に有たぬ者の心は風に動かさるゝ葦である。

第三、何を以て同胞に對するかの問題に達した、彼は答へて曰ふ愛であると、「互に相愛し」之より外に何物もないのである。本章の第九節より終節までの精神は愛の一語を以て貫いて居る、愛を除いて基督教はない否愛なき處に神は無のだ。「神は即ち愛なれば也」である、故に愛を壞く者は凡ての物を有つて居る、愛無き者は何物をも有たぬのであるとはこ

れパウロの信仰の中心である、其宗教の生命である。

愛といふ字が名詞として表はされて居る點は、第五章に入つて二箇所ある、(a)「こは我儕に賜ふ所の聖靈に由て神の愛我儕の心に灌げばなり」(五ノ)(b)「キリストは我儕尙罪人たる時われらの爲に死にたまへり神は之によりて其愛を彰し給ふ」(五ノ)第八章に入つて愛なる字は動詞又は名詞としてあらはれて居る。

(イ)神を愛する者のために悉く動きて(二八)

(ロ)キリストの愛より我儕を絶らせん者は誰ぞ(三八)

(ハ)我儕を愛める者に頼りすべて此等の事に勝ち得て餘りあり(三七)

(ニ)我儕を…神の愛より絶らざること能はざるを我儕は信ぜり(三九)

キリストの愛はパウロが狂喜して人にも傳へ筆にもしたところのもので、彼の生涯の奥義は此一事に盡きて居ると言つても差支ない、何處の説教に何れの書簡に彼が此事を發表しないものがあるか、パウロのいふ愛は我儕がキリストを愛する愛ではなくてキリストが我儕を愛する所の愛である、然かも此愛は如何に彼の生涯に働いたものであるかを學ばん

に、彼は其第八章に七難を擧て凡て此等のものは我をしてキリストの愛より絶れしむることとは出来ぬといつた、曰く「患難なるか或は困苦か迫害か飢餓か裸程か危険か刀劍なるか」と、是一々彼が身に實驗したる苦痛であつた、然かも如何なる場合にも彼はキリストの愛に支へられ、勵まされ、力つけられ、慰められて「此等の事に勝得て餘ある」ことが出来るといふのである。

「愛るもの」は過去分詞であつて主イエスが十字架に釘けられたる其の精神に由て我儕は勝利の生涯を送ることが出来るのである。「爾曹世に在りては患難を受けん然れど懼るゝ勿れ我既に世に勝てり」と主イエスは語りたまうた、イエスの事業は既に完成せられたものである。彼の愛は完全なる愛である。此完全なる愛に觸れ 其愛を心に灌がれる者が此世に勝たれぬ理由はない。病める婦人イエスの衣の裾に觸りてだに十二年來の病が癒えたところがあるが「我儕を愛し其血を以て我儕の罪を洗濯め」(黙一) たまふキリストに接して彼の弟子となり「教會を愛し其の爲に己を捨て給ひし」(弗五) 救主に信頼して眞の平和と窮りなき喜悅とに與りたいものである。

キリストの愛を其根柢とせる基督教道徳こそ人を世の罪と愛とより救へき、神より賜へる貴き、福音である。

基督教道徳の根柢 (其五)

パウロの感得したるキリストの愛及其の影響

パウロが傳道の眞髓と其の同胞とを愛する熱情は全くキリストの愛を其衷心に灌がれ全靈を以て主に仕へたいのである。キリストの愛がパウロの魂に如何に働いて居るかを見れば  
 (一)「我は福音を耻とせず」我は負へる所あり「我は福音を傳へんことを欲ふ」  
 (二)「若し我兄弟我骨肉の爲めならんには或は(我自身)キリストより絶れ沈淪に至らんも亦我が願なり」

(三)「兄弟よ我心に願ふ所と神に祈るところとはイスラエルの救はれんこと也」  
 斯くの如きはパウロの衷心に働いたキリストの愛の結果であつた。愛である、然りキリストより流れ来る愛である、これ實にパウロをして奮起せしめ献身の生涯を送らしめたもので

ある「汝等互に愛を負ふの外凡ての事人に負ふこと勿れ蓋人を愛する者は律法を完全すれば也此餘なほ誠あるとも己の如く爾の隣を愛すべし」と曰へる言の中に包たり愛は隣を害はず是故に愛は律法を完全す」(三ノ八)彼は尚コリントの教會に贈つた手紙に於て愛の高き精神を示して居る、あの世にも美しき愛の説明は眞に衷情に愛を味ひた人ならでは發し得ない言である。「我爾曹を愛する如く爾曹も亦互に愛すべし是れ我誠なり」(約翰十五)とキリストの言はれたのは弟子達に向つてである。隣を愛することがキリストを愛することである、このことに優つて主の悦び給ふことはないのである。其處がキリストの國であり神の國である、されば愛を負ふの外とあるのはこれを以て人生の第一義に置たからである、愛以外のものゝある處には争が起り不平が出で而して愛に終る。愛のある處には勤勉があり禮節があり幸福があり平安がある、これ健全なる生活の基である。

パウロは以上に於て重に個人的のことを述べた、愛は個人を如何に變らしむるものであるかを自分の實驗より述べて居るが、然しこれに止まらない、彼は更に進んで公民としての生活にまで愛の影響を説て居る。それは第十三章の初めの方に現はれて居る、我等信徒

の生活は單に教會内に止まつて居ない、一般社會の人にも接しなければならぬ、國家に對する義務も有つて居る「上に在りて權を掌る者に凡て人々服ふべし蓋神より出ざる權なく凡そ有るところの權は神の立たまふ所なればなり」國の主權者に對して誠實なる心を以て然かも悦で奉仕することが出来るやうになる、即ち人を愛するに至て更に律法をも尊重するに至る、律法は神の立て給ふところとするからである。そこで「愛は律法を完す」である。愛は悦を以て義務を行ふ力となるのである。

覺如上人の歌に

あはれみをもものに施す心より

外に佛のすがたやはある

といふのがあるが、此歌の心を考ふるときは益々其妙味を感じることが出来る、鳥の雌は平素は穩であるが、雛を育てる時には格別に勇ましきものとなるのである。

「宇治の傍に黄蘗山萬福寺といふ寺がある、鐵眼と云ふ名の僧で、鐵の眼と書いた恐しい名前を付けた一人の僧があつた、昔から澤山佛敎の書を寫し傳へたり或は徳川時代に活字



版の一切經が出来たけれども眞實の版木でない眞實の版木がないから何卒一生の中に一切經の版木を拵へたいといふ願を起して朝廷に願ひ、又江戸の幕府に願ひ其外貴賤の別なく、勸進帳を廻して篤志を乞ひ、漸く、一切經の版木を拵へる金が出来ますと、丁度其頃に當て飢饉といつて米の穫れぬ不作の年が出来て非常に貧民が難澁致した、其事を見て今の鐵眼が多年辛苦して一切經の版木を拵へる爲に集めた金をば一度に皆貧窮して居る者に施して仕舞つた、然れども初の願は矢張り有つて居りましたから又少し年が好くなつて來ますと再び勸進を始め出した、二度目も丁度版木を拵へる程の金が集ると生憎再び飢饉の年が出て來た、又惜氣もなく二度集めた金を施して仕舞つた、夫れでも初めの志を失はずと一〇三度目に集めた金で拵へた其版木を以て摺立てたる一切經が黄蘗版といふのである、此事を先年知恩院の和尚となつて八十三歳で歿せられた行誠上人は評して黄蘗の鐵眼は二度生きた一切經の版木を拵へ、三度目には死だ一切經の版木を拵へたといはれたり」

といふ面白い話が南條文雄師の向上編鐵眼禪師の藏經出版の項に載せてある、行誠和尚

は一代の名僧だけあつた、鐵眼は二度生きた一切經の版木を拵へ、三度目に死だ一切經を拵へたと愛の力は死よりも強いことを彰はしたのである。

パウロは「假令我山を移すほどなる信仰ありと雖も若し愛なくば數ふるに足らぬものなり……愛は人の益を圖るなり……愛は永久も墮つることなし……」といつて居るが愛の價値をこれまでに強く感じて居つた人は多くないと思はれる。

本書第十四章と第十五章とに顯はれたるパウロの精神は、眞に公平で又無我といふべきキリストに在る愛を以て萬人に接するところの公明正大なる襟度を窺ふことが出来る、曰く「信仰の弱き者を納けよ」といふのである、羅馬書前半には獅子の如きパウロが絶叫して居り、其後半には慈父の如きパウロの愛が見える。キリストの愛は鳩の如く降り、露の如く滴る愛である、これが生命であり眞理であり恩寵である。

#### 四、神の子たる者の特性

凡そキリストの靈なき者はキリストに屬ざる者也(ロマ八)

凡そ神の靈に導かるゝ者は是すなはち神の子なり(ロマ八)  
 人の生活は靈的生活と肉的生活と二つに別つて考へることが出来る。靈が肉に克つた時  
 には死の法は亡び、肉が靈に克つた時には人は暗黒に迷ふのである。靈と肉との闘は一  
 刻たりとも絶ゆる時がない。

使徒パウロは羅馬書の第八章に於て、實に深刻なる議論を述べて居る。否單なる議論で  
 は無くして寧ろ彼が長き間の實驗の證明である。信仰の告白である。

「第一イエス・キリストに在るものは罪せらるゝことなし」(一節)信仰に於てキリストと同化  
 し、靈に於てキリストと交る者、即ちキリストの中に在るものは心中自から高潔にして敢  
 て罪せらるゝことがない、のみならず肉の支配を受くることなく、却て肉を制服して自由  
 の生活を送ることが出来る。もし神の靈なんぢらに在まば爾曹は肉に在で靈に在ん」(九  
 節)なんぢらに住まばはなんぢらに宿らばである。これ即ちキリストに屬する者である。  
 キリストに屬する者はキリストと偕に甦へるものである。「死ぬべき身體をも生さる」るも  
 のである。我等の心をして父なる神の行在所とならしめたきものである。住む人の高下に

由つて家は善にも惡にもなるのである。神の靈を最も多く宿して居る人ほどキリストに似  
 たる人、神に近き人である。神に向つて進み行く人は、また神に導かるゝ人である。  
 第二「凡そ神の靈に導かるゝ者はこれ即ち神の子也」(十四節)これは實に萬民にかゝはる  
 福音であつて、古來かくの如くに語つた者はなかつた、聖靈の導きに從ふ者は何人と雖も  
 此幸福に與ることが出来る。これ永生を受た者である。永遠に死を見ざる者、陰府を知  
 らぬものである。「神の子」といふのは決して奴隷の如きが主人の威嚴に屈服する者ではな  
 くして、神の慈愛を味ひ、自由なる心を以て神と交り喜びて其聖意を爲んとする者をいふ。  
 次に彼は永遠く神と偕に住みその榮に與るべき者又神の聖き御性質に肖るべき者をいふの  
 である。これ人間最高の生活であつてこれに優る尊き生活はないのである。武士の家に生  
 れたる者は武士であり、王侯の家に生れたる者は王侯である如く、神の靈に導かるゝ者は  
 神の子である。パウロの如きは此神の子であるといふ自覺に達するまでには何れほどの苦  
 惱を嘗めたか知れない。而して一度此確信に立つた彼は名譽も地位も、其他一切を投げ  
 棄て、勇しくもキリストの僕たるを甘じたのである。彼は茲に其生命の根源を見出したの

である。其生涯をキリストに献げたのである。而して天父を「アバ父と呼ぶ子」とはなつた。

第三、「聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」(十六節)この「偕に…證す」の句を看過してはならぬ。我儕直接神と交りその慈愛を味ひ、自ら神の子等たるを知るも、其上聖靈は我儕を導き助け、此恩に居ることを確證するのである。故に之は單に自分の迷ではなくして、最も明白なる實驗であるといはねばならぬ。即ち神は我儕に聖靈を與へ、我儕の希望は愈々堅固になり、信仰は益々確實になるのである。我儕苟も此證明を心中に得たときには眞正の幸福平和を感じて自ら感謝と讚美との念に満されるのである。いかなる迫害にも、いかなる苦惱にも春野を分けゆく心地して勝利の生涯を送ることが出来るのである。聖靈の證は、まことに百萬の味方よりも心強い。

第四、「我儕もし子ならば又後嗣たらん」(十七節)これは神の子たる者の特性の最も著るべき處であつて、まことに光榮と祝福とに充た言葉である。罪の世界に生れ、誘惑の巷に育ち、憂きなやみの生活を辿る者でありながら、尙ほ神の後嗣たることが出来るとは、何た

る恩寵といふべきか。奴隷は主人の遺産を承継ぐとはできない、而しながら其愛子は、常にその愛護の下にあり、父死するときは金銀田畠凡てその有となるのである。尤とも信者は神に代つて業を受継ぐとは爲ないが、父の榮光に與り、永遠く偕にあるべきを以て、之を喻へて神の後嗣というたのである。

神の後嗣は神と偕に生きて居る者、神と偕に生きて行く者である。であるから現在、よし患難多く、辛苦多くとも、その未來には光明が輝いて居る。希望満々たりである。

以上述べたる所によりて、神の子の特性の一般は終つた積であるが、其詳しいことは到底述べ盡すことが出来ない。願ふは讀者諸君が自ら神の前に祈禱と實驗とに由て限なき聖靈の賜物を得られるやうに努められたいのである。「凡の事…神を愛する者のために悉く働きて益をなすを我儕は知れり」(廿八節)神は人々の榮と福とを常に計り給うて居られる故に人もまた大に神に近づかなければならぬ。

パウロは曰ふ「我等はキリストの心を有り」と我々も何うかしてキリストの心を有て、愛に育ち、信に進み、神に活きたいものである。神の子となりてキリストと偕に働きたい

ものである。

### 五、ロマ書に於ける聖靈の活動

「聖靈も亦我儕の荏弱を助く」(ロマ八)

題してロマ書に於ける聖靈の活動といふのであるが、グレゴ博士の調査によれば、創世記より馬拉基書に至るまで、即ち舊約聖書全體を通じて、聖靈に就きて記す事は八十八回、更に新約聖書に至つては實に二百六十二回の多數にのぼると云ふことである。舊約の方は姑く措き、いま新約聖書のみ就いて、聖靈が如何に活動して居るかを見るに、先づ左の如きものである。

聖靈の如き状にて人に現る(太三の十六)

彼は父と子と偕に呼ばれて居る(太廿九の十九)

人は聖靈に由りて新に生る(約三の六)

彼は生命を賜ふ(約六の六十三)

彼は教ふ(哥前二の十三)

彼は萬事を究ね知る(哥前二の十)

彼は慰む(徒九の三十一)

勿論、これだけで聖靈の活動の全體を盡して居ると云ふのでない、以上は唯僅に其一部分を挙げたに過ぎないのである。聖靈の活動たるや、實に廣く且つ深くして、恰も我儕の肺腑が時々刻々、周圍に磅礴充滿せる空氣を呼吸して生活するが如く、我儕の靈魂は日々新に聖靈の活動を蒙りて生長發達しつゝあるのである。

我儕は上よりの權能、即ち聖靈の恩化に浴するに非ざれば、到底、圓滿具足のものとなる事が出来ぬ。性情の力、脆弱なる自己の力を以て、完全無雜の理想境に達せんとするは、恰も木に縁つて魚を求むるに等しく、其愚や實に嗤ふべしである。傑僧ルーテル曰く、「人間の性情は何物をも確乎として保持する能はず、恰も醉狂者の乘馬に似たり」と、又、パウロはロマ書七章廿一―廿四に於て、「我れ願ふ所の善は之を爲さず反て願はざる

悪は之を行へり嘔われなやめる人なる哉』と言つたが、何れも是れ人間自力の憑むべからざるを實驗し且つ浩歎したものである。斯の如く我儕は自らを救ふ事が出来ぬ。我儕は如何程、努力しても自らの眼の色をすら變ずることは出来ぬものである。故に唯々、詩五十一篇の十にある通り『あゝ神よ我が爲に清き心をつくり我が衷になほさ靈を新たにおこしたまへ』と祈る一事あるのみである。

さはれ、我儕が神の子たるを得るは何たる幸や、實に之は天地間の何物を以てしても易へ難き特權であり又恩寵である。我儕の救はるゝは偏へに神の權能、聖靈の活動に由るのであつて自己の力ではない。我儕が嘗て神より離れ神に遠ざかり神に背きて、罪の生涯に耽溺しつゝありしとき、神先づ我儕を識り我儕を覺え、而して我儕を召し給うたのである。加拉太書四章の九に『爾等は神を識り反て神に識れたりと謂べし』とあるが、實に鴻大無邊の恩寵と云はねばならぬ。

余嘗て海外に在りしとき、左の如き一つの佳話を識つた。或る處にうら若き一人の青年があつた。彼は少にして本國を離れ、異郷にさすさひの生涯を送る事多年、その間たゞの

一度も故郷に音信をせずして過したのであつた、所が一日、ふと故郷の事が胸に浮んで餘りの懐しさに歸心矢の如くなり、遂に遙るゝ海を越えて歸郷の途にいたのである。やがて彼は思ひ出多き古る里の山河に接するや、矢も楯も堪らず、急ぎ吾が家を訪れたのである。然るに何ぞ知らん懐しき父母は最早や其處に在さなかつた。これを聞ける青年の落膽や如何ばかり、暫し茫然として爲す所を知らなかつたのである。時既に日は落ち、暮色蒼然としてあたりをこめて居た。しかしながら隣人によりて父母が他の田舎に移り給ひし事を教へられて、彼は天にも登る心地をなし、疲れし足を踏みしめて更に其田舎へと向つた。寂びしき夕の孤村を、あちらこちら尋ねたが、遂に疲れに堪へずして或る家の門口まで来て仆れた。しかるに不思議や其處が父母の在す家であつたのである。父母は彼の青年の家出せしよりこのかた、唯のひとゝきも彼を思はぬ事はなかつた、雨につけ風につけ我子の上のみ思ひ暮らして居たのである。彼の青年が立歸りしときも父母は夜中にもかゝらず、家の戸を開けて我子の歸るを待つて居たと云ふ事である。

これと同じ様に人間は數々我儘勝手な振舞をなして神の道を離れるのである、天父の無

限の愛を悟らず。天父の聖心を日夜に痛め奉つて悔いがないのである。余は讀者諸君が路加傳十五章十一―卅二を熟讀玩味せられん事を切に希望するものである。余は親愛なる讀者諸君と偕にロマ書を研究すること、茲に一年有餘古語に曰く「誦讀に真趣あり玩味せずんば遂に鄙夫となる」と實に其の通りであつて我儕が聖書を誦讀する真趣は言語に盡し難いのである。前に述べし如く我儕神を識りしにあらざして神が先づ我儕を知り給うたのである。即ち父なる神は先づ我等を鑒み給うたのである(詩十の)讚美歌の第三十五番に

聖なる聖なる 聖なるかな

罪ある眼には 見えねども

みいつくしみの みちたれる

神のさかえろ たぐひなき

とあるが、實に這般の消息を傳へて遺憾なきものである。

然しながら以上の如き天父の至仁至愛を悟り、其御救ひに與かるは、前にも云つた通り、どうしても聖靈の活動を蒙らねばならぬ。余は題意に基いて今、ロマ書に現はれたる聖靈

の活動について列舉せん。

(1) 彼は導く「凡そ神の靈に導かるゝものは是れ即ち神の子なり」(ロマ八)の十四

(2) 神は助く「聖靈も亦我儕の荏弱を助く」(ロマ八)の二十六

(3) 彼は潔む「異邦人を聖靈に由りて潔まらしめ云々」(ロマ十五)の十六

(4) 彼は祈る「聖靈みづから言ひ難きの慨歎を以て我儕の爲に祈りぬ」(ロマ八)の廿六

(5) 彼は「人の心に神の愛を灌ぐ」(ロマ五)の五

(6) 彼は「我儕と偕に在りて神をアバ父と呼ぶことを得しむ」(ロマ八)の十五

(7) 「彼は我儕の衷に住む」(ロマ八)の九

我儕は此の如く聖靈とは密接なる關係を有するものなる事を忘れてはならぬ。我儕は今や舊年を送りて新年を將に迎へんとして居る。殊にクリスマス佳節を迎へんとするに當り、聖靈の力によりて新に生れん爲めに、銘々内に省み、神に祈つて聖靈の活動を豊かに蒙らねばならぬ。斯くて新しき希望を以て讀者諸君と偕に恵まれたる新しき春を迎へんことを、今より天父に祈るものである。

然して、嘗に恵まれたる新年を迎ふると云ふにとゞまらず、銘々益々、傳道の精神に燃やされ、新しき年と偕に大なる決心と希望とを以てキリストの福音を徧く津々浦々に宣傳へたいものである。最後に偉大なる傳道者チャプマン博士の「靈をキリストに導ける七種の人」を紹介することにした。お互に斯かる一人となつて神の國の擴張の爲め努力したいものである。

- (1) ウェールズに於ける一商人が其店舗に雇はれて居る一給仕に其靈魂の救に就きて語りしに其言葉から救の業が始まり全社員をキリストに導くに至つた。
- (2) 英國に於ける一商人は誰か一人にキリストの事を語らざれば一日を過すまじと決心したが一箇年間に二十人餘をキリストに導いた。
- (3) オウストラリヤに在る疾める一婦人の信徒は其病氣のため三十年間起つこと能はざりしが、筆を使ひ而して祈禱をなして一箇年に四十人をキリストに導いた。
- (4) 一クリスチャンの紳士が其多くの仲間とゴルフ遊戯をなして自分の番が巡つて來るまで其仲間の一人に救の道を語り居りしが遂に其仲間が多く信者となつた。而して其後

彼は福音の宣傳者となつた。

- (5) 或る日曜學校の婦人の先生が課業の終りたる後、組の一人の子供を連れて郊外に散歩し彼女は其子供が信者となる様祈つて居ることを告げると、其子供は直ちにクリスチャンとなる決心をした。

- (6) 父あり其子が自己の靈魂の事につき心を注ぐ様にしたいと思ひ千里以上の旅行をなして其子の許に來り而して遂に其子をキリストに導く事が出來た。

- (7) アメリカの或る大都會で一商人が機會の與へらるゝ限り其商法の取引に來る人に對してキリストの事を語りしに聞く者みな彼が熱心に動かされて一人も之を拒むものはなかつた。

以上七つの信仰美談はチャプマン師が世界傳道の砌り實驗された事實である。我等も主キリストの弟子としてかゝる心掛と決心とを以て暗黒の中に煩悶せる人、心の傷る者、大いなる失意の中にある人、患難苦痛を有つ者に向つてキリストの救を宣傳へ永遠の生命に至る唯一の途を指示さねばならぬ。是れ我儕既に召されたるものゝ一大使命であり一大特權で

ある。然れば先づ我儕を慰め我儕を導き我儕を助け我儕を愛し我儕を強くし我儕を悦ばし我儕に平安を興ふる聖靈の御働を豊に身に蒙り一人たりとも多くの同胞をキリストに導きたいものである。是れ余が希望であり又不斷の祈禱である。

## 第二編 パウロの信仰

### 一、萬物の原因としての神

余は今パウロの神觀が如何に著しく本書に顯れて居るか其一端を調べて見よう、神の概念がパウロの信仰生活に取りては如何に重大なる地位を占めて居つたか之に依て了解せられる。我等又畢生の力を込めて之を學ばんには、靈性上に新生命を得ること疑ふべからざる處である。

「そは萬物は彼より出で、彼に倚り、彼に歸れば也」(卅一)

凡て物には原因があるものである、人は此の原因を知らないうちには如何しても心の中に安心が出来ない、のみならず何事をするにも善く之をなすことが出来ない。パウロは物のドン底まで尋ねてそれに打突た人である。羅馬書を讀んで見ると此の事が明白に見える。彼は惟神あることを信じたばかりでなく、又確に神を以て萬物の原因であると信じ、萬物の根柢であると認めて居たのである。醫師が患者を診ても其の病氣の原因を尋ねない間は



充分に治療を施すことは出来ない、病根不明では薬を與ふるに躊躇しなければならぬ。我等が確乎不拔の信仰を得んとするには先づ第一に神に就て最も正確なる知識と經驗とを必要とする、此の點に於てパウロの經驗は眞に深いものである、羅馬書の中にて「神」といふ語のみを擧げれば百七十四回顯れて居る、此の外「主」とか「彼」とかいふ字を加ふれば二百回以上に達する、恰も地中に花岡石が一面に潜んで居るのが諸所に顯はれて居るやうなものである。

神といふ語は第一章中に廿一回、

第二章中に十一回、

第三章中に十七回、

第十一章中に十一回、之に「主」と記せるを加ふれば廿一回となる、

以上は僅にその例を擧げたに過ぎないが、之だけでも彼の心中に神なる觀念の充滿て居るを知ることが出来る。

第十二章一節及二節に於てパウロには短刀直入に「爾曹の身體を神に獻げよ」「自ら變質

せよ」と叫べるも文法上より見れば、此の二個の命令法の後には深長な意味が籠つて居るのである。實に神を深く識らんと欲せば先づ自ら新になり、自ら變化しなければならぬ。次に余は各章を逐うてパウロが斯く熱心に垂示する神は如何に本書中に顯れ居るかを見んと欲する。

(1) 救を得しむる大能の神 (一六)

(2) 寛容なる神 (四二)

(3) 神は一位にして又異邦人の神 (三九)

(4) 死にし者を生かし無き者を有るが如く稱ふる神 (四七)

(5) 愛し給ふ神、恩寵の神 (八五)

(6) (a) 永遠の生命を賜ふ神 (六三)

(b) 死に打勝たしむる神 (六)

(7) 律法の神 (七)

(8) 導く神、アバ父神 (八)

- (9) 権能を顯し給ふ神(九五)
- (10) 祈禱を聽き給ふ神(十一)
- (11) 嚴なる神(廿二)
- (12) 萬物の原因なる神(廿六)
- (13) 慈悲深き神(十二)
- (14) 大權を有し給ふ神(十三)
- (15) 活ける神(十四)
- (16) 希望の神(十五)
- (17) (a) 平安の神(十六)
- (b) 獨一睿智の神(十七)

パウロが堅く立つところの根柢は活ける眞の父なる神である。パウロが汝等の身體を神に獻げよと呼んだ神は斯の如き神である。萬物の神から出たといふことはパウロが生涯の間戦つて得た實驗であつて、彼は之を萬人の前に證明することを憚らなかつた。

人の品位は其信ずる神に由て貴賤を定めることが出来る。又國の文明の程度は其の國民の有て居る信仰によつて評價すべきである、我等はパウロと偕に愈深く彼を知り、彼を求め、彼を尋ね、彼と偕に在りて豊富なる生命を獲んことを期しなければならぬ、而して彼を世に知らしめるは我等の事業にして又特權である。

あゝ神の智と識との富は深いか、其審判は測り難く其踪跡は索ね難し、孰か主の心を知りし、孰か彼と共に議ることを爲しや、孰か先づかれに施へて其報を受けんや、そは萬物は彼より出で、彼に倚り、彼に歸ればなり、願はくは世々榮神にあれアーメン。

### 二、我が神

パウロは神を以て萬物の原因となし「萬物は彼より出で、彼に倚り、彼に歸る」と云うて居るが、更に彼が神を迎ふる態度を學んで見たいと思ふ。

「イエス・キリストに頼りて爾曹衆人に就て我が神に感謝す」(羅一)

「……神は我が不斷汝等を懷ふ其證なり」(同九)

昔時アブラハムは神の友と稱へられたが、パウロと神との間にも真に温かなる親みがあるはれて居た。彼の神は他人行儀の神でもなく、單に先祖の神でもない。彼に取つては神は我が神であつた、神はパウロの證人であつた、彼は神を識り又神に識られたのである、爾曹今神を識れり反て神に識られたりと謂ふべし」とはパウロの加拉太人に對つて云つた言葉であるが、パウロ自身は神の親を得たる人であつた、「エホバの親愛はエホバを懼るゝ者ともにもあり」とイスラエルの詩人が云つたのは即ち此事である。友情なる者は相互に信じ合はうて居る心の中に成立つものである、互に信じて離れぬ處に心を繋ぐ鎖が結ばれて居るのである。「我が神」と云ひ得る彼の信仰の温味は我等の羨ましくて堪まらぬところである。

家と申せば何の家も皆同じ様である。然し我家といふものは格別に温い感じを與へるものである。日暮れて鳥は埒に急ぐとき人は我が家に歸る、此の時一種のなつかしみを忘れる事が出来ない、何處に往くとも我家程心安く又楽しい所は他にないのである。聖書といふも同じ事で自分が長年月用ゐて居るものは特に我が聖書であつて、真に貴き寶である。

パウロは長い間、神に事へて終に神を「我が神と」感じ、妙味を味はひ得たのである。神を信ずる者の信仰は當に茲まで到らねばならぬ。

「夫れ我が神は己の富に從ひてキリスト・イエスにより榮光を以て爾曹の乏しき所を補ひ給はん」(腓四ノ十九)

長き實驗に由りてアバ父はパウロの神と成つたのである。

次に考ふべきはパウロは神に對して感謝すべき神と思つて居つた事である。近づくとも狎れず、嚴として尊ぶべき神と思つて居つた、否大に感謝すべき神として之に事へたのである。彼には感謝の念が胸に溢れて居つた、神に對しては親密であり温情を有つべきであるが、同時に敬虔の念も感謝の心も大切である。

「噫我れ困苦人なるかな、この死の體より我を救はん者は誰や、これ我等の主イエス・キリストなるが故に神に感謝す」(羅七ノ廿五)

「我儕をして我主イエス・キリストに由りて勝を得しむる神に感謝す」

彼は一面に於ては實に報恩の爲に大活動をなしたのである、彼は世界をキリストに献たる偉大の傳道をなしたが、實に是れ報恩の傳道であつた、蓋し恩を感ずることは容易い、而して恩を報ゆることは難い、吾人は彼が報恩の活動振を見て學ぶところがなければならぬ。

報恩は彼に取りては眞に負債であつた、「我はギリシヤ人及び異邦人また智き人及び愚なる人にも負へる所あり、是故に我力を盡して福音を爾曹羅馬にある人々に傳へんことを願ふ、我は福音を耻とせざる也」と。

三、我が心を以て事ふる所の神 (羅一ノ九)

余は既に神は萬物の根抵であり、且つ温き我が神てふパウロの觀たる神について述べたが、今更に進んで彼の神に盡す心の一層濃かなる點について觀察したいと思ふ、即ち「我心を以て事ふる所の神」について考ふるのである。

茲にパウロが我心を以て事ふといつたのは中々に深い意味が含まれて居るのである、彼

のいふ心は眞心である、赤き心である、パウロは神の忠臣として其の精神を傾注して神に仕へたのである、いつかキリストの許に來りて問を發した學者があつた、「諸ての誠の中何れが首なるか」と、答は次の如くであつた、「爾心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して主なる汝の神を愛すべし是誠の首なり」と、要する所は一意専心である、一心不亂となることである、パウロは終生此の心を以て神に奉仕した人である、人は形骸を見、神は心を見視たまふのである、ストウカー博士は其著パウロ傳に於て、哥林多後書はパウロ自身の肖像であると云つて居るが、パウロの心を顯す點は尠くはない、彼は或時には叫んで曰うた、「主の靈のある所には自由あり、凡て我儕素顔にて鏡に照すが如く主の榮を見、榮に榮いや増りて其同じ像に化はる也」(哥後三)と、我等パウロの精神を以て愈神に近づき、パウロの心を以て神に事ふる大精神を學びたいものである。

パウロの言はその肺腑より出でたるものであるが故に、又人の肺腑に透徹するのである、今彼の二三の言を學びたす。

(イ)「是故に我力を盡して」(羅一ノ)

清き流は清き泉に湧く如く、聖く義しき力は純なる眞心より湧き出づるものである。此力を以て神に事ふる者は自然人に向つて道を傳ふるにも全力を盡すに至るのである、パウロの熱情察すべきである。

(ロ)「勤めて怠らず心を熱くして主に事へ」(十二)

勤勉、熱心、主に奉仕するといふパウロの精神を洞察することが出来る、世界に於ける十二大説教の一つとして數へられて居るのは、ピーチャーが此句に基いて其心血を吐いた「日常生 活の宗教」と題する説教即ち是である。

(ハ)「今は既に授けられし神の教の範に心より服ふ」(十七)

教の範とは思ふに六ノ四に云へる「我儕其死に合ふバプテスマに由りて彼と偕に葬らるゝはキリスト父の榮に由りて死より甦されし如く我儕も新しき生命に行むべき也」との句を指すならん、即ちバプテスマを受けし時に彼の舊き人はキリストと偕に十字架に釘けられたるなり、我れ今生くるは我が生くるに非ず、キリスト我に在りて生くる也てふ教の範に心より服従して義の僕となり、遂に聖潔に入り生命を得べきことを自覺したのである。

(ニ)「割禮は靈に在りて儀文にあらず、心の割禮は眞なり其譽は人に由らず神に由れり」

(廿九)

神によりて生れざる異邦人の徒は儀文や辭句に拘泥して高き心靈の峯に登ることを知らない、然し神の見る所は人の見る所とは異ふ。

(ホ)「我が良心聖靈に感じて……心に耐へざる痛あることを證す」(九二)

良心は何人も有して居るが、聖靈に感じたる良心は多くないものである、罪を悔ゆる此心はパウロの崇高なる性格を現し、同時に彼が心の純潔なるを證するものである、又同胞の救はれざるは彼に取りて大なる憂であり又心に耐へざる痛である。

(ヘ)「道は爾に近く爾の口に在り爾の心に在り……爾心にて神の彼を死より甦へらしむを信ぜば救はるべし、それ人は心に信じて義とせられ、口に認はして救はるゝ也、是れ即ち我儕が宣ぶる所の信仰の道なり」

とパウロは斷言したが、眞に信仰の道は單純であり、容易である。僅に唯スイッチを一轉せば一個の小さい電球が忽ち光明を放つて一室を照すよりも尙容易である、如斯唯二つ

の救の條件は「心にて信ずる事」と「口に認はす事」とである、自ら心を以て神に事へたるパウロは、人々にも如斯に要求するのである。

(ト)「爾曹神の全く且善にして悦ぶべき旨を知らんがために心を化へて新にせよ」(十二)凡そ信神の妙味に至らぬは人の心の頑強なるに由るものであつて、之がために折角の救も折々その機会を逸がすのである、其の方法は心を變化することである、結局は神の全く且善なるを知ることである。

以上數個の引照は即ち心を以て神に服従するパウロが實驗上の活教訓であつて、而も其の心眼を啓いて明かに神を認めたる心中の苦闘史である。

パウロは自らを呼んで「キリストの僕」(一)といつて居るが、十五ノ十六にある「僕」なる字は(一)に於けるものと異つて居る、此處にある僕なる字は原文にては祭務を司る者即ち役者を意味して居る、何れにしても彼が其の心身を献げて神と人にとり奉仕する偉大なる精神を現して餘りある。

茲輩有憂師代傷 茲輩有喜師代歡

嗟乎牧師虔誠人 身在塵世心在天

とゴールド、スミスが荒村牧師を歌へるは正にパウロの心を歌つたものである、彼は實に神の人とも云ふべき人物である。彼自ら「召されて使徒となり神の福音のために選ばれる」(一)と謂うたのは決して偶然のことではないと思はれる、ストオカーはパウロがエペソの長老等に告げた語を見て、パウロは眞にハートの人だと云つてゐる。(徒二ノ十七)

#### 四 我等の父なる神 (一ノ七)

天地の神は眞理の神であるの祖先の靈であるのと云ふ學者達の見解と較べて見るとパウロの觀たる神は實に天淵も管ならぬ相異がある。學者達の考へて居る神は血の氣のない造花の様な神であるが、パウロの神は恩愛に満ち給ふ天父であるといふのである。祈を聴き、感謝を悦び、讚美を樂み、將た求めざる前に萬物を愛子のために備へ給ふ愛の父君である。乏しきを賑はし、寂しきを慰め、勞たるを癒し給ふ。寔に三千世界波風荒しと雖も天父と偕に居る時は胸中何の恐がありません。到る處春野の心地で世渡りが出来るのである。此

世に於て匿れたる處にても我儕を見護たまふ父君の在し給ふことを知らぬ人々は誠に氣の毒な情ない人達である。

爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懐く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり。

り。(八十五)

アバ父なる言は聖書中三回用ゐられてあるが、其二回はパウロが言ひ出し一回はキリストに由つて言はれてある。アバとはシリヤ語にして「我父」といふ意味がある。然かも慈愛に富める我父といふ温和き親子の情愛を示して居る。パウロは生れながらの學者であつたが、神をばアバ父と呼び彼に感謝し心を以て奉仕へその父なる神と温かなる情交は日に増し濃かになつて行つた。されば彼は神に總を信賴した。嬰兒が僅に父ちやん／＼と言ふ様な心を以て神を信任した。茲に始めて理想の孝子と成り得たのである。人の生涯の中でその最も楽しい時代は何時の頃であらうか、兩親の膝に抱かれて餘念なく語り暮す幼年の頃ではなからうか。我儕も幼兒の如く罪なき心になつて天父と語り、彼と偕に歩み、彼と偕に働らき、そして彼に愛でられる生涯程此世に樂いことはないと思はれます。

「忍耐と安慰を予ふる神：爾曹をして心を一にし口を一にし神すなはち我儕の主イエス・

キリストの父を讚美し崇しめ給はんことを願へり」(五十六)

神は我儕の父であると同時に又キリストの父である。キリストも天にアバ父を呼び給はずには一日も安んぜられなかつた。キリストは實に親思の孝子であつた。父に祈り父に謝し、父の聖旨を成就することを以て畢生の事業とせられた。「何故我を尋る乎我は我父の事を務むべきを知らざる乎」と言はれた。

キリストの神觀が如何にパウロの信仰に影響を與へて居るかを調べることは甚はだ面白いことである。

神は父であるといふことはキリストの叫びたまへる福音の骨髓である。今キリスト王國の憲法とも稱すべき山上の垂訓に於ても父といふ名が最も重要な地位を占めて居る。其中に「父」なる名が十六回も出て居る。「天に在す爾曹の父」といふ語は夥しく使はれてある。神の子等は「天に在す父の如く完全く」なるのはキリストの理想である。主の教訓中父といふ名は數々散見するところであるが、主の御生涯の最初から最後まで父といふ御考は寸

刻もその胸中より離れなかつたのである。主は將に此思想を以て其御一生を貫かれたのである。得意の時も苦惱の日にも。

パウロの書翰を通觀するに、彼の思想の中に著しく山上の垂訓の反響ともいふべきものを見出すことが出来る。彼が心魂の底よりアバ父と叫んだ温情はキリストのそれと甚だ似通うては居らぬか。

パウロの書翰を読み、その事業と一生の活歴史とを讀もの、誰か彼が父なる神に對する燃ゆるが如き熱情を感じぬものがあらうか。パウロの信仰は、源を茲に發して居るのである。

是故に我儕信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり此は我主イエス・キリストに頼てなり(五ノ二)

パウロの觀たる神は其一面においては實に温い神であつた。情愛の濃かな天父であつた。罪人が天地の神と和ぐといふのは容易なことではない。然かもパウロの心にはこの神は母よりも温かい情愛の神であつた。壯烈火の如きパウロが赤子の如くに泣きすがつた神

は確に温かい神として彼の胸に映つたに相違ないのである。然に彼は一體誰に頼て斯も温かい交際を神と結び得たのであらうか。我々はこの一事を見逃してはパウロの精神が解らない。此は我主イエス・キリストに頼てなり」と證して居る。これより彼がキリストを通して觀たる神と自ら味たる宗教的經驗とに就て彼に學ぶ處あらんとするのである。彼はキリストに於て神を觀たるものであるからである。神と和いで受けたる賜物は次の如くであつた。

(一) 平安「我儕神と和ぐことを得たり」(五ノ一)

神と和ぎて受くる處の賜物は先以つて神の平安である。人が與ふる平安は神の與ふるそれとは較ぶべくもない。これは永遠の平安である。心に平安を與へられんか、其人の生涯は平安の生涯に入るのである。世に之に優る一生はないのである。神と和ぐその安けさに我平安を爾曹に遺す我平安を爾曹に予ふ我予ふる所は世の予る所の如きに非ず爾曹心に憂る勿れ又懼るる勿れ。(約十四ノ二七)

(二) 恩寵「今居ところの恩に入ることを得」(五ノ二)



宗教は冷めたい哲理を談ずるところに生命はない、恩寵滴る如き神の慈愛の情に根ざしねばならぬ。嚴の如きパウロの心にこの優しき思を起さしめ、殆どその念を溶けしめたるは神の恩に外ならないのである。

イエス・キリストの僕パウロ召されて使徒となり神の福音のために選ばれる。我儕彼より恩恵と使徒の職を受く。(二)五)

(三) 歡喜「我主イエス・キリストに頼て亦神を喜べり」(五)一)

神を喜ぶところの人は福な人である。世には楽しいことばかりはない。嘆と憂とは誰人の胸にも襲ひ來る潮である。見よ煩惱の嵐のいかに凄まじく狂ひ廻るかを、然も心機一轉すれば神を喜ぶの生涯となる。神と和らぐの人となると、何の喜びか之に優るものがあらう。

(四) 永生「イエス・キリストに頼て永生に至らせん！」(五)二)

これ實に宗教の極致である。永遠の生命をキリストは與ふる爲に世に降られたのである。世に寶の數は限りなく有るが永生に優る寶は何處の國にあらうか、パウロは之を

望んで神へと馳つたのである。

(五) 勝利「すべて此等のことに勝得て餘あり」(三)七)

基督教的の生涯はキリストに據て勝る生涯である。勝得て餘ある生涯とは何たる心強い言であらう。世には負けた人の惘れな姿も多か、此方は勝利の生涯である。パウロは之に在りて確に此世に勝たのである。

(六) 能力「我は我に力を予るキリストに因て諸事を爲得るなり」(四)三)

事業には能力を要する、戦にも能力を要する。生きるにも能力を要する、我等は單獨にて世に向ふときは實に乏しき者であることを感ずる、罪に克つ能力、神に進む能力、主を仰ぐ能力、總において貧しきものである、パウロもしみじくと自らの微力なことを感じた。然もキリストに因て諸の事を爲し得るとは何たる福音であらう。パウロの實驗には活て働く命がある。

以上においてキリストを通して神より受たるパウロの恩寵の廣大なるを述べたのであるが、更に讀者の前に語らねばならぬパウロの言が残つて居る。即ち次に列記する如くで

ある。

- (1) 「我儕彼より恩恵と使徒の職を受く」(ロマ二)
- 「我は主イエスより受けし職 即ち神の恩の福音を證することを遂ぐたためには我生命をも重ぜざるなり」
- (2) 神イエス・キリストを以て人の隠微たることを鞠ん日に成べし」(二六)
- (3) 「キリスト・イエスの贖に頼て神の恩を受け 功なくして義とせらるゝ也」(三四)
- (4) 「我儕信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり此は我主イエス・キリストに頼てなり」
- (5) 「我儕の主イエス・キリストに由罪に就ては死ぬるもの神に就ては生る者なりと意べし」(六一)
- (6) 「罪の價は死なり神の賜は我儕の主イエス・キリストに於て賜はる永生なり」(六三)
- (7) 「我兄弟よ汝等もキリストの身により律法に就て殺されたるものなり」(七)
- (8) 「噫我困苦人なる哉この死の體より我を救ん者は誰ぞや是我等の主イエス・キリストなるが故に神に感謝す」(七、二五)

- (9) 「イエス・キリストに在る者は罪せらるゝとなし」(八)
- (10) 「蓋活す靈の法はイエス・キリストに由て罪と死の法より我を釋せばなり」(二)
- (11) 「我儕：キリストと偕に神の後嗣たる者なり」(八七)
- (12) 「我儕を愛める者に頼り此等のことに勝得て餘あり」(三七)
- (13) 「或は死或は生：我儕を我主イエス・キリストに頼る神の愛より絶すること能はざるものなるを我は信せり」(三九)
- (14) 「我キリストに屬る者なれば我言は眞にして偽なし」(九)
- (15) 「各人キリストに於て一體たれば亦互にその枝たるなり」(十二)
- (16) 「我は主キリストに由て凡ての物潔ざるなきを知り且つ之を信ず」(十四)
- (17) 「我神の事に就てはイエス・キリストに由て誇ところあり」(十五)
- (18) 「兄弟よ我儕の主イエス・キリストにより聖靈の愛に縁て爾曹に勸む」(十五)
- (19) 「請ふブリスキラとアクラに安を問彼等はイエス・キリストに屬て我と共に勤る者なり」

- (16三)
- (20) 「我に先ちてキリストに居りし者なり」(十六)
- (21) 「キリストに於て鍛錬なるアベレに安を問へ」(十六)
- (22) 「主に居る者」(十六)
- (23) 「彼等は主に於て苦勞せし女なり」(十六)
- (24) 「我キリストに於て爾曹に安を問ふ」(十六)
- (25) 「：イエス・キリストに由て在んを願ふアーメン」(十六)

右の如くに許多の引照を擧げてキリストを思ふ時は、眞にキリストは我等の避所である、ダビデと偕に「汝はわが巖わが城我を救ふもの我よりたのむ神：我高き櫓なり」といはずを得ない。キリストは我等の靈魂の置き處である、生命に入るの途である。否生命である。又我活動の區域である。此區域を脱しては何も出来ない、僅か三錢の切手を貼つて親書を全國に達することを得るが如く、我等はキリストの名を以て何の所にも入ることを得るのである。

讀者諸君よ、希は主キリストに由て生命を得、以て精神を新にし、神の國を同胞の間に擴張するとの出来る様に。

### 五、パウロの有てる神の國

神の國は飲食にあらす惟義と和と聖靈に由れる歡樂にあり(羅馬書十)

「神の國」なる語はキリストが其の生涯の間、力を籠めて語られたものであつて「神の國は手に於てあり」との思想は彼の言行に終始伴うたものである、ヘンリー・ドラモンドが先づ神の國の意義を解しなければキリストの道を悟ることは出来ぬといふたのは眞理である。パウロは羅馬書中に神の國なる語を唯一度だけ使つたが一字千鈞の重みがある、我儕に將來顯るべき榮光の國を望み、之を背景として今日の社會を見て居るから、此の社會の眞價を認めるのである。神の國は手中に在りとの聲を聞いてパウロは靈覺の眼を開いたのである、而して茲に新なる世界を發見した。神の國は即ち新世界である、生命の世界であり、自由の世界であり、榮光不朽の世界である、神の愛の誠律の行はるゝ處、聖なる靈の

原則の守らるゝ處これが神の國である。

パウロは今や其胸に大志を抱いて羅馬帝國の中に神の國を建設せんと欲し此國の性質を人々に知らしめんとした、宛かもイエスが山上の垂訓に於てその神の國の民の資格を告げられたと同じやうである。又哥林多前書第十三章に信・望・愛の三點を高調したやうに茲に義・和・聖靈の歡樂を掲げて神の國に住む者の眞相を發表したのである。

キングダム（國）なる語はキング「王」とドム即ちサクソン語の「領地」即ち王の領地又は權威或は政治を意味する、新約書中には色々に使用せられて居るが、天の國なる語は馬太の好んで用ひた語で、其の書中には三十二回程あらはれて居る、馬太傳は王國の福音であつて、イエスをば天の國を地上に建てんがために世に臨りたまへる眞の光として述べたものである。其の他に父の國、又は子の國、又は我國として各所に記されてある、時にはキリストの國とも録された。

(一) 義

パウロの信仰は「義第一」である。「饑渴く如く義を慕ふ者」といはれたイエスの語は、

パウロの全身に響きわたれる神の聲である。孟子の所謂生亦我所欲也義亦我所欲也二者不可兼得舍生取義也との武士的精神は、移して神の國の民の資格と見るべきである。義は國を高くし罪は民を辱かしむと教へられたる猶太人に取りては昔より義とせらるゝ一事は實に生死の別れ路であつた、義人とせられることは最高至上の祝福であつた、ロマ書中、パウロが「義」又「義とし」又は「義とせらるゝ」の語を擧ぐることに幾百回に及ぶ、單に義といふことだけを見ても三十八回ある。義とせられたりといふ語は第四章のみにても十五回書された。神の國が此の「義」と如何に密接な干係があるが推測せられる。義は大和武士の魂であつたやうにパウロの魂であつた、彼は自ら罪人の首であるといつて居つたが、此の義とせられたる生涯に受入れられて義の器となつた、神は元來義なる神であるから義を求めたるパウロを義人となしたまうた、最初彼は律法に由て義人たらんとした、深く研め博く學び、嚴しく行ひ、大に努め、律法に由れば虧なき者となり、熱心に由れば教會を責むる者となつたが、彼の心は義とせられなかつた、深遠な學識も、嚴重な戒律も、他宗攻撃も、自己反省も、終に何の得るところがなかつた「只イエス・キリストの贖に頼りて神

の恩をうけ功なくして義とせらるゝ也」(三ノ)との確信に達して神の國は彼に臨んだのである。我儕信仰に由りて義とせられたれば神と和ぐことを得たり」といふに至つて彼は手の舞ひ足の踏むところを知らなかつた。

(二)平和

既に義とせられたる福を説いた以上、其の自然の結果として彼は茲に神に由る平和を告げずに居られなかつた。義の果としての平和は此世の所謂平和ではない、國や人を對手の平和ではなくして神より賜はる平和である。キリストの生涯は其の始より終りに至るまで枕するに處なき慘たるものであつたが、其の内の生活に至つては露ほどの紊れもない平和の一生であつた。パウロも亦然りて、彼の三十年の後半生の生活は實に終まで戦争であつた。然し彼の信仰生活の一面を見るならば、此世の人の味うて居ない神的恩寵の生涯を経験して居たのである。「四方より患難を受くれども」といつて其間に言ふべからざる平安を握つて居た。これイエスの「我平安を爾曹に遺す我平安を爾曹に予ふ我予ふる所は世の予ふる所の如きにあらず爾曹心に憂ふる勿れ又懼るゝ勿れ」といはれたる其の賜物を有つて居

たからである、「和」といふことは義と同様羅馬書全體を通してあらはれて居るパウロの大思想である。彼の神の國は平和の國である。

パウロは神とキリストとを以て平和の源泉として居る。「汝等願くは我儕の父なる神及び主イエス・キリストより恩恵と平安を受けよ」これ彼の必ず冒頭に述べずにはおかぬ挨拶である。眞の平和を世に與ふるものは神とキリストとを除ては他にないと彼は信ずるのである。茲に注意したきは「神と和ぐ」とである、神と和ぐに至つて人生最大の平和が來るのである。彼は本書の巻頭に「平安を受けよ」と祈りて更に其の巻末に於て温かなる態度を以て神に祈て居る「望を予ふる神の爾曹をして聖靈の能に由りその望を大にせんがために爾曹の信仰より起る諸の喜樂と平安を充しめ給はんことを願へり」(十五ノ)「平安の神なんぢら衆人と共に在さんことを願ふ」(十五ノ)といつた。されば彼はキリストの救を知らぬ猶太人及異邦人等に對して「彼等は平安なる道を知らず」といつた。彼は實際生活の立場に立つて平和を告ぐることを以て是亦平安を得る途と悟つた。故に若し我れ福音を宣べ傳へずば實に禍也と記したのである。「和平」なる言を宣べまた善きとを宣ぶる者の足

は美はしきかな」と古の預言者は言つた。次に平康は無條件に天より降つては来ない、「すべて善を行ふ人には榮光と尊貴と平康とを以て報ゆべし」(二一)とある如く平康は善を實行する者に對して父なる神より與らるゝ報酬である。「肉のことを念ふは死なり靈の事を念ふは生なり安なり」(五八)我儕の心意が神の聖旨と一致する所に眞の平和は臨むのである。

(二) 歡樂

神と和ぎ得たる者は更に歡樂の生涯に入るのである。パウロは苦痛の人であり悲みの人であつて又偉人の有する憂の姿があつた。同時に彼はイエス・キリストより恩恵と平康とを豊かに受けて身に降りかゝる無量の患難を聖化した。「憂ふるに似たれども常に喜び」と言つて動かなかつた、元々基督教は喜びの宗教である、キリストは山上の垂訓に於て既に明言して居る、福也の連發である、福なる者が喜ばなければ何人が喜ぶであらうか、「我ために人なんぢらを誦誦また迫害いつはりて各様の悪言をいはん其時は爾曹福なり喜び樂め天において爾曹の報賞おほければなり」である。パウロの實驗するところに由れば「患難にも欣喜をなせり」といふに至る。

神より賜はる喜びは其の聖靈の能の働くところに特色がある。聖靈に由れる歡樂は眞正のものである、而してこれは神の榮を望むことによりて來る欣喜である、將に來るべき神の榮をば地上の患難の上に反映して現在の患難に勝つのである。本書第五章に現はれたる欣喜は原語は誇りである又は榮譽とも譯さるべきである、パウロは其理由を記して曰ふ「こはわれらに賜ふ所の聖靈に由りて神の愛われらの心に灌慨ばなり」と、神は其の聖靈に由りて愛を雨と降り灌がせ給ふのである。此の愛彼れの衷に充實して彼は患難を物ともせざるに至つた「我等を愛める者に頼り此等の事に於て勝ち得て餘りあり」といふ凱歌となつたのである。更に彼は告白する「唯此のみならず我儕に和を得させ給ひし我主イエス・キリストに頼りて亦神を喜べり」といふに至つては實に歡樂の絶頂である。人生の大眼目も茲に至て成就せられたものである。基督者の欣喜はすべて神の中に存する。

- (イ) 彼等は曾て「弱」かりき (五)
- (ロ) 彼等は「不虔者」なりき (五)
- (ハ) 彼等は「罪人」たりき (五)

(三) 彼等は「敵」たりき(五)

然るに今や信仰に由りて義とせられ、神と和ぐことを得且神に近づき、神を喜ぶことを得るとは何たる歡樂であらう「我はエホバによりて樂しみ我救拯の神に由りて喜ばん」(哈三八)である。

余嘗て或る地方に傳道に往き盛大なる集會の後に一有力家と一夜を過したことがある。其時に彼は自分の長い經驗から思ふところを余に告げていふには「先生自分等は毎日俗事に映掌して居り、罪惡とか苦痛とか患難とかに日々逢て居るから、せめて教會に來りてモット多く光榮の方面、歡樂の事柄を伺ひたいものであるが、多くの先生方は罪惡と苦痛との方面に力を籠めて語られる、然しキリストは此點は如何でしたか、歡喜の方面などは仰せられなかつたでせうか」と尋ねられたことであつたが、至極尤もな質問であると思ふ。罪と惱と悲との多いこの世の中に欣喜の宗教を拒む者は誰であるか、これ世を照す眞の光であるものを。パウロが三十餘年の奮闘の生涯に於て其心に有てる神の國は實に以上の如きものであつた。義とせられぬ平和は一時的のものであり、平和を伴はぬ義は冷たいもの

である、而して唯聖靈に由れる歡樂は此の二者より生れ出づるものである。茲に新天新地は展げ、永遠の生命は漲り、神の國は建設せられるのである。

## 六、パウロの見たるキリスト復活の意義

一

「彼は肉體に由ればダビデの裔より生れ聖善の靈性によれば甦りし事によりて明かに神の子たる事顯はれたり」(ローマ一の三、四)

此は使徒パウロの信仰の告白である。アール・ダブリユ・デール博士は其名著「贖罪論」(二〇八頁)に於て、ペテロを希望の使徒とし、ヨハネを愛の使徒となし、而してパウロを信仰の使徒と稱へて居るが、予はパウロを以て復活の使徒と稱へたいのである。

冬至りて山野雪に埋るゝ頃になれば、草木其の葉落ち、枝瘠せて、到底其中に生命宿れりとも思はれないが、一陽來復すれば、今まで枯れ果てたりと見えし草木は忽ち復活し、新しき芽萌え出で、百花繚亂の美觀を呈するに至るのである。誰も培はぬ野育ちの草木す

ら春の光に遭へば斯くの如く其冬枯の姿より復活し来る。況や萬物に冠たる人間に復活と云ふ事實あるは自明の理である。未だ信仰の門に入らざる人々は死を以て萬事の終りなりと解釋して居る。随つて死の事を屢々「臨終」「末期」「終焉」などと云ふが之等は皆神を識らざる人々の用ひる言葉である。されどキリストを信じ神と偕なる生活を送れる吾人には死は萬事の終りでない。死はより大なる、より聖なる、より自由なる新世界に入る光榮ある凱旋の門である。即ち吾人は人間に復活あるを堅く信じて動かぬものである。是れ基督者の信仰である。ヴァクトル、ユウゴオは齡八十にしてなほ壯者を凌ぐ盛なる意氣と希望とを有つて居つた。彼は其未來觀を表白して「予は予に未來の生命の存するを感ず、予は切り倒されたる林の樹の如し、新鮮なる萌芽は彌強く彌活潑に斷株より發生するを見る、予は天上に向つて登りつゝあるを知る」と云つた。又フレデリツキ・ロバートソンが詩五十一篇に就いて爲したる説教の冒頭に下の如き趣味多き言がある。「人間に不思議な本質が二つある。一つは地獄に近い物であつて、一つは神に近いものである。即ち半分は惡魔、半分は神である」……我等が如何程最善の状態に在るとも、尙何かそこに純ならざる

惡魔に似寄つた或る物が存する。又我等が最深の墮落の状態に陥るとも、尙ほ汚されざる又尊嚴なる或る物が裏に儼として存在する。是れ人間の最良の性質を證明するものにして如何なる惡の力も滅ぼす能はざる尊き生命の種である。人間には銘々罪の境遇より死の狀態より復活し得る。又永遠に存在する生命の種子が神より授けられてある。「外なる人は壞るとも内なる人は日日に新なり」とパウロの言へるは即ち是である。

二

「キリストは父の榮に由りて死より甦る」とロマ書六章の四節に明かに記されある如く、キリストの復活は父なる神の大能の然らしむる所である。而して其復活によりてキリストの神の子たる事が明かに顯はれたのである。(ロマ一)キリストの十字架の死を見て意氣沮喪し、意氣地なくも離散逃亡せる使徒等が、衝天の意氣を振ひ起して再び傳道を開始せる所以のものは甦れるキリストを目のあたり見たからである。使徒等の生命と活動との根源はキリストの復活であつた。キリストの復活は歴史上一動かすべからざる確なる事實であると共に、此は福音の眞髓である。若しキリスト甦へらざりしならば吾人の傳道も吾人の信仰



も共に空しきものである。(コリント前書 十五ノ十四)

復活の大使徒パウロは聖書の中にキリストの復活を記すこと廿五回の多きに上つて居る。其中の一度は歴史的キリストの復活に就て記してある。即ちロマ書一の四にある「甦りし事によりて明に神の子たる事顯はれたり」と云へるは其れである。其他の六回は、キリストの復活は我等の軀の復活の質とし又望として、將來を指すもので而して此六回の内五回丈はコリント前書十五章に含れ、復活が現在の生命に對する關係を指す者である。其他の十九回の引照は何れも現在の生命と密接の關係を有するもの、而して復活と各信徒の精神的經驗とは離すことの出来ないものとして指示されて居る。

パウロがロマ書一の四に於て「彼(キリスト)は甦りし事によりて明かに神の子たる事顯はれたり」といへるは、高められたる聖められたるイエス・キリストは眞に神の子なる事を證すると共に此甦れる榮光のキリストより使徒の職を受けたれば自分はキリストの使徒として偉大なる權威を有するものなりとの自覺を示すものである。パウロが熱心に論ずる救の中心とも云ふべき復活はロマ書の重大なる要素である。復活の事實がロマ書の根柢と

なり居るは、恰も地層の下に伏在せる花崗石が此處に彼處に露出せるに似て居る。

三

ロマ書四の十七に「死にし者を活かし」。同八の十に「靈魂は義によりて生きん」とある原文にては兩語共に強鏡なる文字を使つてある。復活は救の中心權威として現はされてゐる。我儕が義とせらるゝも均しくキリストの復活に基き、又我儕が聖とせらるゝもキリストの復活によるのである。復活の問題はロマ書中左の個所に明瞭に彰はされてある。讀者諸君思を潜めて研究せられん事を希望する。一の四、四の十七、廿四、廿五、五の十、六の四、五、九、七の四、八の十一、卅四、十の九。約翰第一書の一節に「それ我儕が聞き、また目に見、ねんごろに觀、わが手さはりし所のもの」とある如く使徒等はキリストの死と復活とを親しく目撃したのである。而して其の見た所聞いた所を憚らずして多くの人に語り聞かせたのである。然しながら使徒等の證明に力の加はつたのは單に歴史的事實のみではなかつた。彼等が復活につき強い證明を爲し得たる所以は、彼等自身が其の復活の生命を體現したからである。

今日我儕が之を證明するにもキリストの復活は歴史上の事實であるとのみ云つたのでは不十分である。先づ銘々が聖靈の恩化によりて之を體得し、復活の事實が自己の生命とならねば、千言萬語を費すともキリストの復活を力強く證明する事が出来ないのである。パウロがダマスコ途上に於て復活のキリストに親しく見え且つ語りしのみならず。彼自ら其場に於て奇しき復活の能力を體得したのである。我儕斯くするには如何にせば宜きか。先づキリストの聖言を學び且つ味ひて其御心を識り、而して聖靈の恩化を蒙らねばならぬ。即ち我儕は二千年前に地上に生活し、十字架に釘けられ死にて葬られ三日目に復活せる史上のキリストでなく、昨日も今日もいつまでもかはり給ふ事なく、永遠に存在して、信ずる者と偕に住み給ふ活けるキリストを我身に體得し、彼の尊きと榮えと其復活とを萬民に證しせねばならぬ。キリストの死と復活とは救の土臺である。

パウロの信仰に由れば「イエスは我儕が罪のために付され又われらが義とせられんために甦へらされたり。即ち主の復活は「我儕が義とせられんがため」である主の復活と聞いて驚かされたる我等はパウロの此の信仰に由つて更に愕かされるのである。復活の傳説は

必ずしも耳に新しきものに非ず。而かも我等が義とせられんために主甦へり給うたと聞いて鈍き我儕の心も躍らざるを得ないのである。キリストの復活は決して單獨孤立の行爲ではなかつた。「我等のため」であつた。榮光の君は罪深き我等の魂を離れ給はなかつた。神は愛なりとの聖言は此處にも證明されて居る。「我儕若しキリストと偕に死なばまた彼と偕に生きんとを信ず」我等は主と生死を偕にするのであるから、主と偕に死なば又主と偕に生きるのである。我等は主と偕に生きる者たることを考へて、衷心より喜悅に満たされるのである。

四

茲に特に注意すべきは我等はキリストと偕に結合するといふことである。人は自らの力を以て義人となることは出来ぬ。又聖別せられることは出来ぬ。或る他の力を受けなければ到底生れ變ることは出来ぬ。パウロは羅馬書の中に「これ別人即ち死より甦へされ給ひし者に適きて神のために實を結ばんとなり」(四七)と死より甦へらされたるキリストと一致の生活を送り信仰に由り、聖靈を以て彼と配合し得ば將に神のために實を結び榮光を

輝かすことが出来るのである。永遠に活けるキリストとの縁組によつて完き救を實現するに至るのである、此實といふは愛と歡喜と平和即ち神と調和せる心的状態をいふのである。「我儕若し彼の死の狀に等しからば亦かれの復生にも等しかるべし」(ロマ六)キリストと偕に居住するとか又キリストと偕に歩むとかいふ思想は強い言葉ではあるけれども本文には更に一層強い深刻な意味が含まれて居る、即ち主と全く同化する、主の性質を受くる、主に屬ける者否主と同一體になるのである。本文「等しからば」は接合を意味して、接木されて生長しつゝある状態を示すのである。之に由て見れば復活は成長である生命の君たるキリストに扶けられて益々生長發達して往くことである。キリストと一致平行して生命に進むことになるのである。凡て我儕帕子なくして鏡に照すが如く主の榮を見、榮に榮いや増りて其の同じ像に化はるなりこれ主即ち靈に由りてなり」と。

元來受難と復活とはキリストの全生涯を支配して居つた思想であつた。これは主の使徒たるものは須らく受難と復活とを貫いて居る強い信仰を有つて堅實なるクリスチャンとなり忠實なる僕となつて地上に神國發展のために努力せなければならぬのである。主曰く。

「我が居る所に爾曹も居らしめん」とキリストに在る者は日々に新たに化せられて將に天に昇るべし。

七、パウロはキリストを誰とする乎

パウロはキリストに於て天父の神を信じたのである。キリストなしにはアバ父はないのである。彼は神の子なる主を誰と見たのであるか。

彼は肉體に由ばダビデの裔より生れ聖善の靈性に由ば避へりしことに由て明かに神の子たること顯れたり。(一ノ四)

パウロが有て居つたキリスト觀の中心點は主の復活にあつた、復活を除いては主は神の子でないのである。彼が使徒の職を受けたのは復生れるキリストに由るのである曰く「彼より(即ち復生れるキリストより)使徒の職を受く」とパウロが傳へた福音の根柢は又實に復活のキリストである。

アブラハムは其信ずるところの神すなはち死し者を生し無ものを有し如く稱ふる神の前

に於て我儕衆人の父たるなり。(四七)  
パウロが福音の眞髓であり救の中心勢力であつたのは實に復生れるキリストであつた。彼が胸中に燃えて居た信仰も愛も望も實にこの復生れるキリストの力に勵され強られたのである。それ故にこそパウロの信仰は生命があつた。活て居たのであつた。復生れるキリストの力を信ぜぬ人の信仰は長く生きて居ないのである。猛火の如きパウロの信仰の底には實にこの力が燃えて居たのである。此思想はロマ書中の所々に散見するところであつて、恰も地の基礎たる巖石が其頭角を地の各所に彰はして居る様なものである。我が日本に於ても今少く此復活の信仰を抱に至つたなら教界は確に春めいて来るに相違ないのである。

キリストもし甦へらざりしならば我儕の宣るところ徒然また爾曹の信仰も徒然からん。(コリント前十五ノ十四)

主の甦へりを信ぜずばその人の信仰空しと斷言せるパウロの心中を汲めば彼の信仰躍如として眼前に浮び来るにあらずや、嗚呼罪に死して生命に甦へる福音此世に無からんか、世

は常闇の荒野と異ならぬであらう。

第二キリストの甦りは何のためであるか。

我儕もし我主イエスを死より甦らし、神を信ぜば同く義とせらるゝことを得べしイエスは我儕が罪のために付され又われらが義とせられんために甦らされたり。(四ノ二四)

主の甦りの奥義は甚だ深い、悟ること容易でない「われらが義と爲られんため」とは實に救の秘義ともいふべきである。人は神の前に義とせられて始て神の子たる自覺に達したのである。即ち救れたのである。「アブラハム信仰に由て義とせられたり」とは彼の叫びである。義とせらるゝことは基督者の理想である。其人の罪未だ死せず、その人未だ義とせられずしては、富むも名あるも何かせん、活きるも將た功なしである。彼に由て義とせられて人は神の子となつたのである。我儕をして彼の甦へりに由りて義人たらしめよ。晨に義人たらんか、夕に死すとも悔なしである。

第三パウロはキリストを「挽回の祭物」と觀たのである。神はその血によりてイエスを立て信ずる者の挽回の祭物となし給へり。(ロマ三ノ二五)